

Act 4.

Under the flag of “ Cloud ”

✦— Physical phenomenon is zero,
because it is physical phenomenon. ✦—

Act 4. Under the flag of "Cloud"

✦—Physical phenomenon is zero, because it is physical phenomenon. ✦

15 ともだちふえたよ

土砂降りだった。

烈風れつふうがそれを水の弾たまに変える。水平に飛ぶ瀑布たきだ。

岩や幹みきや窓ガラスをはげしく撃うつ。

ちよつとでも外に出ようものなら、

「イタツ、いたたつ、痛いっ、っ、冷たーいっ」

あわててキャビンにもどるハメになる。

難民たちも、この尋常じんじょうじゃない風や雨になぶられ、なぐられてい

るにちがいない。はやくなんとかしなくっちゃ。

一瞬、バリユースを見たような気がした。

風雨のなか、かんぼく灌木と岩のかげ陰にかくれるようにあたしを見ている……キャビンにもどつて、もういちど、眼をこらして見ると、そのすがたは……なかった。

せすじ さむけ背筋に寒気が走る………

きつと、幻よ。さあ、しっかり現実を見なくっちゃ。

ゴルガストとうげ峠はそのぶきみなすがたを、ヴォゼヘルゴとレオン・ドラゴとの国境にさらしていた。つるつるぬめるようなおうど黄土いろの岩でできた小さな山で、樹木がなく、どくろ髑髏のようなかたちをしている。

ハグレーポルガ軍はゴルガストのふもとで隊を休ませていた。

そのさきにひろがるのがハン・グアリスの大平原だ。一面緑なす、海のような平原。

あたしたちは、樹木のよくしげった丘の上に停まった。敵からは、
1キロメートルくらいか。

ポンチョをかぶって、デッキに出てみる。たたきつける豪雨が風
で飛沫しぶきになってけぶっていた。とおくかすかに数千人の軍隊が見え
る。大きなテントがいくつかあった。鬚ひげをたくわえた指揮官しきかんや高級
将校しょうこうが火酒ひのさけを飲み、葉巻はまきを煙くゆらせているにちがい。

「せめるなら、あそこだな」

イスがつぶやく。でも、あんなにたくさん兵隊と闘えるのか
しら……なんだか、ゴルガストがよけいぶきみに見える。あたし、
こわくなって、

「ムリだよ」

エリコがよこ眼であたしをにらみ、

「なに弱気になってんのよ。」

……まあ、ちよつと無謀むぼうかもね。ようす見るべきじゃない？」

オメーも弱気じゃなか！

けど、そんな会話をよそに、ケータイをいじっていたANKAがいう、

「待つて。」

ここから見えているものだけが事実のすべてじゃなさそうだわ。

キャビンにもどろう」

「え？」

あたしたちは、ふたたびディスプレイのまえに集まった。

ANKAが照準しょうじゆんをあわせる。なにごとかしら……？

「あーっ！」

映っていたものは……雨のなか、森のなかをすすむ軍隊だった。

風雨をもともせず、鋼鉄の甲冑かっちゆうを鳴らし、草土りゆうきを蹴ちらし、流旗をなびかせている。

エリコがANKAのほうをむき、

「なんなの、これ？」

A N K A がきびしい表情で、

「レオン・ドラゴの兵よ」

エリコがさらに問う、

「どこにいるの？ てか、こいつら、どこにむかってんのよ？」

A N K A は、冷静に指さし、

「こっちの画面を見て。この周辺の地図よ。レオドラ軍は、いま、

この森林地帯を走っているのよ。これにむかってね」

それって、つまり、

「ねえ、だって、こっちのこれって、平原でしょ、てゅーことわ」

「そう、この軍隊は、ハン・グアリスにむかってるわ」

ミーシャが声を上げて、

「どおーしてえー、なんで、レオン・ドラゴが」

エリコの顔がずっと青ざめ、

「それだけじゃない。これって」

「あぁーっっ！」

じぶんの血の気がひくのがわかる。

「ジン・メタルハート！」

鋼鉄の女戦士と彼女のなかま4人が疾駆^{しゅく}する騎兵部隊のなかにいた！

イスがうなる、

「そうか、ジンがいて、とうぜん。ふしぎはない。

彼女は、レオン・ドラゴに雇われているんだからね。

ともかく、この軍は、いったい、なにをしようとしているのか」

エリコがタブレット型PCを出し、

「わかったよ。宣戦布告が公開されてる。

レオン・ドラゴはハグレーポルガが国境をおかそうとしているとして、宣戦布告しているわ」

「言葉どおりには受けとれないな」

イースが冷たくそういった。

A N K A も、

「そうね。わたしたちか、あるいは難民たちを、はさみうちにしようとしているのかもしれない」

「あたしたちをねらうのは、盗人^{ぬすつと}をつかまえるってことなんだろうけど、なんで難民をねらうの？」

「いろいろ考えられるよ。」

レオン・ドラゴの領内に難民がいるだけで王国には負担^{ふたん}になるし、治安^{ちあん}の悪化（たとえば、一部の難民たちが飢えや寒さのために盗みを働くとかね）をまねく可能性もあるし、ヴォゼヘルゴへ強制送還すれば他国に批判^{ひはん}されるだろうし。

でも、どっちかっていうと、ヴォゼヘルゴに協力して難民をしまつてしまおうとしている、つてのが、いちばん正解にちかいよう

におもえるわ。

レオン・ドラゴも、シルヴィエの影響下にあるからね」

「そうだね。」

それに乗じて、ジンがぼくたちを襲撃する可能性も高い。彼女は、ぼくたちがここにいることを、とうぜん、知っているだろうからね。

男爵とのいさかいで、ぼくたちの存在は、おおっぴらになってしまっているはずだ」

「イース、おちついてそんなこといつてるばあいじゃないでしょー。

どーしよー、ANKA！」

あたし、あせる。

「おちついて、ユリイカ。こういうときこそおちつくのよ。

ねえ、ディスプレイの画像を拡大して。ちよつと気になるのよ」

エリコが、

「あ、ANKA、それは！」

イスも気がついたらしく、

「ほんとだ、レオン・ドラゴ軍の、この荷馬車に載^のっているのは！」

A N K Aが勝ちほこって微笑し、

「民兵の軍服よ。これでレオン・ドラゴとハグレーポルガの意図^{いど}はあきらかになったわ。

さあ、画像を保存しよう。

これをネット上に流すのよ。どっかのサイトにスレッド立ててもいいし、*Twitter*（ツイッター）でもいいし、とにかくI Eユーザーのすべてにうつたえよう。

もし、わずかでもこの世界に正義がのこっているならば、勝つのは、わたしたち力なき民衆^{みんしゅう}だわ」

監視委員会に画像を添付したメールを送付するとともに、添付した画像と同じ画像をネット上に公開した。

次の文を添^そえて。

.....

『この画像は、ハグレーポルガ軍およびレオン・ドラゴ軍を撮影した画像です。』

さいきん、起こった一連の難民虐殺事件は、民兵をよそおった彼らのしわざではないでしょうか。わたしたちは、この事実を監視委員会に報告し、しかるべき措置をするように要望しました。

わたしたちは、正義の御名みなにおいて、この悪逆行為あくぎやくこういを阻止すべきことをすべてのＩＥユーザーにひろく、そして、強く、うったえます。

もしも、わたしたちに共感めいざんされるかたがいたならば、わたしたちに協力してください。

現在のＩＥに疑問をいだく人たちは、集まってください。いま、理想の世界であるべきＩＥはウイルスによっておかされています。それに気がついた人は、覚醒めいざめた人です。正義を胸にいだく者よ、

ここに來たれ。（この文に、AR機能で位置情報や周辺情報を添付した）』

.....

すぐにたくさんのフォローがあつた。意外だった。しかし、彼らは、あたしたちが『kOO』を盗んだ犯人として報道され、追われている者であることは知らないにちがいない。

「まだ正義をうしなっていない者たちがたくさんいるんだな」

見ながら、イースがそういった。

エリコがケータイ片手にいう、

「見て、すごいわ。」

監視委員会がうごいたよ！ 勧告が公表されたわ。『レオン・ドラゴ王国およびハグレーポルガ王国は即時活動^{そくじ}を停止し、監視委員会の調査を承諾^{しょうだく}するよう勧告^{かんこく}する』だって！」

ANKA、うなづく。

あたしは、

「カンコクって、なに？」

「かんこく勧告つっのわさー、〇〇〇〇〇をするように、ってすす勧めることよ。

知ンないのかよ？」

うっせー、エリコ！　ぷいっ！

「すすめる？　やめろって命令じゃないの？　なんかまどろっこしい！　もっと強くいえないの？」

「監視委員会に、その権限がないんだろうな。まあ、いいじゃないか。これも強い追い風だ。

ぼくたちは、おすみつき御墨付をもらったのさ」

「オスミツキって？」

「あんたねー、いいかげんにしなよ！　おすみつき御墨付ってのわねー、むか

し徳川幕府とかが証明のためにすみいん墨印の押してある文書をあたえたの

よ。それが言葉のゆらい由来！」

たしかに効果はあったらしい。

ディスプレイのなかのレオン・ドラゴの進軍がとまった。もういちど、デッキへ出てみると、ハグレーポルガ軍も、おたおたしている。本部テントへの人の出入りがはげしくなっているのだ。

「ねー、ほら、ハグレーにも反応があらわれたわ」

あたし、ANKAにそう教えた。

「あつ、あれ、なあに？」

とうとつに、ミーシャが空を指さす。

それは、6枚の翼と3つの首を持ち、白日のようにかがやく白い龍だった。豪雨ごううでも、そのまわりだけ晴天せいてんのようだ。

乗っていたのは、眼の光がするどい1人の若者だった。ロングのトレンチコートはもともと白かったにちがいない。いまは、ねずみいろとオリーブいろのまだらだ。ロングブーツをはいて、第6弦のない（弦が5本しかない）テレキャスター（E・ギター）を肩にか

ついでいる。

「俺の名は、いれっ裂つてんだ。

ふ。きみたちのステートメントにかんめい感銘を受けたよ。

ともに闘おう」

腰に佩はいた剣がはばひろで大きい。鞆さやにはアイルランドの十字架
なんかによくある文様もんように似た浮き彫りがあるほか、創世叙事詩『エ
ヌマ・エリシュ』の浮き彫りがされていた。マルドウク神と闘うテ
イアマト神、蠍尾竜ムシユフシユ（バビロンでイシュタル門を守る守護龍）、女
神イシュタル、ティシユパク神、ニンギシユジダ神、アヌ神が彫ら
れていた。

顔は頬ほほがこけて面長おもなが、口がよこに大きくて鼻がとがって高く、あ
らあらしく黒い蓬髪ほうはつが背までとどいている。

ANKAは、

「ずぶぬれになるわ。ともかく、なかに入ろう」

そういつて、キャビンにまねき、握手^{あくしゅ}して、すぐにいう、
「さっそくだけど、わたしたちには、『k O O』を盗^ぎんだ疑惑^{ぎわく}がか
けられているわ。」

まずは、真相^{しんそう}をあなたに話しておくべきだとおもう」

「いや、それについては、すでに了解^{りょうかい}済みだ。」

きみたちのことは、マコトヤ・アマヤスからきいている」

「マコトヤ・アマヤスから!？」

「なんで？ 会ったこともないのに!」

「いや。そうじゃない。気がつかなかったのか。会^あってるよ」

「……っ！ どこで？」

「北大陸^{ノルデ}の最高峰^{さいこうほう}カム・イ・アレズヲ山の嶺^{みね}の上でさ」

「管理局だ!」

エリコが声を上げた。

「そう。彼がマコトヤさ。」

かくいう俺も、I Eの古参こさんで、4神しじんの1人といわれ、最も古いユ
ーザーの1人だ。イタルといっしょに、バンドでギターを弾ひいてい
たこともある。

註 4神しじんとは、マコトヤ・アマヤス、ドオゲン・叭羅蜜斗バラミト、天平普蕭アマヒラフシヨウ、

彝之いの×裂いれつ。かつては、イタル（現アカデミア大司教、彝之いのイタ

ル）をふくめ、5柱の神といわれた。

ユリイカ、きみの師であつたタカフシは、俺の子分こぶんみたいなもん
さ。たとえ神聖皇帝ジニイ・ムイや南大陸スールの帝王羅汎らはんですら、俺に
は、一目おいちもくいている。

なんなら、レオン・ドラゴの王アルハンドロⅢ世とのあいだに入
つてやつてもいい」

「センセイの先輩っ?！ クドク・ポイント見せてもらつていい?」

「ああ、かまわんよ」

QDQ:1789 すっ、スゲーー!!

「なーに、たいしたこたあない。マコトやなら、かるく2000超さ」

そういうと、とーとつに、第6弦のないギターをダウンストロークでかき鳴らしはじめた。きいたことないフレーズ。

「70年代 Rock 'n' Roll のリフや」

エリコが眼をほそめ、疑わ^{うたが}しげに不満をいう、

「あなたがそれほどの実力者なら、なんで北や南の皇帝たちの暴走を止められないの？ ウイルスにおかされたいまの事態^{じたい}をなんで修正できなかったのよ？」

ベ^{いれっ}裂は、眼をかがやかせて高らかに笑い、

「俺もゲーマーだからな。それがゲームの性格なのさ」

それ以上は、なにもいわなかった。

A N K A がなかばげんそうに、

「よくわからないけど、力強いみかたがふえたことは、たしかだわね……」

でも、じっさい、そのとおりだった。

ズレ^{いれっ}の参加をきいて、さまざまな人たちが参加を申し出てきた。

同時に、ハグレーポルガやレオン・ドラゴのホームページは非難^{ひなん}のメールが殺到^{さつとう}、2国の王のブログも炎上し、王国の裏サイトになん千もの書きこみがあふれ、荒れまくった。

これらのことが画像と告発文^{こくはつぶん}の公開から、1時間ちよつとのあいだに起こったのだ。

おどろ驚いたことに、ハグレーポルガもレオン・ドラゴも、軍の撤退を宣言^{せんげん}した。しかし、

「じっさいにうごくまでは、信じないわ」

エリコは、いった。

たしかに、あたしもそうおもう。

「どうやら、エリコの考えが正しいようだ。

彼らの撤退は、名誉棄損^{めいよきそん}で、ぼくたちをうったえる準備、それか

ら、異議^{いぎ}申立^{もうしたて}の準備、そのために一時的に撤退する、ってことらしいね」

イースがレオン・ドラゴとハグレーポルガが共同で公開したステートメントをケータイで見ながらそういった。

しかし、監視^{すすめ}委員会の勧告を重く受けとめたIE^{こくさいさいこうさいばんじょ}国際最高裁判所は、

「和解^{わかい}をせよ」

って、あたしたちとレオン・ドラゴに命じた。もちろん、これにしたがわないこともできる。

けど、展開ハヤすぎでしょー。あたし、ちよつとついていけないんだけどー。だって、ここまでわずか2時間だよ！

あたしのケータイが鳴った。なにいつてんのかわかんないから、ANKAにかわってもらった。話が終わるとANKAがあたしにいう、

「レオン・ドラゴの外務大臣がいむだいじんの秘書ひしょからだったわ。

あんたが王で、国の連絡れんらくさきはあんたのケータイになっているからね。それで電話でんわがきたんだよ。

で、話の内容ひのうちだけど、非公式ひこうしきに和解交渉わかいこうしょうをしたいってことだった」

「非公式？」

「おおやけにしないで、とりあえずわたしたちとレオン・ドラゴとだけで交渉こうしょうしたいってことよ。

で、和解わかいのめどが立ったら、正式せいしきに和解交渉わかいこうしょうに入りたい、ってこと。ふつうに考えるとね。そういうことになるのよ。

わかった？」

「訴訟そしょうしないの？ ずいぶん、かんたんにあきらめたのね」

エリコがさげすんでいう、

「ばかね、ユリイカ、ワナに決まってるわ。

交渉こうしょうするふりしてちかくまで来て、奇襲攻撃きしゅうこうげきをかける作戦よ。

だって、アルハンドロⅢ世が総務大臣ヴァローに画像の削除依頼をするように命じたって、もっぱらのうわさだからさー」

「ほんとにー？」

あたし、エリコの情報収集力に驚いた。

ANKAも、

「知らなかったわ。エリコ、よくそんなこと、しらべられたわね」

「なにいつてんのー、あちこちのスレッドに書きこまれてるわよ。」

たぶん内部告発ね」

ベ裂がしずくを垂らしながら、キャビンにもどってきた。

ゴルガストまで敵のうごきを見にいつていたのだ。この人の天下無双ぶりは超有名らしくて、ハグレーポルガやヴォゼヘルゴの軍人たちは、ベ裂があたしたちのなかまになったことを知っているはずなのに、彼のすがたを見ても、指1本うごかそうとしなかったらしい。

「偵察^{ていさつ}にいったけど、なんもわかんなかったよ。あはは」

ガキのつかいかよ……

「だが、いま、普^ふ蕭^{しょう}から連絡があつて、どうやらユヴィンゴに駐屯^{ちゆうとん}していたシルヴィエ帝国軍が南下しはじめたらしい」

「ユヴィンゴ？」

「シルヴィエ？ 南下？」

あたしとミーシャがほとんど同時にきき返した。

エリコがこたえた、

「あんたたち、もうわすれたの？」

ユヴィンゴって、ヨセフがいったトコじゃん。シルヴィエの駐留^{ちゆうりゆう}軍^{ぐん}があつて、ヨセフはそこに勤務するって、いつてたでしょ？」

「あたしたち、ヨセフと闘うの？ いやだおー」

「そりゃ、そーだけどさー、それよりも、あんた、わかってんの？」

超大国の軍隊がこっちにむかっているのよ」

「ああーっ！ そうだーっ」

「ちよーヤバいじゃん！」

大さわぎのあたしとエリコとミーシャを無視するように、ANK
Aが、

「とりあえず、レオドラ・ハグポル問題から片づけていこう。あれ
もこれも同時にはできない」

けど、いれっ裂がかかたいしよう呵々大笑して反対した、

「いや、あとまわしにするには、ちと問題がでかすぎるかなー。
帝国軍に対しても、手をうっておいたほうがいい。手わけすれば、
いいのさ。」

きみらも、むかしとちがつて、だいぶ人数がふえているはずだし」
たしかに、いれっ裂が来た直後から、共感のみでなく、来たいってい
う人が出はじめていた。ネット上で賛同さんどうしてくれている人は、なん
万人もいたが、じっさいに来るっていうユーザーは、多くはない。

たぶん、ほんとうに来る人は、もっと少ないんじゃないか。

A N K Aがいった。

「わかった。あなたがいうほどいるかわからないが、参加者をむかえるためにも、いったん、国にもどろう」

もどると、豪雨ごううのなか、奇妙きみょうなふうていの人たちが数人、あたしたちを待っていた。

1人、ものすごい大男がいる。背丈せたけが3メートル以上はありそう。

ただあたまが小さく眼と鼻は小さな穴のようだ。巨大なグレイヴ（円月刀のような片刃で三日月型の刀がついた、槍やりのように柄えの長い武器）を持っている。

「わ、わしは、ノーロイっちゅうもんです」

ふえり。

カノン、ソントグ、バロイの3人は、なかのよい騎士のチームで、いずれもノーロイよりは小さいけれど、2メートルをかるく超える

巨漢で、太っていた。

3人とも、歴戦の猛者であることを誇示するような、つかいこんだ甲冑を身につけている。

カノンは、口髭をはやし、氣どつて上品。キズだらけではあるけど、騎士ふうのハデな鎧。胸ポケットには薔薇、小さな弦楽器を胸もとから出すと、甘く切ない愛の詩を詠った。

ソントグは、憂鬱な表情で、灰いろのあご鬚ほお髯をはやしている。思慮深そう。羊皮紙の哲学書を手にし、ぶつぶつと読む。

バロイは、髯ぼうぼうで眉が濃く、武器は大剣と、大きな戦斧。野蛮な感じ。陶器のジョッキを腰にぶら下げ、革袋に入った葡萄酒をがぶ呑み。大きな丸い楯は食事のときに大鍋になるべりな道具だと自慢し、こう嘯く、

「獅子を絞め殺し、龍を屠り、野牛を持ち上げて、厩の屋根まで投げたこともある。怪力無双」

ボノと名乗った少年は、真っ赤な長髪で、正式には炎^{ほの}って書くらい。ラテンふうな濃い顔立ち。清廉で貧しいため、戦士だけど、じぶんの武器をじぶんで調整しているという。鍛冶屋^{かじや}の技術を身につけていた。

ある意味、刀剣オタク^{とうけん}のようだ。たしかに刀身の彫り込み、大鷲^{おおわし}や薔薇^{ばら}や炎や十字架や髑髏^{しやれこうべ}やドラゴンや獅子^{しし}や天使がびっしり。ゴテゴテだわー。

魂も炎のように熱い。

「正義、真実、それこそが幸^{さいわ}い」
って、いいきった。

チエバロは、クアバの革命家^{かくめいか}ファルコの盟友^{めいゆう}で新しい冒険を求めて、ここに来たらしい。獰猛^{どうもう}な虎^{とら}のような顔立ちをしているくせに、人なつっこい笑顔^{えがお}を泛^うかべる。

アマノ・カブキは、鎧^{よろい}の上に花魁^{おいらん}のような着物^{きもの}をはおって、金髪

の巻き毛を長く垂らした男子。小太りのシラフネ・タイラクは、平凡な感じで、地味な男子。2人ともアニメみたいな装プロテクター甲プロテクターをしている。友だちどうしで、見るからに戦闘オタクなゲーマーだ。

「自作の高射砲こうしやほうもあります。ぜひ俺たちを参加させてください」

そして、リザード R Z D。

いつも黒髪を垂らし、うつむきかげんのふんいきで、いきなり自作の詩を朗読するし、無口だし、いつも眼がとおく見てるし、武器も装甲もないし、なにしに來たかわからない感じ。けど、なんだかぶきみな、人を威圧いあつするオーラがある。

「真実は……存在しない。俺は、蜥蜴とかげの王（リザード・キング）。破壊はかいの神を、信じる」

はあ？……最後に、変わった風体ふうていの青年が1人。

腰まである銀髪で、もみあげをいく条じょうかに編あんで簾すだれのようにし、

さまざまな金銀宝石きんぎんほうせきの飾かざりをつけている。

白いローブを身にまとい、ひとみは灰いろ、眼の下にアラベスクもようのような、アールヌーボー調の、金の刺青きん いれずみが彫つてあつた。

「ユリアスといひます。」

古文こぶん献けん学がく者しやドウモ博士のおまねきで、学問上の意見を交かわすため、南大陸スール こおうこくの古王国コプトエジャから、ここ北大陸ノル テに来ていました。

ごぞんじのとおり、わが国は世界最古せかい さいこの王国です。父は、王ユングーノ3世。由緒正ゆいしよしい家系に属しています。

もつとも、私は、庶子しよしですが（笑）」

なんなんだ………イミフーっ！

あたし、なかまがふえてうれしかったけど、エリコはちがった。

「信用できないわ。ログを見て確認すべきよ。ハンドルネームとかを照合するのよ」

そっかー。で、やってみた。

結果からいえば、ウソをいつている者は、いなかったし、過去の

行動にも問題はなかった。

経歴にまったく問題行動がなかったというわけではないけど、敵のスパイじゃない、という意味では、ぜんぜん問題なかった。

ANKAは、あたしたちが『kOO』盗難の嫌疑がかけられ、追われている者たちであることを彼ら全員に告げた。

承知の上で来た者もいるし、そんなこと気にしない性格の者もいたし、知らないで来た者もいた。

ANKAは、IEの履歴^{ログ}を見せて、あたしたちが潔白であることを証明した。チェバロがあごの鬚をなでながら感嘆し、

「ログの閲覧とは！

こんなことができるとは、夢にも考えたことがない。これを知る者は、ほとんどいないだろう。いやはや、どのような兵器よりも有効かもしれない。

しかし、それにしても、なぜ公開してすべての者たちに知らしめ

ないのか」

それについては、イースが説明した、

「慎重に取り扱っているんだ。公開されていない重要なデータだから。」

公開することに問題があるとはおもえないが、じつはぼくらが気づいていないだけで、見る者が見ると、ものすごく重要な事実がかくされている……なんてことがまったくないとはいいい切れないから、念のため、公開しないようにしているのだ。それに」

「それに？」

「ログの公開というのは、特定の者しかできない特殊なことだ。」

とくべつな存在である者にしか潔白を証明できないなんて、I E じゃない。

ぼくらは、あくまで、だれにでもできるやりかたで証明したい。

正しい者がじぶんの正しさを証明することがあたりまえのことであ

ってほしいからだ、この I E では。

通常の行動のはんいで、とうぜんのこととして、証明したいんだ」

「なるほど。」

履歴なんかよりはるかに強く、その言葉が君たちを俺に信じさせるよ。

よろしくな」

そういつて、イースの手を強くにぎった。

それをきいていたボノが1歩ふみ出し、その手の上に手をかさね、熱くいう、

「俺たちは、今日から1つの魂だ。兄弟、家族、そして、国家だ」

けど、ANKAは、冷静で、こうつぶやく、

「国がせまいわね」

20人になっていたからだ。

イースもいう、

「そうだね。麒麟きりんや海馬かいばでかこむぐらいのスペースじゃ、まず入りきれないよね。城壁じょうへきをつくろう。

家屋かおくは、とうぶん、テントでもいいが、セキュリティぐらいしつかりしよう」

「石の城壁じょうへきには時間がかかる。森から木を切り、丸太まるたを組んで塀へいをつくればいい。ついでに床ゆかもつくろう」

ユリアスがそう提案した。

雨をよけるために、羽飾はねかざりのついた、つばのひろい帽子ぼうしを深くかぶったカノンが口髭くちひげをひねりながら同意し、

「ほー、そっちの案に賛成だぞ。

ここに床ゆかがあつてほしい。足もとがぬれたままでは、坐ることもかなわんからなあ。

そっちよくにいわせてもらえば、服を乾かしたいし、いまはセキュリティより雨をしのぎたいぞ」

カノンの言葉に、みんなが笑って同意した。

たしかにぬれる。

葉のおいしげった枝が大きくひろがっているので、ま上から降る雨にはぬれずにすむが、風があればぬれるし、磐いわがぬれてしまうと、びしょびしょで、坐ることも、よこたわることもできない。

かなりみじめな状態だー。

ノーロイは、大木を草のように薙なぎ、やわらかいバーターのように切り刻きざんだ。たちまち材木ざいもくがつみ上がる。

ソントグやカノンやバロイは、かるがると材木ざいもくをはこび、おもちゃの家をつくるよりもかんたんに組み上げた。

土の上に建てるのところがって、磐いわの上には土台をうちこめないから、組みあわせて立つようにする。

彼ら4人は、はげしい雨風にうたれても、笑いながらじょうだんを飛ばして、陽気ようきに作業する。屈託くつたくがナイなー。

食糧しよくりようを狩りでまかなうことになった。

チエバロ、カブキ、タイラク、エチカ、ユユは、弓と銃じゆうを持って森にいく。

鹿しかや猪いのししや兎うさぎや雉きじや熊くまや山羊やぎや羚かもしかをぶらさげて帰ってきた。

とうぶん、食べものは、こうやって調達ちやうたつするしかない。

火が必要だった。

ボノが塀へいのうちがわに石を組んで、じょうずに大きな暖炉だんろと煙突えんとつをつくる。屋根がないから、暖房だんぼうとしては気やすめていどだが、炙あぶり焼きには最高だった。獲物えものの肉を炙あぶる。その匂いが家庭的ふんいきをかもしだす。

ちよつとだけ寒くなく、やや乾いた寝場所をこうして確保かくほした。もつとも、あたしたち女の子は、ジョリーのなかで寝たから、床や暖炉だんろや塀へいがなかったとしても、快適だったんだけどねー。ゴメン！でも、タフな男たちばかりで、暖炉だんろの火をかこんで、酒（これだ

けは、ちゃんと呼意してあるんだよなー）をくみかわす。

雨は弱くなっていた。

照明といえるものはジョリーのランプと暖炉^{だんろ}。ただし、ランプは

油の節約のため、じきに消した。暖炉^{だんろ}だけ。

炎のゆれる光、深い闇。

あたし、幻想的なきぶんにひたる……

バロイは、いろんな国でじぶんがやった武勇伝^{ぶゆうでん}を大声で話す。イ

ースが古代の戦士の軍記物^{ぐんきもの}を歌った。カノンが弦楽器^{げんがつき}を奏^{かな}でる。

「しつ、音楽を止めて。なに者かがちかづいてくる」

イースがとつぜん、そういった。ソントグも耳をすまし、

「ふむ、騎馬隊のようだな」

傭兵隊長グロー・クロヴィスがひきいる20人のガリア・コマータ^{ようへいたいちやう}

（長髪^{ながみ}のガリア）たちだった。

その名のとおり長髪をなびかせ、革の鎧^{よろい}を着たあらあらしい戦士

たちだ。グローは、Nabu Kudurri Usur という銘めいのきざまれた巨大クラウ剣モをかかげて、あたしたちに誓ちかう、

「われらは、戦士。

それゆえに、この移うつろいやすき裏切りの世にあつて、激流げきりゅうにゆるぐことのない石の橋梁きょうりょうだ。

永久とこしえに変わることなく、真実と正義とに命をかける」

16 国つく

翌日、雨が雪に変わっていた。なんなんだ、この氣候わ……

フードつき外套がいとうをまとして、その日、ミハイルアンジェロが来た。

「私は、建築を学びました。国づくりに参加したいのです」

髪ひげもクルクルにカールしている。顔の彫りが深く、眼が澄んでいた。

彼は、しばらく周囲のようすをながめたあと、

「私にプランがあります」

そういつて、なにも書いていない白い紙をひろげた。

木炭でさらさらと正確な図面を書き上げる。フリーハンドだったので、みんな驚いた。おどろ

ミハイルアンジェロの基本プランは、大樹たいじゆの生えた磐いわをかこむように、まわりに大きな石をつんで、ドーナツ型の円形要塞えんけいようさいをつくる、というものだった。

「大樹たいじゆと磐いわと森の木でつくった塀へいと床、そして、ボノがつくった暖炉だんろ。それらをまもるようにかこみ、そのまま保存する様式です。

この国がスタートしたときの、オリジナルのすがたをのこすためです。

正義のために、ここに国をつくらうとして勇士たちが集まった記念に、この国の最初のすがたを永遠に遺すのこのです」

「すてきー、わたしにもー、てつだわせてー」

ミーシャがいった。そっか。彼女って、装飾神学講座だったんだよね……

ミーシャは、図面につぎつぎデザインを足していく。ミハイルアンジェロは、それを見てうなずき、

「うん、いいですね。いっしょにやりましょう」

意外にもミーシャの申し出をこころよく受け入れた。

図面が仕上がり、作業がすぐにはじまる。

なにしろ、ブルドーザーよりもすごい男たちが数人いるので、建築は驚くべきスピードですすんだ。しかも、雨だろうが、雪だろうが、天候関係なしの人たちだ。

雪の降るなか、作業はぐんぐんすすむ。

ノーロイは、川や森や山のふもとから岩や大石をかるがるかっいで来ると、ジャガイモでも切るように剣で切って、大きくておおざ

つばなブロックをつくっていく。ソングやバロイも、つぎつぎと大きな石をはこんで来て、つむ。

岩石のツミキみたいな、ワイルドな建物の概略がいりやくができ上がってくる。

まずは、あたしたち5人の部屋ができた。東に面した部屋で、3階建の最上階だ。石の床に毛皮がしかれ、大きな暖炉だんろがつくられた。クローゼット、棚たな、化粧室けしょうしつ、浴室よくしつ、洗面室せんめんしつ、トイレ（しかも水洗すいせん！）がついている。かなり快適そうだった。

つぎに、集会のための大会堂だいかいどうが西に面してつくられた。その上の階えっけんには謁見の間えっけんをもうけた。

北面には、倉庫、車庫、食糧やワインの貯蔵庫ちよぞうこ、武器庫、鍛冶場かじば、海馬かいばや麒麟きりんが休む厩うまやができた。

應龍おうりゅうのためには、木の上に木製の家をつくって、そこを棲家すみかとさせる。ちなみに、樹の上には、大小いくつかの木製の家屋かおくをつくつ

て、休憩所^{きゅうけいじょ}、見はり台^{みはりだい}、砲撃台^{ほうげきだい}などにした。なんとなく、トム・ソーヤー^{ソーヤー}っぽいわ。

そして、樹の枝の中央部に、校倉造^{あぜくらづくり}の建物をつくって、『k O O』をおさめた。

男たちの部屋は、東の1、2階と南の3階につくられる。

要塞^{ようさい}の門は南の1、2階分をあけてつくられた。つまり、男たちの部屋が門を上からならむようなかたちになっている。

ボノがどこから鉄を調達^{ちやうたつ}して、大きな鉄の門扉^{もんび}ができ上がった。

「ねー、こんなの考えたのー」

ミーシャがある羊皮紙^{ベルガメーナ}に羽ペンで画いた図案を出してきた。

小さな翼^{むげん}をつけた龍^{かたち}が8の型^{かたち}をつくって、雲にからみついている。

「この国の紋章^{Arms}よ！ どおー？」

ボノは、さっそく図案のかたちに鋼^{はがね}を鍛^{きた}え、門扉^{もんび}に溶接^{ようせつ}した。

紋章入りの大剣や楯をつぎつぎとつくった。

そんなある日、レオン・ドラゴの王が盗人ANKAとの雇用契約は無効であると主張し、支度金の返還を要求してきた。

「なんで契約違反なの？」

「契約書のなかに、罪をおかしたばあい、契約は無効となる、って条文があるのよ」

「むろん、かんたんよ」

エリコがそういった。

「どこに、そんなお金があるの？」

「お金なんかはらうわけナイじゃん。」

「やっぱ、『kOO』を盗んだのが、わたしたちじゃないことを公表すべきよ。ログを公開しようよ。せつかくアクセスできるんだから」

けど、イースは、賛成しない、

「いや。すでにいったとおり、ぼくは、一般公開には反対だ」

「じゃ、一般じゃなきゃいいでしょ？」

メールに添付してレオン・ドラゴにおくってみるつてのは、どうかしら？」

そうすることになった。効果はすみやかにあらわれる。

レオン・ドラゴは、へんかんようきゆう返還要求を留保りゆうほした。

「ヘタな抵抗よねー。ユリイカ、あんた、わかる？ 和解交渉わかいこうしょうで有

利な立場になろうとしているのよ、レオン・ドラゴのアルハンドロ王は。貸しをつくろうとしているんだよ。わたしたちに、はらうお金がないことがわかってるからね、彼は。

で、ANKA、交渉うやわやの日には決まったの？」

エリコは、ちかごろ、態度が大きく（さいしょっから大きかったけどね）なってきた。

「2週間後よ。レオン・ドラゴの王都クーガでおこなう予定よ。」

あんたには、わるいけど、そのときまでには、支度金したくきんを返すつもりよ。きぶんわるいからね」

「まー、それはANKAの好きにしなよ。」

それよりさ、ねー、わたし、おもったんだけど、わたしたちは、正義だし、支持者しじしやがたくさんいるんだから、支援金しえんきんをつのりましよう。国家の大きな財源さいげんになるかもよ」

ANKAは、賛成さんせいしなかった。けど、エリコは、すでに準備をはじめていた。

彼女の行動は、それにとどまらない。エチカとノーロイとに命じて帆船はんせんをつくらせ、鹿しかや熊くまや兎うさぎの毛皮をつんだ。

「川を下ったところは砂漠のオアシスがあって、そこに町スークがあるのよ。ハロイって町でさー。その市場スークにいつてくるわ」

そういつて三日後に、50,000イミオンものお金を持って帰って来た。

帰ると、すぐにエチカとともに麒麟きりんに乗って、どこかへ出かけた。

「銀行よ。これで投資とうしができるわ。

国家を運営するには、財源さいげんがひつようでしょ？」

彼女は、ネットで有価証券ゆうかしやうけんの売買ばいばいに手をつけた。

「目的がただしければ、いいのよ。

ウイルスに感染してよかったことって、これぐらいかしらね。家でアームズチエアに坐りながら、かせげるわ」

こんども、ANKAは、いい顔しなかった。

「いいえ。

わたしたちの国の主要な産業しゅようは、狩り、漁、麦やさいと野菜よ。お金がひつようなら、収穫しゆかくしたものを売ればいいわ。

それだけで、じゅうぶんよ。

自給自足じきゆうじそくを基本にして、できれば、貨幣かへいはなくてすむようにしたいわ」

じっさい、ANKAは、要塞ようさいの外の土をたがやし、畑をつくるよ

うに命じていた。

そのほかにも、ANKAは、クラウドの実質的な指導者として、みんなに役割をふつて、さまざまな権限をあたえた。

ミーシャを住居・生活・食糧庁長官にして、要塞のインテリア・エクステリアのデザインや魚釣りや種まきや狩りや料理を指示し、指揮し、監督し、命令する権限をあたえた。

ミハイルアンジェロ、ユユ、ボノ、ソントグ、カノン、バロイ、ノーロイ、RZDを補佐官にして実務にあたらせた。

彼らは、要塞を建築し、狩りや釣りにいき、畑をたがやした。しかし、毎日、新しい参加者が来るので、だれにでもたやすい仕事は、あとから来た者たちに担当させた。食事のしたくや貯蔵食糧の管理などだ。ちなみに、新参者の大半は、あたしたちが盗難事件の犯人とされている者たちだということを知らない人たちだった。

エリコには、財務・通商大臣の地位をあたえた。補佐官としてエ

チカ、チエバロ。

エリコは、さつそくチエバロを外国におもむかせ、マーケット市場の調査、リサーチつか、スパイ活動をさせ、さまざまな情報を収集させた。

イスは、ぼうえいだいじん防衛大臣。ほさかん補佐官は、かるら迦楼羅、カブキ、タイラク。

ANKAは、ないがいせいさくだいじんじぶんを内外政策大臣とした。いれつべ裂とユリアスとジヤジュを顧問として。

そして、あたしは、王さま……ひろと非録斗を侍従長にした。

あたしたち5人と、1人の侍従長、3人の顧問、13人のほさかん補佐官は、毎晩、大きなテーブルをかこんで、みんなで食事をし、その日にあったことやきいたことを話し、情報を共有し、意見をかかわした。

大きな石をつんでつくった暗くていかめしい建物のなかで、だんろ暖炉があかあかと、たのしげに影をゆらして、香りのよい薪をまきパチパチ燃やす。話題はつきない。つねに3時間以上になった。ボノとチエバロがとくに熱弁家だった。ねっぺんかすぐく充実した時間だ。

さらによいことに、クラウドに参加した人間から、履歴のことがロコミでひろがるようになり、非公式なかたちではあるけど、あたしたちの無実が北大陸内で浸透しはじめていた。

そんなたのしい日々であつても、あたしは、バリユースが監視していることに、ときどき気づいている。

でも、さわがなかったし、だれにもいわなかった。

あるとき、やつがあたしに短銃ピストルをむけたので、あたしは、

「ムジョー」

とつぶやいた。

銃じゅうが砂塵さじんとなつてちり、バリユースは消えるように、逃げた。

それ以来、すがたを見なくなつた。しばらくは。

なぜ、あたしたちをつけまわすのか、疑問だったが、その疑問は少し質しつを変えた。

なぜ、あたしなの？

どうして、あたしをつけまわすの？

なんで、あたしをしまつしようとするの？

なんで、あたし、殺されようとしてるの？

命をねらわれるようなことなんかしてないわ。あたしがなにをしたらっていうのよ？

すべてがなぞ。けれども、あたしは、それを胸にしまつて、だれにもいわなかった。

そんなある日、ANKAが、

「ちよつと、出かけるわ」

といって出ていった。2、3日、帰って来なかった。

17 レオン・ドラージュ

「クラウドは俺がまもっていてやる。たとえば、帝国の全軍が来たつ

て負けやしないさ。安心していつて来い」

IE 国際最高裁判所のすすめにしたがつて、和解交渉のため、レ

こくさいさいこうさいばんじよ

わかいこうしよう

オン・ドラゴへ出発する朝、いれつ裂がいった。

ワナがあるかもしれないし、レオン・ドラゴがほんとに和解する

わかい

気があるのかどうか、疑問があつたけど、あたしたちは、ともかく
アクションを起こすことに決めた。

あたし、ANKA、エリコ、イース、ミーシャ、そして、ユリア
スは、クラウドの国旗をなびかせ、国の紋章をつけたジョリーで旅
立つ。

むろん、あたしたちの男の子たちもいっしょだ。クラウドの紋章
を入れた剣や楯をうち鳴らし、きらめかせてすすんだ。

たて

もんしやう

ハン・グアリスの平原の終わるところ、とがった山がある。ニハ
イナとよばれていた。ニハイナは、大河たいがタフオールにかこまれてい
る。

タフオールの激流がニハイナ山をまもる天然の濠ほりになっていた。

そのニハイナは、ほとんど草が生えていない急斜面の山で、その角度は50度以上だ。だから、見た目は斜面っていうより、垂直な壁。

レオン・ドラゴの王都おうと なんこうふらく、難攻不落のクーガは、ニハイナにあった。

奇観きかんだった。あたかも、ニハイナの急斜面の一部であるかのように岩山の壁から突き出ているからだ。

あたしたち一行が見えると王都の巨大な門がひらき、豪華な軍船ぐんせんが出て来た。城砦都市じょうさいとしには、がんじょうな船でなければ、ちかづけないのだ。

船に乗って門をくぐると、盛大な歓迎を受けた。

上陸し、さっそく壮麗な王城そうれい おうじょうにむかえられる。広大な謁見えっけんの間におおされた。

レオン・ドラゴの王アルハンドロ世は、シルクのローブの上に青貂あおてんのマントをはおり、頬がこけて日に焼け、精悍せいかんで、眼が大きく、

顎鬚あごひげを鎖骨さこつまでたらし、金泥きんでいを塗った水牛の大角おおつののついた王冠おうかんをかぶっていた。ルビーが象嵌ぞうがんされている。

ANKAは、国王付属戦争担当補佐官こくおうふぞくせんそうたんとうほさかん & 陸軍参謀りくぐんさんぼうという職を正式にこつわって、支度金したくきんを返した。どこにそんなお金がのこつてんだろつておもつてたら、彼女がいう、

「借金したのよ。」

アカデミアにいたころ同じ講座を受けてた人がロードつて国にいてさ、海軍参謀かいぐんさんぼうになつているのよ。

いろいろと事件はあつたけど、わたし、けつこう、世のなかで信頼しんらいされてるのよ」

2、3日、すがたが見えなかったのはそのせいだったんだあ。

ANKAの行為はりっぱだったけど、返還へんかんしたとき、王は、不快な顔をした。

気をとりなおすように、王は、告げた、

「今宵は宴をもよおすゆえ、旅の疲れを慰勞するがよい。

交渉は明日からだ」

饗宴は豪華な食堂で盛大におこなわれた。

宴のさいしよに、王が威厳をもつて口をひらく。

「聖なるレオン・ドラゴに久遠の栄光あれ。眞実是不滅なり。戦闘士の国に言祝ぎあれ。われらは、命を惜しまぬ者なり。

レオン・ドラゴに神のご加護を賜らんことを」

みんなが大きな声を上げて乾杯した。

ゆれる松明の炎。

しかし、照らすのはそれだけではない。暖炉の炎もそうだし、肉

を焼く大グリルの炎も一役買っていた。網（ていうか、鉄の格子に

見える）の上で肉のかたまりがあぶられ、脂をたらして、ジュツジ

ュツ音を立てている。

国王のぎょうぎょうしい宣言のあと、牛の大きな角でつくった力

ツプ（黒く塗られ、その表面にラピスラズリやトルコ石をはめて聖なる文字をかたどり、クジャク石をはめた黄金製のグリップがついている）がくばられ、乾杯が唱和された。

王侯や大貴族など数多いるなかで、あたしたちの席は上位にあり、国賓あつかいらしい。イスがそう教えてくれた。まあ、あたしも、いちおう、一国の王だから、とうぜんなんだけど……

しかし、王とはいえ、あたしは、ANKAに前面に出てもらって、その3列めの席に坐った。

だって、レオン・ドラゴの王侯貴族とかに話しかけられても、まっとうにこたえられないし……

この国では、会議や宴会の席に補佐官や護衛を背後におく習慣がある。そういう意味では、あたしがうしろってのは、おかしいことなんだけど、まあ、しかたない。

いーじゃん、諸行わムジョーだし。

ANKAのすぐうしろにイースとジャジュとユリアスの席、そのうしろにあたしとエリコとミーシャの席、そして、さらにそのうしろに非録斗^{ひろと}、迦楼羅^{かるら}、エチカ、ユユの席がある。

いちばんうしろを戦士でかためて背後をまもるというコンセプトだ。

あたし・エリコ・ミーシャは、イースやジャジュのようにANKAのそばにひかえて彼女を補佐^{ほさ}するひつようもないし、男の子たちに背後をまもられているし、気楽で、食べることにだけに専念^{せんねん}できた。

ゆらぐ松明^{たいまつ}の炎。

野蠻で幻想的なふんいきだった。あたし、つぎつぎと出される料理の味をたのしみつつ、幻想にひたっていた。

ジンがいる。位置的には、あたしたちの席よりずっと下位のほうの席だ。

ま、とうぜん、そうなっちゃうんだけど。

「いい気味ね。いつもにえらそうな、にくまれ口ばかりきいてさー。
わたしたちのほうがいいまは上よ」

エリコがトナカイの炙り肉をほおぶりながら、そういった。おも
わず、皿パンさら（パンをくりぬいてつくった皿さら。スープなんかを入れる）
からすくったシチューを、口にはこぶのを止めて、あたしは、
「きつとなにか考えてるよ。」

調子に乗らないほうがいいかもよ。

それにさー、さいきん、いろんなことがあって、みんな、わすれ
ているみたいだけど、いったい、『k O O』を盗んだ黒幕くろまくって、ど
こにいるのかしらねー。

けつきよく、それがウイルスの問題を解決することになるし、じ
つは、いちばん大事な問題なんじゃないかしら」

「犯人さがしね。わすれてないよ。推理小説っぽいね」

エリコが腕をくんだ。あたし、さらにいう、

「だいたい、バリエースがあんなにいるのに、どうやってウイルスを侵入させたのかしら。
しんにゆう

それも、すつごく疑問だわ。

「いったい、そんなことって、できるものなの？」

宴うたげがもり上がったころ、語り部かたべの老人があらわれた。長いローブをひきずっている。

その語りは朗々ろうろうとして、よどみない大河たいがのような、謡うたいの口調くちようだった。人々を魅了みりようし、幻想の世界へいざなう。

老人は、聖者イキの物語を吟詠ぎんえいした。

「人々よ、知れ。」

いまや世界に冠かんたる帝国シルヴィエも、かつては、ノルテ北辺ほくへんの小国、いや、数千年まえは、1つの貧しいます、小さな、小さな村であった。

かがやかしき聖者イキがあらわれ、聖教の本もととなる教えを説き、

やがて迫害^{はくがい}され、権力者の手によつて」

あたし、エリコを指で突く。

「あのさー、数千年まえつて、IEあったの？」

「うふつ、バカねつ、そういう設定をしたユーザーがいたのよ。あったりまえじゃーん」

「……殺された。おお、彼は、あらがうことも逃げることもせず^{せいきようと}に。教えを受けたさいしよの聖教徒^{せいきようと}たちは、弾圧^{だんあつ}に耐え、受難^{じゆなん}を崇高^{すうこう}へと変えた。

聖者は、かつて説きたもう、『人は、執著^{しゆじやく}する勿^{なか}れ』と。

また、聖者は、説きたもう。執著^{しゆじやく}のなくなるとき、にくしみは友愛^{ゆうあい}によつて終わる。

すなわち、人よ、ききなさい。

汝^{しいた}を虐^{しいた}げる者あらば、彼を祝福^{しゆくふく}せよ。右のほほをうたれたならば、左をも差し出^{いだ}せ。

しかし、時が経^たち、聖者の教えが多くの人の口^のに上^のるようになる
と、国王は、彼をにくんだ。

地上の権力者は、地上の権威^{けんい}より強い、天上の権威^{けんい}を憎^{ぞう}悪^おした。
そして、命じたのだ。

聖性^{せいせい}を詐^さ称^{しょう}する者をとらえよ、と。

磔^{たつけ}刑の火が聖者の身を焼きつくす。おお、その悲愴^{ひそう}よ、崇高^{すうこう}よ、

神聖さよ。神よ、永久^{とわ}に祝福^{しゅくふく}されよ。

ああ、人々は、胸裂^さかれる悲しみに泣く。

しかし、これははじまりにすぎなかった。権力者の不条理^{ふじょうり}な手は、
貧^{まず}しく力弱き信徒^{しんと}たちをもゆるさない。

迫害^{はくがい}の時代がはじまったのだ。

おお、しかし、名譽^{めいよ}のためでもなく、権力のためでも、金銭^{きんせん}のた
めでもない信念^{しんねん}には、屈^{くつ}すべき理由がない。

いかにふみにじられようと、いくら焼きはらわれようと、絶

えることもなくつぎつぎと生える草木のように。

ついに受難した聖教せいきょうが絶大の力を誇った権力者を屈服くつぷくさせた。

やがて栄えさか、いつしか数多あまたの宗教を統合とうごうし、大いなる聖性せいせいを世にあきらかにした」

人々は、拍手はくしゅし、宴うたげがさらにもり上がった。ここにいる人たちは、シルヴィエ聖教徒せいきやうとではないはずだったけど、語り部かたべのうまさと、ロウソクと松明たいまつのあかりのもとで語られる物語の崇高すうこうさに感激かんげきしていた。

ふしぎな気持ちだった。

翌朝わかいこうしやう、和解交渉そうむだいじんで総務大臣ヴァローが主張する、

「あなたがたの書きこみは誹謗中傷ひぼうちゆうしやうです。

雨や雪の多い季節なのです。あの軍服は着替きがえ用です。民兵をよそおうためのものではありません。

よって、即刻取り消しを求める」

「なぜ正規の軍服ではないのでしょうか」

「まにあわなかったのです。正規のものは、高価こうかで、手がこんでいるから」

「正規の軍服は人数ぶんギリギリしかないということですか」

「いまのところは」

「では、軍服の在庫管理帳簿ざいこかんりちょうぼ、軍の予算書よさんしょと決算書けつさんしょ、軍服の発注記録はつちゅうきろくまたは納品書のうひんしょ、発注業者名簿はつちゅうぎやうしやめいぼとその業者の全帳簿ぎやうしやぜんちようぼの公開を求めます。

それらの書類を突きあわせれば、最終的な軍服の数がわかります。もしも、それが兵士の数より多ければ、あなたがたの主張はウソになります」

ヴァローは、絶句ぜつくしたまま、だまってしまった。

ANKAは、さらに追い討ちをかける、

「兵士を偽装ぎそうさせようとした、いや、させた上に、さらにウソをか

さねるおつもりか。

いまのウソも、わたしたちに公表させたいとお望みですか？」

あたしたちは、あきらかに有利だった。

有利な立場に乗じて、あたしたちは、ハン・グアリスの管理権^{かんりけん}を要求した。

ANKAがひとしきり説明し、こうつけ加える、

「つまり、所有権^{しよゆうけん}はそのままレオン・ドラゴのものとしておいてよいのです。

ただ、その場所を、わたしたちにまかせてほしい。わたしたちは、あなたがたから干渉^{かんしょう}されずにハン・グアリスで活動したい。ただ、それだけです」

ANKAがそう説明した。つまり、難民に手を出させないための作戦だ。

「しかし、それは、いたずらにヴォゼヘルゴのうらみを買う。ボダ

シェヴィイ大統領は、レオン・ドラゴに敵意と憎悪をい尽くであろう。

それに」

総務大臣は、いったん、言葉を切った。そして、

「そうなれば、イヴィルどのが、いや、神聖シルヴィイエ帝国がなん
というか」

「イヴィル？」

「シルヴィイエの枢機卿です」

外務大臣のオーゼ卿がそういった。

スーキキョー？　なんだ、それ？　エリコをチラつと見る。

「眼でうったえんな、つつーの！　教えてほしいんなら、言葉でい
つてくれないかしら？」

枢機卿つてーのはねー、このばあい、神聖皇帝の相談役になる最

高顧問よ。

シルヴィイエには、5人の枢機卿がいて、神聖皇帝は、そのなかか

ら投票でえらばれるんだよ。しかも、票を入れるのは、その5人の
枢機卿たちだけで、つまり、じぶん以外のだれかのなまえを紙票に
書いて投票するんだ。

そういうのを互選っていうの。お互いに選り選ばれるから」

とつぜん、櫛の木彫の大扉がひらいた。

レオン・ドラゴの重鎮たちみんなが息を飲む音がきこえる。

そこに立っていたのは、大理石のような肌をした、冷やかな表情の若い男だった。肩にかぶるゆたかなあかい金いろのストレー
ト・ヘア、不敵なうす笑いを泛かべ、王や大臣やあしたちを睥睨し
ている。唇がうすくて、酷薄に見えた。

こ、こわい。妖しい威圧感が全身から霞のように立ち上がってい
る。

「イヴィルどの：」

そうよばれた男は、ゆっくり歩き、衛兵が持つて来た椅子に坐る。

「推参つかまつりました。貴国の重要事は、わが聖なるシルヴィエの重要事でもありますから」

上品に微笑む。

「つづきをどうぞ」

その異様なオーラに気おされて、だれも口をひらけなくなっていた。1人をのぞいて。

ユリアスがにこやかにいう、

「ちょうど、貴殿の話題が上っていたところでしたよ。しつれいかもしれませんが、おたずねいたします。

イヴィルどの、貴殿は、なぜこの国に来られましたか」

帝国の枢機卿の表情が冷たくこわばった。

「さような質問をされるとは。いかなる意味をふくんでおられるのかな」

「いやいや、他意はございません。

ただ、帝国の枢機卿すうききやうたるおかたがいかなるご用むきで、レオン・ドラゴにおられるのかと、ふしぎにおもったのです」

「なんと。さような疑問は不要なもの。」

われらが聖なる皇帝ジニ・ムイのねがいはずべての者たちのしあわせと全世界の平和です。

そのために、私わたくしは、つかわされました」

「なるほど。稀有けうな、そして、気高けだかいおこころざしとお見受けしました。」

しかし、そのためとはいえ、枢機卿すうききやうをおよこしになられるとは。国の外はけんへ派遣するには、あまりにも身ぶんの高きおかた。

次代じだいの皇帝やも知れぬおかたを」

「なんと、畏れ多おそきことを。」

不肖ふしょうなるこのイヴイルめなどにあつては、皇帝のいとも高き御位みくらいを夢想むそうにするとしても万死ばんしにあたいする不敬ふけいの罪。

お言葉をつつしまれよ、古王国こおうこくの王族おうぞくよ」

「よくござんじで」

「ユリアスどのを知らぬ者のほうが少なからう」

「おたわむれを申もうされる。

貴殿きでんのおこたえがそれ以上にいただけぬものならば、和解わかいの交渉こうしやうをとめてまで問う意味も、もはやありますまい。

さあ、外務大臣がいむだいじん、目下もっかの事案じあんについてのお話をつづけましょう」

しかし、イヴィルは、交渉こうしやうを再開さいかいしようと口をひらきかけた外務大臣がいむだいじんを制せいした。

「いや、少々口をはさませていただきましょう。

ハン・グアリスはレオン・ドラゴに固有こゆうの土地で、大平原しつくを疾駆しつくする騎馬民族きばみんぞくの精神です。

このような民族の精神文化せいしんぶんかのよりどころをたやすく他者たしやの管理かんりにゆだねるのは、いかななものかとおもわれます」

ANKAは、動^{どう}じない。ゆっくりという、

「どうぞ、ごかつてに。」

あなたがたがそうするのであれば、わたしたちは、ただ、事実をすべて事実のまま、真実を人々に知らしめ、人々のこころの正義にうったえるでしょう。

わたしたちの力は、ますます大きくなっていくでしょう。

たとえ強大な帝国であっても、正しい議論に屈^{くつ}する日がくるでしょう。

リアル・ウイルスが蔓延^{まんえん}しても、アバターをあやつるユーザーは、人間です。

かならず正義が亨^{とお}る」

「おどかしですか。脅^{きようはく}迫^{はく}が正義ですか」

イヴイルが嘲笑^{ちようしやう}のような冷たいまなざしを凍^{いて}てつかせた。

「脅^{きようはく}迫^{はく}？」

事実の伝達でんたつが脅迫きょうはくですか。

ユヴィンゴから南下してくるシルヴィエ正規軍のほうか、よほど、おどかしじゃないのでしょうか？

いったい、彼らは、なにゆえに南下して来るのでしょうか、
枢機卿すうききやうどの」

「さあ、軍のうごきは、私の管轄かんかつすべき事項じこうではありませんから。

おそらくは、この地方の紛争ふんそうを調停ちやうていするためか、もしくは、難民救済きゆうさいの活動かもしれないですね」

「わたしは、あなたを信頼しません。

シルヴィエも信頼しません。

帝国は I E にあるべき国ではありません。まるでリアル・ウィルスのような、ありうべからざる存在です。

人道じんどうを無視かし、科学技術がくぎじゆつを発達はったつさせて大量殺りく兵器さつを開発し、ひたすら強くあればよいと考えるあなたがたのありかたは、I E の

精神とは大きくかけ離れているからです。

あなたがたは、ユヴィンゴをあたかも属国ぞくこくのようにあつかい、ヴ
オゼヘルゴ支配に足手まといな難民を物のようにしまつしようとし、
レオン・ドラゴの政治にも深く介入かいにゆうしています。

わたしには、すでに大国となったシルヴィエがさらに強大になろ
うとして、わざわざ他国の問題にこんなにもさまざまに関連してい
ることじたい、ふしぎにおもうけど、権力の妄想や悪夢にとり憑か
れた者って、こんなもんなんでしょうね。

どんなことであつても、すべてを支配し尽くさないとゆるさない
のでしよう。

神聖シルヴィエ正規軍の南下も、あなたがたの世界戦略せかいせんりやくのうちの
1つなのにながいありません。

そして、わたしは、考えます。

あなたがたは、今日の交渉こうしょうの結果によつては、その南下のスピー

ドをはやめるでしょう、と」

「そうですか。」

いや。もはや、私は、なにも申もうしますまい。

神聖帝国軍の南下がおどかしであると、あなたは、非難ひなんしました。

私は、むしろ、あなたがたのために、おどかしであればよいが、と祈いのるばかりです」

イヴイルは、そういつて微笑ほほえむと、席を立ち、部屋を出た。

レオン・ドラゴの重鎮じゅうちんたちは、だれもおびえて沈黙するばかりだった。

しかたなく、交渉こうしょうは翌日に持ち越されたが、レオン・ドラゴがわは、再開さいかいと同時に、あつさりとあたしたちの主張を受け容れた。

18

神々の黄昏かみがみ たそがれ

キツネにつままれたような気持ちだったのは、あたしとミーシャだけだったみたいで、レオン・ドラゴの迎賓館げいひんかんの部屋にもどると、ANKAがうながした。

「急いで国に帰ろう」

イスもユリアスも、だまってうなずいた。

王都の門をくぐり、戦艦せんかんを降りて、ジョリーが風のようなスピードでクーガを離れはじめると、ANKAは、話し出す、

「彼らがあつさり譲歩じょうほしたのは、もう交渉こうしょうなどというまどろっこしいことはせずに、わたしたちを力でたたきつぶそうと決めたからだ。

もはや、わたしたちに時間のよゆうはない。

いつこくもはやく、シルヴィエ軍へ、なんだかの対策たいさくを講こうじないといけない。

しかし、いったい、どんな手があるだろう。南下して来る敵軍の推定兵力すいていへいりよくは、数万以上、いや、数十万だ」

「しかも、自走式装甲戦闘装軌車輛や重機関砲なんかの大量殺戮兵器でかんぜんに武装している」

イースがそうこたえた。

あたし、震える。リアルに怖い。

ユリアスがいった、

「対シルヴィエ戦略も重要だが、せっかく難民のために、ハン・グアリスの管理権を獲得したんだ。そちのほうも仕事をすすめよう。

ちなみに、シルヴィエ問題に関しては、私に案がある」

「なによ」

A N K A がきいた。

「ラグナレクさ」

エリコが息をのむ。

「神々の黄昏……辺境伯」

A N K A もイースも、うなづいて考えこむ。

「なあーに、そんなにむずかしく考えることはない。

ほかになにかよいアイディアがあるかい？

シルヴィエの科学兵器に対抗できる者といえば、あの大魔王しかないだろう。

さ、とにかく、国に帰ろう。そして、態勢をととのえるんだ」

午後4時、あたしたちは、クラウドにもどった。休む時間もとらず、会議をはじめる。

A N K Aのあたまのなかにはすでにプランがあり、それが即決された。

「じゃ、これから具体的な役割の分担をいうわよ。

ハン・グアリスの警戒には、イス、エリコ、ミーシャ、迦楼羅、

エチカ、ユユ、氷裂、ソントグ、カノン、バロイ、ノーロイ、チェ

バロ、ミハイルアンジェロ、ボノ、グローとガリア・コマータ、R Z D、

カブキ、タイラク。

あなたたちは、平原にあるすべての街道に検問所をつくって、出入りする人間を徹底的に制限して。

そして、平原のあっちこちにちらばっている難民を、警護しやすいようになるべく集め、つねに難民の周囲にいて警戒するようにして。

襲撃者のやりかたは、ゲリラ的で、正体がバレないように民兵や盗賊をよそおって襲い、殺戮している。

それをよく理解し、慎重に見きわめて、じゅうぶんに警護してほしい。

それから、衣類や食糧や薬の配給も可能なかぎりお願いするわ。

わたしたちの無実が万人周知の事実となってきたせいもあって、ネットを見た人からの難民救援の物資が急激に集まりはじめているからね。

できれば、ボランティアで医者に来てくれればいいけど……いま

は、まだ、そういう連絡はない。

イス、エリコ、あんたたちに指揮をたのむわ」

エリコ、うなずきながらも、

「わかった。

でも、人数も配給品はいきゅうひんも足りないから限界が低い。それに、理想を

いえば、莫大ばくだいな資金がひつようね。

ボランティアや寄附きふじゃ追いつかないわ。

わたしなりに少し考えさせて」

「OK、まかせるわ。

それで、わたし、ユリイカ、ジャジュ、非録斗ひろと、ユリアスは、ラ

グナレクの湖上城こじょうじょうへいって、シルヴィエ軍の南下を阻止そしするか、妨ばう害がいするように依頼いらいする」

ユリアスの進言を容れた結果だ。

ANKAは、言葉をつづける、

「そして、もし可能ならば、わたしたちとともに闘ってくれるように、協力を要請する。それに」

「それに？」

あたし、きいた。

「へんきようこりよう辺境小領の伯爵にすぎない身分でありながら、大帝国を敵にまわしても、いっこうにゆるがないラグナレクそこしの底知れないふしぎの力をもつてすれば、リアル・ウイルスについて、わたしたちには、知ることのできないようなことも、知ってるんじゃないか、って、彼の異能いのうに、ちよつと期待しているんだよね」

それをきいた~~いれつ~~裂が鼻さきで、「ふっ」って笑った。

ANKA、少しムツとし、

「笑いごとじゃないわ。しんけんなのよ。」

考えてもみて。最大の問題はウイルス。The ideal earth理想の大地を現実世界み

たいに変えちゃっているウイルスがある。

でも、わたしたちには、それがどういうものなのかとか、どこにいて、なにをしているのかとか、だれがつくったのかとか、ぜんぜん、わからない。わからないけど、くじよ駆除するか、かくり隔離するかしなくちやいけない。

けど、そのためには、どこにウイルスがいるのか知らなくちやいけない。わずかのヒントでも、なんでもいいから情報がほしい。

ワラ藁をもすがる気持ちなのよ」

イースとチェバロが同時にうなずき、

「あの怪人かいじんならば、ありえない話じやない」

ユリアスがいう、

がつきゅうじょう「学究上の資料がほしくて、彼とメールのやりとりをしたことがあるので、こうしやう交渉は私がメインでやりましょう。

いった以上、責任はとりますよ。

アポイントメントは、いま、メールでちよくせつ入れます」

「よつしや、出発じゃ。難民の警護^{けいご}じゃ」

そういつて、バロイがジョッキを呑みほす。

「ちよつと待てよ。ノーロイには、馬がないが、だいじょうぶか」
ボノがいった。

ノーロイ（乗せられる馬がいるのかなア……）だけじゃなく、ミハイルアンジェロにも馬がない。

イスがいった、

「ぼくが龍馬^{りゅうば}をつごうしてこよう。1人じゃ、3頭以上を御^{ぎよ}しきれないので、迦楼羅^{かるら}といく。

エリコたちは、さきにいつてくれ」

「あてがあるのか？」

べ裂^{いれつ}がきいた。

「あります。

そもそも、ここは騎馬民族^{きばみんぞく}の国。ハイムブルグにいけば、たくさ

ん馬がいます。希少な龍馬も十数頭いるはずです」

『石の城壁と高原のハイムブルグよ』、カノンが古い民謡を口ずさんだ。

ユリアスがいう、

「ハイムブルグか。

クーガのそばをとるはずです……。気をつけていったほうがいい。イースのことだから、だいじょうぶだとはおもうけど」

「ああ。だいじょうぶさ」

あたし、ANKA、ジャジュ、非録斗が應龍に乗り、ユリアスが黒い龍馬に乗る。

2頭の麒麟をイース、迦楼羅がつかい、海馬2頭をエリコとエチカ、ミーシャとユユがつかう。ANKAは、

「『kOO』を持っていくわ。だれもない場所においていくのは危険だわ。」

肌身離はだみさず、わたしとユリイカとでまもるのよ」

だれも反論しなかった。出発する。すでに夜の8時だった。

みんな、おたがいケータイで毎日、連絡をとりあうことに決めている。あたしたちの連繫れんけいが国家なのだ。

翌日の早朝には、もういくつかメールが来ていた。

ハン・グアリスを警戒するグループは、縦横じゅうおうに走る街道とその枝道えだちに、いくつもの検問所けんもんじょを設置し、おもにグローとガリア・コマータがそこで通過する者たちをしらべて、武装した者をいつさい平原のなかに入れないようにしているとのことだ。

エリコとエチカとがそれらの検問所けんもんじょをまわって、ようすを見ているらしい。

ミーシャ、ユユ、カブキ、タイラクは、難民たちのあいだをまわって、食糧や衣料いりょうや薬をくばってまわっているという。とうぜんだけど、ぜんぜん手がまわらないらしい。

ベ^{いれっ}裂、ソントグ、カノン、バロイ、チエバロ、ボノ、RZ^{リザド}Dは、平原を昼夜^{ちゅうやじゅんかい}巡回し、虐殺^{ぎやくさつ}がおこなわれないよう、監視しているが、いまは不^ふ穏^{おん}なうごきはない、とのことだった。

しかし、RZ^{リザド}Dって、こういう仕事、だいじょうぶなのか？ なんか似あわないけど。

ちなみに、クラウドの難民救済のようすは、そのつどミニ・ブルグで報告され、多くのフォロワーのフォローが集まっていた。

そのうちのなん人ががじっさいにハン・グアリスに来て、難民のめ^みんど^{りよう}うを看たり、食事をつくってあたえたり、病人やけ^ちが人を治療したり、検問所^{けんもんじょ}の仕事をしたり、虐殺者^{ぎやくさつしや}を侵入させないための巡回や監視活動を、ボランティアでやりはじめている。

情報って、だいじなんだナー。

などともいつつも、でも、ゲームの世界だから、交通費もかかるわけじゃないし、仕事があるからいけないとかないし、よーするに、

現実とちがつて、なんのリスクも損失そんしつもないからなー。

などと、ミもフタもないことも考えてみたりもする（笑）。

イース、迦楼羅かるらは、ハイムブルグでみごとな龍馬りゆうばと2輪で走る戦車を手に入れたようだ。写メがおくられてきていた。

戦車はノーロイ用だろう。型は古いけど、武骨ぶこつでがんじようみた
い。

ミハイルアンジェロとノーロイは、イースと迦楼羅かるらの帰って来るのを、待ちどおしくおもっているようだった。

順調、……っていうには、ほどとおい。でも、なにかがすすんでいる感じがして、気持ちは上がっていた。やっとなにかができるようになっていた。

湖上城こじょうじょうへむかう應龍おうりゅうの背なかで、あたし、ANKAにきく、

「ラグナレクって、湖上城こじょうじょうに住んでいるんだよね」

「そうよ。」

アカデミアのバルメニデス寮に、はじめて入った日、階段の壁にあったタペストリーに織おられていた絵、おぼえているでしょう」

「うん。すごい、神秘的な光景だった。」

どんな人なの、ラグナレク、って」

「魔神ましんね。」

あなたも、知っておくひつようがあるよね。

じゃ、まず彼の生おい立ちから話すわ。

さいしよから湖上城こじょうじょうにいたわけじゃない。サン・クトウ地方とい

う辺境へんきようの領主りようしゆの家に生まれたのよ。

サ・クトウはモンテ大公国だいこうこくの一地方で、モンテ大公国はユヴィン

ゴとヴォゼヘルゴとにはさまれている小さな国だった。

っていうと、すぐくとおいみたいだけど、シルヴィエーユヴィン

ゴ・モンテ・ヴォゼヘルゴ・レオン・ドラゴ・クアバ、ってつづい

ていく道は、脚あしのよい馬なら、2週間くらい。

ちなみに、屋敷^{やしき}はサン・クトウのブラウワ村にあったから、ブラウ城館^{じょうかん}とよばれていたわ。

で、ラグナレクはブラウワで生まれたんだけど、母親だったユーグノ伯爵夫人イリヤーシャは、ある晩、^{インキュバス}夢魔^{おそ}に襲われ、はらんでしまった、といわれているの」

「ええ？」

「うわさよ。」

で、生まれてきた、いわくつきの赤ん坊がラグナレク伯爵。

彼は、幼少時から異常な能力をあらわしていたらしいわ」

「魔法つかいなわけ？」

「てか、異能^{いのう}の持ち主ね。父親は、彼の生まれた日に死んで、母親は、彼が5歳のときに死んでいる。

2人とも惨殺^{さんさつ}体でね」

「まぢーっ！　なんでよ？

ねー、ANKA、あたし、いかなくてもいい？」

「ここまで来て、なにいつてんの。いいから、ききなさい。」

それで、使用人^{しやうにん}たちも怖がっちゃったらしい。でも、辞めるに辞められない。

そんなふうに数年がたったのよ。

ラグナレ伯爵^{しやぐゐ}は、爵位^{けいし}の継承^{けいしやう}のみとめられた11歳の冬、ブロウワの館^{ほうき}を放棄^{ほうき}した。

そして、奇人^{きじん}で知られた6代まえのワシーリイ伯爵^{しやぐゐ}が建てたまま、無人^{むじん}となっていた湖上城^{こじやうじやう}を改修^{かいしやう}し、外部^{くわふ}との交渉^{かうしやう}をいっさい絶^たつて、そこに「籠城^{ろうじやう}」してしまったのよ。

彼の名が世界にとどろいたのは、3年まえね。

ラグナレクが湖上城^{こじやうじやう}へ移動した翌年^{だいこうこく}、モンテ大公国^{たいこうこく}はシルヴィエ帝国軍^{しんか}によって占領^{せんりやう}され、ルクセク大公^{たいこう}が神聖皇帝^{しんか}に臣下^{しんか}の誓い^{ちか}を立てさせられた。

そして、モンテのすべての諸侯はルクセクにならった。ラグナレクをのぞいて……」

「ええ！　じゃ、なんで、いまもいるのよ」

「ラグナレクが13歳のとき、シルヴィエは1万の正規軍を湖上城こじょうじょうのあるムユイノヒ地方におくりこんだ」

「でーっ？」

「で？　全滅よ」

「？　だって……あたしたち、これから会いにいくんだよね？」

「全滅したのは、シルヴィエ正規軍のほうよ。」

モヘロエの森で1人のこらず死んでしまったらしいわ」

「うえええええーっ、うつそーっ、なんで？」

どお、どーゆーことよ、ラグナレクは軍を持っていたの？」

「常備軍じょうびぐんは……せいぜい、2百人ぐらいだったとおもう」

「2百で1万を？」

「どうやって戦ったかは、だれにもわからない。もちろん、湖上城こじょうじょうの人間は、わかつているでしょうけどね。

わたしたちのような外国人で、知っている人は、だれもない。てか、戦闘があつたかどうかさえ、確認されていないのよ」

「ねー、いかなきゃだめ？」

「リアルにムリでしょ。もう（笑）」

ユリアスが声をかけてきて、

「ユリイカ、あなたは、ムジョーのつかい手ではないですか。

レベルからいえば、伯爵にはりあえるのは、あなたといれっ裂ぐらいですよ。

ムジョー。怖ろしい技ですね。だれも逃れられない。どうか、私にだけは、お手やわらかにおねがいますよ」

って、ウィンクする。

あたしたちは、丘陵地帯きゅうりょうちたいを駆けぬけ、森に入り、遠くに見える北

の山岳地帯へとすすむ。さんがくちたい

午後、霧が深くなってきた。ふんいきはさらに陰鬱で、神秘的になる。道は坂になり、木々は低くなり、しだいに草木はなくなり、岩だらけになると、霧も雲もなくなり、よじ登るようなけわしい崖の路となり、すぐに路なき路となった。そして、ふたたび下りになり、谷底へいく。亀裂のように切りこんだ谷が山脈を縦横に走っていて、それがルートになっていた。

しばらくすすむと、平地がちかいのか、ふたたび深い霧におおわれるようになってくる。

まるで、すすめばすすむほど、沈んでいくような感覚だった。

ANKAが憂鬱な顔をしていたことに、あたし、気がつく。

「どしたの？」

あたし、きいた。

「エリコよ。」

ちよつと、かつてな行動してるらしいの」

「えっ？」

「まあ、彼女の考えもわかるんだけどさー。まかせるっていったのも、わたしだし。

けどね。

そうよ、たしかに財源さいげんがないわ。お金の出どころがね。

寄附きふやボランティアにたよるだけでは、規模きぼが小さいことしかできないし、なにかと時間もかかる。

難民救済なんみんきゆうさいには、莫大ばくだいなお金がかかる。資金が潤沢じゆんたくなほうが救援きゆうえんも

すすむし、たとえば、仮設住宅かせつじゆうたくなんかをつくることもできるようなるし」

「ごめん、話が見えてないんだけど」

「むろん、管理を委託いたくされているんだから、違法いはうじゃないわ」

「??」

「あー、ちゃんと説明するわ。

エリコがね、検問所けんもんじょで通行税つうこうぜいをとっているのよ」

「つーこーぜー？」

「そう。

いろいろな商人やビジネスマンが商売するために品物をつんで街道をとおるでしょう。

そのはこぶものの内容や数や重さによって、お金をはらわせるのよ。はらわなきや、道をとおさない。

検問所けんもんじょを通過させないってことよ。

だから、商人たちは、みんなはらうわ。貧乏な人はムリだけど」

「えつ、道とおるだけで、なんでそんなことできるの？」

「だって、道を整備せいびするのにお金がかかるでしょう？

道をとおる人は、整備せいびされた道をつかえるんだから、お金をはらう、って理屈も成り立たなくはないのよ」

「いわれてみれば、そうね。あたしたちがつくったんじゃないけど」

「でも、警備^{けいび}しているからね。

おかげで盗賊^{とうぞく}に遭^あうリスクが少なくなる。

まあ、ほかにもいろいろ理由はあるけど、おおざっぱに言えば、そういうことなのよ」

「わかった。でも、ANKAは、いやなんだよね」

「そりゃー、あんまりにも、現実っぽいやりかただからね。

まさか、彼女、ウイルスにやられてないよね、とか考えちゃって」

「まさかー。

だって、ユーザーがウイルスにやられるわけじゃないじゃん」

あたし、犯人が環境的人物なら、って考えが一瞬、ひらめいた。

「ウイルスをしかけたやつと、聖典を奪っているやつは、きつとつながっているよね。そいつが首謀者よね。

ジンは、どうやってそいつらとつながったんだろ。ジンが首謀者

とはおもえないから」

ANNAは、

「接触せつしょくしたとすれば、IEのなかでとしか考えられない。とすると、

シルヴィエよね……」

あたしがそれにこたえようとしたとき、ユリアスがいう、

「霧きりが晴れたよ！

ほら、あれだ！ あれを見て！」

あたしたちは、山にかこまれた平地にいた。眼のまえには台形だいけいのかたちをした山が見えている。

「ユイゴード山だ。見てのとおり、むかしは火を噴く山だった。いまは死火しかざん山だ。」

さあ、もうすぐ湖上城だよ、ユリイカ。ここを登るんだ」

え？　なんで山を登るの？

19 湖上城の月

太陽はすでに深くかたむいていた。

斜面の角度がかなりきつく、垂直に感じられる。龍りゅうは飛翔ひしょうするくらいいんだけど、ユリアスの龍馬りゅうばはそういうわけにはいかない。脚あしで登った。汗あせだけで難儀なんぎ、なかなかすすまない。

やっと頂上に着いたとき、夜になっていた。あたし、息を飲んだ。信じられない光景。

月の光に照らされた広大な湖があった。山の上に。湖は鏡みたい
に波がない。

ユリアスがつぶやくようにいう、

「カルデラ湖っていうんだ。

火山が死んでから、噴火口ふんかこうに水がたまつてできる湖のことだ。

おわんみたいにまわりは垂直にちかい岩の壁、そのなかに湖があ

って、湖の中央に城砦があれば、もう難攻不落さ。なんこうふらく

「どうか、ちかづけない」

城は湖の中央にある岩の上に剣のように建っていた。無表情に、
冷厳れいげんとしていて、周囲を睥睨へいげいしている。

異様な光景。タペストリーよりはるかに凄絶せいぜつだ。あたし、しばらく
くうごけなかった……

「どうやっていくんですか」

非録斗ひろとがきいた。

ユリアスがこたえ、

「空路がいちばんいいね」

「空路って、あたしたちは、いいけど、あなたや龍馬りゅうまはどうするの？」

って、いい終わんないうちに、数千万の星が鳴りひびく夜空を、
なにか黒くて平べったいものがせまってきた。

ステルス戦闘機？

いや、ぜんぜんちがう。

漆塗りうるしぬのような黒い鱗うろこで、眼しゅあかが朱紅いろの龍りゅうの群れが屋根のない大きな車を牽ひいて、目のまえの空中に躍おどっていた。これ、龍車りゅうしゃといふべき？……なの？

覆面マスケラをかぶった男が龍車りゅうしゃから階段を伸ばして降りて来た。眼のとこだけがほそく切つてある。髪が銀いろっぽい白髪で、オールバックだった。ヴィクトリア朝時代ちようのイングラントの執事しつじみたいな服装をしている。

「シーザーと申します。お待ちしております、ユリアスさま、ユリアスさまのご友人さま。

さあ、どうぞ。お乗りください。そちらの龍馬りゅうばもいっしよに乗れますよ」

空を飛んだ。

ふしぎな光景だ。

ひろいバルコニーに着陸^{ちやくりく}。ぶきみな白い城。なんか人の住んでる感じがしない。生物がいそうな感じがまったくない。月面^{げつめん}かよ。時間が止まったかのような静寂^{せいじやく}。

高さ7メートルくらいありそうなアーチの入り口には、すけるような絹^{きぬ}のカーテンが風もないのにゆれている。

案内された部屋はウェイティング・ルームだった。高級ホテルのバーみたいな感じ。カウンターがあつて。あたし、おもったんだけど、ここであたしお酒飲んだら罪なのかしら？ からだには同じ現象起きるのよね？

暗いバーでジュース飲みながら待つ。エリコにメール入れてみる。
「お待たせいたしました。どうぞこちらへ。廊下^{ろうか}は暗いのでお氣をつけください」

ロウソクの燃える暗い廊下^{ろうか}を歩いた。儀装^{ぎそう}した2人の男が立つ扉^{とびら}を入ったところは食堂。ひろいし、彩^{いろど}りも複雑で、クリムゾンやら、

木彫もくちょうの濃い暗褐色あんかつしよくやら、真鍮しんちゆうランプとロウソク台の金メッキやら、漆喰しつくいの白やら、額縁がくぶちの金塗りきんぬやら、絨毯じゅうたんの深い緑や黄いろやら……
なのに、アカデミアの食堂より陰鬱いんうつなのは、なぜ？

古くすたて廃れた教会か、地下のうこつどうの納骨堂のほうがはるかに陽気な気がする。

天井高くて見えない。それなのに壁の上のほうにも、くすんだ肖像画しょうざうがが……先祖の雄姿が画えがかれてるらしいけど、判別はんべつできねーし、意味なくね？

主人の伯爵がそこで待っていた。ユリアスは、礼をいう、
「とつぜんのわれらの願いをおききとどけくださり、拝謁はいえつの栄誉えいよを
あたえてくださったこと、深く感謝申し上げます」

伯爵は、彫像ちようざうのように、まばたきすらせず、応答おうとうもなかった。
なんなの、こいつ。

氷河ひようがの奥おくのような碧そうぼうい双眸まへ。うすくて深いAZULアズル（青）。

髪はまっすぐでひざまでありそう、坐ると床に着く。真っ白だし。

ほそいコートも、レースが飾られ、刺繍の縫われた大きなカフスも、マフラーみたいに太いタイも、すべて真っ白。

顔は白大理石の彫像みたいにつるつるしてるし……なにも表情がない。

眼がどこも見てない。瞳が死んでいる。ぜんぜんうごかさないし。蛇みたい……。

手まねきで、ラグナレクは、あたしたち6人を席に導いた。

坐るよ。しかたないし。

シャンペンが来る。あたしたちは、ウーロン茶。

ユリアスが讃辞を叙べる。主人は、こたえない。

生牡蠣が給仕された。あたし、一口食べて驚いた。

「信じられない、なんで、こんなに新鮮なの？ ジェット機でも持つてんの？ 滑走路ないみたいだけど」

「ほんとだ」

非録斗ひろとも同意する。

「それがマジックなのさ」

ユリアスがいった。

フォアグラのソーテルヌ風味ふうみのゼリー添えぞ。ワインはシャトー・ディケム。

主菜しゅさいは子羊こひつじの骨つき背肉せにくのロティのいちじくとクルージェット添ぞえ。ワインはシャトー・ラトゥール。

「幸先さいさきがいいぞ」

ユリアスがいった。

ANKAがきく、

「なんで？」

「来訪者らいほうしゃとともにする晚餐ばんさんというのは公的な儀式ぎしきだからね。

食材やワインにランクがあるのさ。出てくる物で相手へのリスぺ

クト度がわかる。私たちは、王さま級のもてなしを受けているよ」

あたし、信じらんないけど、なんかなっとく、

「うっそー。なんで？ でも、どーりで、ちよーうますぎなわけだわ」

「ユリアスへのリスペクトのおかげかな」

非録斗ひろとがそういったけど、ジャジュは、

「どうかな。」

龍りゅうの称号しょうごうは、第3位の称号しょうごうで、はつきりいつてIEでは世俗せぞくの王

さまなんかよりは、ほんらい上なはずだし、ユリイカがムジョーのつかい手なのは、もう各地で知れわたっているから」

知れわたってんだあ。すげー。なんか、有名って、きぶん最高。うふ。

ポテトのパセリ風味ふうみが出てきた。

うめーよ。用事わすれた、かんぺきに。

A N K Aが、

「ところで、伯爵、ご相談したいことがあります」

ラグナレクが手を止めて、はじめてA N K Aを見た。かすれた、やや高めのエコーっぽい声で、

「シルヴィエの件か」

し、しゃべったあー、つか、こ、怖えーよー。なんでわかるんだよおー。

「そのとおり」

「よかろう。ちかごろ倦^うみ疲れていた。たいくつしのぎに、ちょうどよい。

ふ」

「じつは、もう1つ重要なお願いがあります」

「ウイルスの件だな」

だから、なんでわかるんだよー（怖）

「お察しのとおり」

ラグナレクは、とつぜん沈黙する。そして、とーとつに語りはじめた。

「5歳のころ、母を殺した」

まるで、贅沢ぜいたくなお世辞せじでもいったかのように微笑する。

笑った？ 笑えるのか？ つか、なんなんだ、こいつー。キモすぎ。

「父は、異形いぎようの私を殺そうとした。

出産の部屋で戦斧せんぷを持って待っていた。母は、産うまれてくる子のためにいのちごいをし、産うみの苦しみにたえながら、涙してうったえた。

私は、産うまれた。父は、斧おのをふり上げた。母の悲痛ひつうなさけびがひびいた。

くだけちったのは、父の肉体だった。

私の『力』が自衛じえいのために、私の意識にさきんじて父を殺した。

父が私を殺そうとしたのは、たんに私が異形いぎようの胤たねから生せいを受けたからだけではなかった。深い嫉妬しっとだ。たんなる嫉妬しっと。ふ。

それが人間というもの。じつに醜怪しゅうかいだ」

満足びしようげに小さく微笑する。

盆ぼんにのせられた、なん種類ものチーズがはこばれた。どれかえらべって給仕きゆうしがいうんだけど、そーゆー状況じゃなくねー？ 空気読めやー。

「そのあとも、事件が私のまわりでは起こりつづけたのだ。

亡父ぼうふの可愛こひがつっていた獵犬りようけん数匹が野獸そうがの爪牙そうがにひき裂かれたかのような惨殺さんさつ体たいになっていたとか、私といっしょにあそんでいた召使はんべつのこどもが、とつぜん、あたまを破裂はれつさせて顔も判別はんべつできない骸むくろになつてしまった、というような事件が……つづいたのだ。

私が5歳になったとき、母は、教会に相談した。神父は、聖なる

五鈷杵ごこしよを授けて、いった、

『これで悪魔を刺せば、悪魔は、滅びます』

母は、驚きおどろ、そして、悩み考えなや、ついに決心した。

しかし、彼女が屋敷やしきにもどるよりもまえに、私は、その悲痛ひつうな決意を知っていた。

私は、母を愛していた。私は、母に殺されるつもりでいた。

その晩、私の『力』が母を八つ裂きざにした。

私は、じぶんが生きたいがために、じぶんの母を殺した。私は、じぶんを産んだ女を殺した。私は、この世で唯一ゆいじぶんを愛してくれた人を殺した。じぶんが生きたいがために。

ふ。素敵すてきだ。

そう」

また、贅沢ぜいたくなお世辞せじでもいったかのように微笑する。

「きみも眼薬めくすりを眼に差したことがあるだろう。あれと同じだ。

わかつていても、まぶたがうごいてしまう。眼に入れるために差しているにもかかわらず、眼をまもうとして、まぶたがかつてにうごいてしまう。

それが生存せいぞんの蠢うごめきだ。

生きたいと渴望かつぼうするみにくい、分別ぶんべつのない意志いしだ。無明むみょうなる生存せいぞんへの意欲いよくだ」

たのしげに笑う、そのぶきみさ。

怖いより、もお、デザートがなんだったか、おぼえてねー。

「現実せいぜんのすべて生存せいぞんによって存在そんざいしている。

生きたいという願望がんぼうが、不安きづかが、気遣じかんせいいが時間性こうちくを構築し、過去・

現在・未来を構成する。

存在そんざいを存在そんざいたらしめる意識が、意識に、意識として、現象げんしょうをあたえる。

なにもかもがじぶんこそ生きたいと渴望かつぼうしてうごめく、みにくい、

分別ぶんべつのない意欲いよくだ。宇宙そのものが汚辱おじよくにすぎない。

それゆえ、現実げんじつは理不尽りふじんで、力だけの世界でしかない。

ふ。

ウイルスの居場所が知りたいのか？

そのために、わざわざここまで来たのか？

おろかな。ウイルスは、どこにでもあたりまえのようにいる。すべてがウイルスだ。識別しきべつできるはずがない。ムに均ひとしい。ふ。おま、え、問いは問いなのか？

ムこそアカデミアの説とく真理しんりの中ちゆう枢すうではないか？ ウイルスは、

IEの理りになっっている。考えてみよ、IEをよりリアルにさせるウイルスは、真理しんりの中ちゆう枢すうにあるに決まっっている。IEの奥義おうぎそのものとして存在そんざいする。

だが、なんのために、それを知ろうとするのか？ だれもが知り、だれにも知ることができない。

すべてすでに『力』によってさだめられている。しよせん、生存せいぞんからは遁のがれられない」

「でも、努力することに意味があるっていつてたわ」

あたし、声が出ちゃった。

ラグナレクがしずかなまなざしであたしにきく、

「だれがだね」

「イクシュヴァーン学長」

ラグナレクは、高らかに笑った。そして、

「虚むなしいことだ」

なんだ、それ？ 意味わかんねー。

ANKAが問う、

「真理しんりの中ちゆう枢すうって、具体的に、どこですか」

ラグナレクが氷のまなざしで見ろ。そして、ふたたび微笑びしょうした。

「ふ。」

龍^{りゅう}の位^{くらゐ}に敬意^{けいゐ}を表^{ひょう}してこたえよう。真理^{しんり}の言葉^{ことば}を。

『努力^{どりょく}することに意味^{いみ}がある、さがすがよい』とな

なんなの！ それ、皮肉^{ひにく}？

さつきは、虚^{うそ}しいっていったくせに！

でも、あたし、まだききたいことがあつた、

「待つてよ、もお1つ、教えて。

なんで、あたしたちは、ねらわれるの？」

伯爵^{まゆ}が少し、眉^{まゆ}をつり上げた。

「あたしたち？

そうではない。

ふ。

青龍^{せいりゅう}よ、正しく問わなければ、正しいこたえはえられない。叡智^{えいち}

学^{がく}の権威^{けんゐ}よ、正しく問いなおすがよい。さすれば、おのずからこた

えはあきらかとなろう。

ユリイカよ、どのようなことにも原因がある。

あたかもそれは、かみあわさった左右2つの歯車はぐるまのようなものだ。

左の歯車はぐるまが回転しているのに、右の歯車はぐるまが回転しない、というよう

なことがありえないのと同じだ」

そういいのこして、ラグナレクは、席を立った。食事は終わった。

ケータイ見た。エリコ、返信しろやー。

20 エリコ電話出ろッ!?

その晩は泊とまって、翌朝よくあさ、出発した。

崖がけからおちる深い影、朝日こめんに湖面がきらめき、岩の島は黄金おうごんに染そ

まり、湖上城こじょうじょうもかがやき燃えている。飛び立つと、やっと解放され
たきぶんになっていた。

帰り道、あたし、返信待つのがめんどくさくなって、エリコに電

話した。5回めくらいで、やっと出やがった。

「なんなの、ユリイカ。わたし、ちょー忙しいんだけど？」

「そう。順調なの？ あんたの仕事って、むずかしいし、たいへんそーだから気になってんだよ。それぐらい、わかんねーの？」

「わかるよ。たいへんだよ」

「そういえば、あんた、つうこうぜい通行税とってるんだって？」

「わるい？」

お金がなくっちゃ、なにもできないわ。正当な料金なのよ。なに
もわるくないわ。わたしがしょうがくせい商学講座卒業ってわすれたの？ まちが
ってなんかないわ

「そうかしんないけど」

「そうかもじゃなくって、そうなの。」

あんた、ねー、これでも苦勞してんのよ。たいへんなだから。

平原ひろいんだから、か駈けずりまわってさー。ミーシャにも今日は

まったく会ってないわ。

おかげでさー、ハン・グアリスのあっちこっちで難民見ることに
なっちゃったよ」

「そうなんだ。でも、なんか、いいきぶんじゃないなー」

「あのね、かわいいそうな人たちがそれで救^{すく}われてるのよ。

気持ちだけあったって、なんにもならないでしょ？

あんたは、現実見てないから、そんな理^り想^{そう}論^{ろん}が^いえるのよ。

こっち来なよ、かわいいそうな人たちで、いっぱいだよ。

食べもなくなつて、母^ぼ乳^{にゅう}の出なくなつちやつたおかーさんいてさ

あ、赤ちゃんがやせちやつてさー……でも、その若いおかーさんも、

瀕^{ひん}死^しなんだ、泣^なき震^{ふる}えながら、うったえるんだよ、『死ねないつ、

この子を残して死ねない』って。まじ泣いたよ、わたしも。

すぐ食べものとミルク持っていったけどさー。そんな人たちばっ

かしで、ぜんぜん追いつかないよ。

ほんと、焼け石に水ってゆーの？ そーゆー感じだよ。すげえー
病むわ。てか、絶望的になる」

「わかった。あたしもすぐ手つだいにいくよ」

「まあ、帰ったら少し休んで、それから来なよ。

けっこー、たいへんだっただろ、ラグナレク。すんごいやつだしね。こんど、きかせてよ」

「うん。じゃーね。気をつけてね」

「心配ご無用むようだっつーの。

セキュリティには、ちょー気いつかってるから。

じゃあさー、いそがしいから。またねー」

「バイ」

あたしたちは、いったん、クラウドにもどった。ノーロイとミハイルアンジェロがまだいた。

イスは、到着してないらしい。たぶん、がんじょうな戦車を

牽く龍馬は應龍や麒麟のような、飛ぶような走りかたができないせいだろう。

「そろそろ、日も暮れる。少し休んで、明日、エリコたちと合流しよう。そのころには、イースたちも帰って来るかもしれないし」

ANKAがそういった。そう、休みたいよ。

ラグナレクにやられたよ。

活動する気力なし。ダルい。なんか、学校にかよっていたときみたいだ。じぶんの部屋でベッドにたおれこむ。

メールきた。非録斗だった。

『だいじょうぶか。すごく疲れただろ。今日は、まだムリしないほうがいい』

やさしいよな。癒されるよ。それなのに、いまだにコウキくんのメール来んじやないかみたいに待ってるじぶん。あー、めんどくせーやつ、ユリイカって。

またメールだ。こんどは、ミーシャだ。

『スッゴい、忙しーッお。』

でもネ、ナンカ、ヤバイのー。チツチャな難民キャンプがいくツか襲^{おそ}わレチャッテ。ほゑとに殺されて。わたこ（涙）……。ヒドいのよ、虐殺^{ぎゃくころ}だお』

難民キャンプが襲^{おそ}われた？ だれによ！ もー、ミーシャのメール、まどろっこしい。あたし、つづきは読まなかった。エリコに電話した。

「どういうことよ」

エリコのまわりはガサガサしてる。静寂^{せいじやく}なこつちとは、ぜんぜん、ちがう。

「怒鳴^{どな}んでってばっ！

このだだっぴろい平原をスタッフ数十人でまわって、警護したり、水や食べるものや着るものをわたしたり、ケガや病気の治療をした

り、防寒具や毛布をくばったり、いっしょになって風や雨をしのぐ場所をつくったりしているのよ。

なん万人もの人間が集まっていたかとおもえば、少人数で灌木の
かげや、藪にかくれたりしている難民もいて、見つけるだけだって、
たいへんなんだから。こっちだってさー、やりきれないよ」

「わかったわ。ともかく、あたしたちもいくから」
疲れなんてふっ飛んじやった。

ベッドから起き上がって部屋を出る。ANKAに話した。

「わかった。ともかく、現場にいこう。」

街道を、いったん、規制したほうがいいわね」

「あー、そうだ、そうだよ、ANKA！」

さっそく、あたし、エリコに電話する。よび出し音が鳴る。AN
KAは、

「じゃ、わたしは、ほかのみんなにメール送っとくわ。」

ともかく、さきに出るよ」

といって、部屋を出ていく。

あたしが街道の規制きせいのことをいうと、エリコがむきになって反論はんろんした、

「規制きせい？ バカなこといわないで。」

検問所けんもんじょはかんぺきよ。

通行税つうこうぜいがとれなくなっちゃうじゃん。だいじょうぶ、検問けんもんとか、セキュリティはー、つねにカンゼンだから」

「あんた、さいきん、ちよつとズレてきてない？」

「なにが？」

難民を救済きゆうさいするには、お金がひつようなのよ？

お金がなくつちや現実的なことは、なにもできないわ。そうでしょう？

べつにもうけようとしてんじゃない、ほかに選択肢せんたくしないし、手段

よ、ひつようがあつてやってんのよ」

「そりや、そーなんだケド……」

「でしよう？」

それよりかさー、巡回じゅんかいをふやすべきなのよ。敵はさー、まっとうな道なんか走ってないわ。平原のなかよ。だから、巡回じゅんかいをふやすべきなのよ。

いいえ、理想りそうをいえば、平原すべてに、びっちり人を配備はいびして、ぜんぶの難民集団に警護けいごをつけることができれば、いちばんいいのよねー」

「できるわけないじゃん」

「わかつてるよ。」

犯人は、だいたい、決まってるんだから、そいつらを重点的に監視するのがいちばんいい方法だわ。そいつらをさがすのよ。それがベストだよ。

検問所封鎖なんて、NGよ。犯人決まってるんだからさー。

どーせ、ヴォゼヘルゴとか、レオン・ドラゴとか、……あるいは、シルヴィエが裏でうごいてるって、わかってるんだからさー」

「ともかく、いまは、最大限の措置^{そち}をとるべきじゃないの？」

「だから、だいじょうぶだよ。」

じゃ、もおー切るよ。いそがしいんだよ。じゃねー、また。

あー、なにしてるのよ、あんたたちってばっ

「どーしたの？」

「なんでもない、外国のキャラン隊の商人がとおろうとしてるのを、検問^{けんもん}のボランティアたちが止めようとしてるから。

商人^{やと}の雇った傭兵^{ようへい}たちが武器持ってるからってさあ。

いちばん大きな税収^{ぜいしゅう}の源^{みなもと}なのにねー」

「ちよつ、待って、それって、ヤバくない？」

「なにいつてんのよー、いまやIEも、ぶっそうだからね。」

お金持ちの商人が傭兵ようへいを雇やとって武装ぶそうしてても、ありふれじゃーん。
だいたいねー、いまさら、ンなコトいったって、今日だけでも、
もー、いくつもいくつも傭兵ようへいつきの大キヤラバンをとおしているよ。
ねー、ちよーいそがしいんだけど？ 切ってもいい？」

「ウソーっ！ 検問けんもん、意味ナイじゃん。

ぜったい、やばいってばっ！ いいよ、あたしが確認するから、
あんた、いま、どこ？

あ、場所、教えてってば、どこの検問けんもんよ」

って、もう切りやがった。

エリコのバカー、こういうときは人命優先じんめいゆうせんよ、たとえムダでも、
規制きせいしなくっちゃダメ。もしものがあつたらどうするのよ。

あたし、外に飛び出していた。非録斗ひろといる？ いたわ。

「麒麟きりんは、どこっ？」

「どうしたの？ そんなにあわてて。どこって、厩舎きゆうしやで休ませてい

るよ」

「出動しゅつどうよっ」

「どこへ？ どうしたんだよ。なにがあつたの？」

「走り出してから話す」

ANKAは、ジャジュと出発したあとだった。

エリコをもういちどケータイでよぶ。出ない。メールも送った。

エリコのバカ、出なさいよ。もしくは返信しろ。

「エリコのいた検問所けんもんじょにむかつて」

「でも、ユリイカ、ひろいハン・グアリスのあちこちに検問所けんもんじょがあるんだよ。1日あれば、まわれるかもしれないけど」

「ともかく、いって。じつは」

あたし、事情を説明した。

「わかったけど、検問所けんもんじょだけなら、なんとかさがせるとおもうけど、そのあとキャラバン隊を見つけるのはむずかしいよ。」

もう、検問所けんもんじょのそばにいないかもしれないし、もし、難民をねらっているやつらなら、街道にはいないかもしれないよ。だって、難民たちは平原にいるからね。

それに、商人のすがたのままでは、難民のそばによらないとおもう。

だって、大人数の商人が街道を外はずれて平原をすすんでいたら、不自然で、眼につきやすいからね。そんなことはしないとおもうよ」

「難民たちのそばにいられば、いちばんいいのよね」

「そうだね。けど、ムリだよ。」

百万人ちかい難民が平原のあちこちに、大小の集団をつくっているんだよ。

ちゃんとした難民キャンプだけでも数十か所だし、野宿のじゅくの小集団も入れたら、もうどれくらいあるかわかんない。みんなで手わけしても、足りない。

ところで、みんなに連絡はつくの？」

「わかんない。」

A N K A がやってくれてるはずなんだけど」

「そうか。むずかしいだろうな。みんな、やることが多くて飽和状^{ほうわ}態だからね」

「どうしたら、いいのよ？」

「ともかく、検問所^{けんもんじょ}へいこう。かたっぱしからね。」

そして、エリコがいた検問所^{けんもんじょ}をさがそう。

それがわかれば、その周辺の難民を見つけて、とくに警護すればいい。

そうしないと、ハン・グアリスすべての難民に、はりついていないといけないことになってしまうからね」

ケータイに着信、A N K A だった。

「エリコの居場所、けんとうもつかない。彼女、あっちこっちを移

動していたみたいだから。

やばいね。

エリコの場合が特定できないとすると、傭兵をつれたキャラバン隊を見つけるのに、平原のすべての場所をまんべんなく搜索するか、監視しなくちゃいけなくなる。

人数的にムリだわ。

ともかく、さがす場所がかさならないように、おたがい、だいたいのはんいを決めて、手わけしよう」

あたしと非録斗は、ちかい検問所から順にあたってみる。平原もさがしてみる。難民キャンプをまわる。

小さなキャンプのそばで、自動装てん連射銃をかついだタイラクに会った。彼とカブキは、シルヴィエ下級歩兵なみの装備といえるのかもしれない……

「エリコ見なかった？」

「さつき、エリコから、ケータイに連絡あったけど？　小さなキャンプがねらわれてるから重点的に見まわられて指示^{しじ}だった」

「そうとはかぎらないよー、ともかく、エリコがどこにいそうかわかる？」

「さーなー、それは……」

「どっちへいくとかいつてなかった？」

「いや」

「もういい、いこう、非録斗^{ひろと}！」

さがしまわる。見つからない。ちくしょー。ひろすぎる。たしかに、エリコのいうとおりだ！

ケータイが鳴る。ANKAからだった。

「エリコをさがすのはあきらめよう。」

ようは、難民をまもればいいのよ」

「でも、エリコのいたところに武装した人間がおったのよ。」

エリコのいた場所をさがしたほうがはいわ。だって、平原にいる難民全員を同時には見まもれないもの！

だいたい、みんなに連絡とれたの？」

「一斉送信いっせいしたメールの返信は、はんぶんくらいしか返ってこないよ」

「ぜんぜんダメじゃん！」

「そんなこといっちゃだめ。ぜったいにやりとげよう。信じて全力をつくそう。それしかない。」

人の命がかかってるんだ。できませんでしたはありえない」

「あーん、わかってるけど、現実的に、どーしたらいいのよーっ！」

ともかく連絡がついた者がキャンプをまもることにする。なにかがおこれば速攻そっこうで連絡して、そこに集合するってことにする。

「起こるとすれば……夜だよね」

非録斗ひろとがそういった。

午後の日がかたむきは始めている。ひたいに汗がにじみ、こころ
があせる。焦燥^{しょうそう}する。

暗くなつた。

あたしと非録斗^{ひろと}は、半径^{はんけい}3キロメートル以内に2つのキャンプが
ある場所をえらんで、草の原に坐り、耳をすました。

「ユリイカ、交替^{こうたい}で眠ろう。

きみがさきに寝てくれ。時間になつたら、起こすから。

そしたら、こんどは僕が眠る」

「わかった。ほんとに起こしてね、非録斗^{ひろと}。気をつかわないでね。
まち起こしてよ」

「もちろんさ」

けど、あたしが目ざめたのは払曉^{ふつぎよう}、イースからのメールの着信音
のせいだった。あーん、やつぱりー。もおー、非録斗^{ひろと}の嘘つき！ あ
たしなんかのために、じぶんを犠牲^{ぎせい}にしないでよー。

イースからのメールは、

『ぶじかな？』

じつは、気になるものを見た。すぐ着くが、はやくそつちのようすが知りたくてメールした。

ぶじかどうか、それだけでいい』

なに？

いったい、なに見たの？

状況が状況だけに気になる。

あたし、イースに返信した。

『ぶじだけど、ホントにぶじなのか、まだわかんない。

つか、なに見たか教えて！』

返信があつた。けど、ANKAからだった。ちなみに、エリコの返信はまだない。

『最悪の事態^{じたい}よ。

レイヤとオルソの2つの大キャンプが襲^{おそ}われた。20万人の難民のほとんど全員が虐殺^{ぎゃくころ}された』

21 虐戮の日

まさか、そんな。

20万人って、嘘でしょ？ 信じらんないよ。

だって、そんなことって、いくらなんでも、ひどすぎる……つか、ありえねーよっ！

メールのつづきには、さらにこう書いてあった、

『傭兵^{ようへい}が集結^{おそ}して襲った、という情報だ。

くわしいことはよくわからないけど、つかった武器の感じからいっても、外国の傭兵^{ようへい}らしいね。つまり、雇^{やと}われた兵士たちだよ』

エリコ！ てめー、サイアクだよ！

非録斗ひろとがGPSナビで場所を確認する。

「レイヤとオルソか、そんなに遠くない。ちかくもないけどね。

ここから40キロメートルくらいはなれている」

「急ごうよ、非録斗ひろと」

十数分でついた。たぶん、新幹線なみにはやかっただけど、あたしには、まどろっこしく感じられた。

信じられない光景だった。

屍しかばねが平原にひろがっている。

ちかづくと、たくさんの女性やこどもの死骸しがいもある。むごたらしく、眼をあけて、苦しみや恐怖にゆがんだまま顔……

逆光の朝日を浴び、ひざを突いて、ぼうぜんとしているうしろ姿が見えた。

エリコだ。

彼女も、あたしたちのように、知らせを受けて飛んで来たのだろ

う。そして、あまりに凄惨せいさんな光景に、ぼうぜんとしているにちがいない。じぶんのやった行為がまねいた結果に愕然がくぜんとし、自失じしつしているにちがいない。

そんなもんですむかよっ。

あたしは、怒りがこみ上げてツカツカと歩みよる。ドーせ、わたしがわるいんじゃないからねとか、いつもの生意気な口きくに決まってるんだから。この惨状さんじょう見て、なんともおもわねーのかよっ。って、あたし、かつてに激怒げきどしていた。

「エリコ、あんたっ！」

ふりむく。

あたしは、その顔を見た瞬間、心臓が止まりそうになった。エリコが……壊こわれてる。

「ユリイカっ」

涙があふれてた。顔いろは蒼あおざめ、表情がぐしゃぐしゃだった。

「エリコ」

よぶと、エリコは、はげしくあたしにしがみつく。

「ユリイカつ、わたしを殺してっ！ 殺してちようだいっ」

衝撃しょうげきだった。あのエリコがこんなことを哀願あいがんするなんて！ 必死ひっし

の形相ぎようそうで、いまにも、バラバラになりそうだった。

「わたしを殺して！

ぜんぶわたしのせいなのよっ、わたしが殺しちゃったのよっ！

ああ、お願い、わたしを殺して！ じぶんじゃ怖くて死ねないっ、

怖くて死ねないの！

お願いっ、わたしを殺してっ！ お願いよっ、ユリイカ！ 友だ

ちでしょっ！」

「エリコ……」

「みんな、死んじゃった、見て、こんなに小さい子も、お母さんも死んじゃった。わたし、この子知ってるの、昨日まで衰弱したから

だで一生懸命お母さんをたすけてたの、なのに、こんなひどい死にかたで。

この人も知ってるわ、この女の子はわたしと同じくらいの年で、ケガしてるのに、凍える手で水をとおくからはこんで、弟たちの世話をしていたのよっ。それなのに。

みんな、餓えて、みんな、寒くて凍えていた。なんの罪もないのに苦しめられて、たすけあつて生きてた。がんばって、耐えしのんでいた。かろうじて命をつないでいた。こどもや年老いた弱い人たちなのに」

「エリコ、あなたのせいじゃないわ」

あたしがそういっても、ぜんぜん、あたしの言葉なんか、彼女にはきこえていない。ただ、あたしにしがみついて、哭きさけびながらくり返すだけ、

「みんな、わたしが殺したっ、みんな、死にたくないのに、殺され

ちゃった！ わたしのせいで、ぜんぶわたしのせいなのよつ、それなのに、わたしは、怖くて、じぶんじゃ死ねない。死ぬのってこんなに怖いのに、わたし、こんなにたくさんの人を死なせてしまったのっ！」

「エリコ、しっかりして、バカなこといわないで、あんたが殺したんじゃないわ、死んじゃダメだよつ、死ぬなんていわないで、あんたが死んだら」

あたし、エリコを強く抱きしめた。懸命に、この世につなぎとめようとするように。

あたしの腕のなかではげしく慟哭するエリコ。

「……ユリイカ、ユリイカ、わたし、どうしたらいいの、わたし、わからない、わたし、なんてことを、……ごめんなさいっ」

あとは嗚咽で言葉にならなかった。2人とも、つよく抱きあうだけどうごくこともない。

しずかな足音。

だれかがちかくまで来ていた。

「ひどいな……」

なぜ、こんなにも、むごいことがゆるされるのか」

「イース！」

蒼白そうはくで怒りにたぎったイースがいた。冷厳れいげんな表情に凄まじい怒気どきを発はっしている。彼女がこんなに感情をあらわにするのをはじめて見た。

「エリコのおこないにも、まずかったところはあるが、わるいのは、この大虐殺だいきやくさつを、こんなにも惨たらしい残虐行為ざんぎやくこういをたくらみ、命じ、指揮しきし、実行したやつらだ。

かならずやこのむくいを受けさせてやる。それがなせぬならば、この身など、くだけ裂さけて、この世から消えてしまったほうがましだ」

激烈な言葉に、あたし、愕然としたが、気持ちとは同じだった。憤いきどお

り。はげしい憤いきどおりだった。

ミーシャが走りよって来る。あたしの腕のなかのエリコを奪うばうように抱だきしめて、やさしく、強くささやく、

「エリコ、あなたのせいじゃないよ」

まるで母親のようだった……すべてを受け容いれて癒いやしてくれる母親のように……

あたし、立ち上がった。

見わたすかぎり惨むごたらしい屍しかばね。

全身の血が逆流して煮にえたぎるような感情がわく。怖いものなのか、なにもない気がする。もしじぶんの家族を殺されたら、これ以上の怒りがわくかもしれない。それはたぶん身を裂くようなはげしい逆上の怒りだろう。

けど、いまのこの憤いきどおりは雲をしのぐ巨人のように大地をゆるが

す憤^{いきどお}りだ。

ANKAが来た。彼女は、すでに現場をざっと見てまわったような感じだった。

「ぜったいに、ゆるさないわ。ユリイカ、イース、ここは、ほかの者にまかせて、エリコをつれて、いったん、クラウドにもどろう。

わたしたちのクラウドへ」

あたしたちのクラウド……あたしたちの、あたしたちのための、あたしたちのクラウド……なんてうれしい言葉なの！ あたしたちの、なんか涙が出ちゃう、あたしたちの、ほんとーの居場所……もつとはやく知りたかったけど、見つけられただけでも、しあわせなのかもしれないね……

ANKAは、いい終ると、こんどは、うしろをむき、

「ユユ、ジャジュ、非録斗^{ひろと}、こっちへ来て。

おおいそ
せいでんしゃ
大急ぎで生存者を確認して。

それから、ボランティアのなかに医者がいれば、至急、ここに集めて治療にあたらせて。

ああ、それから、燃えているものを消火するよう指揮してくれ
る？

いまは人数がぜんぜん足りないけど、すべてをネット上に公表すれば、今日中にすごい人数が集まるとおもう。

いまの段階では、犯人を名ざしできないけど、見る人たちは、いままでの経緯から、わたしたちがなにもいわなくともレオン・ドラゴや、ヴォゼヘルゴや、シルヴィエを疑うでしょうね」

イスがしずかにいう、

「では、人数が集まったら、遺骸を埋葬させよう。

遺品を集めさせて可能なかぎり分類させよう。いつの日か遺族が見ることができるように」

あたしたちは、出発する。

クラウドにもどると、ANKAの部屋に、あたし、イースが入り、3人で話しあうことになった。

エリコは、薬を飲まされ、彼女の部屋で、ベッドに寝かされている。めんどろを看る役をミーシャがひき受けてくれた。

ANKAが話しはじめる、

「すべての検問所^{けんもんじょ}に確認させたんだけど、検問^{けんもん}をはじめてから、人以上の傭兵^{ようへい}をつれた外国の商人が40組も通過している。

4千人以上の傭兵^{ようへい}が来たのよ！ 考えるまでもない、これは、異常な事態^{じたい}だわ。だって、ハン・グアリスをいく大商人がこんなに多いはずがないもの。

しかも、すべてレイヤか、オルソをとおる方向にすすんでいる」「それって、もお、あきらかじゃん」

「それだけじゃないの、そのすべてのキャラバン隊がレイヤ、オルソのそばを通過したあとにとおるはずの検問所^{けんもんじょ}で確認されていない

のよ」

「ええ！」

「こたえは、はつきりしているな。」

虐殺ぎゃくころのあと、見つからないように隊を解散して、バラバラに逃走したんだ」

その光景があざやかに脳裏うに泛うかび、背なかに戦慄うが走った。あたしたちの眼のまえで、こんなに怖ろしいことが、こんなに露骨ろこつにおこなわれていたんだ……

ミーシャが入って来た。

「やつと、眠りについたわ……」

ほんと、死んじゃうかとおもった」

あたし、おもい出す、

「そーいえば、イス、あなたが気になったことって、なに？」

メールで、あたしにいったよね？」

イースの表情がきびしくなる。

「いま、ぼくも、それをいおうとおもっていたんだ。

こうなってみれば、おそろしく重大なことだ。

ぼくは、麒麟きりんに乗り、迦楼羅かるらとともに龍馬りゆうばや戦車を牽ひいて、夜を徹てつしてハイムブルグから帰るとちゆうだった。夜明けまえだ。

レオン・ドラゴの王都おうとクーガへむかつて道なき平原を騎馬きばで疾走しつそうするひとりの戦士を見た。とおくて見えにくかったが、それでも、わかった。

彼女は、血まみれだった」

「えっ、それって！」

あたし、おもわずさけんじやった。

ANKAも、うなずき、

「まちがいない。そいつは、虐殺ぎゃくころの現場から、ひきあげるところだったんだ」

イースがじつとあたしたちを見る。

「しかも、ぼくには、見おぼえのある戦士だった。兜かぶとを脱ぬいでいたからだ。

メアリーだった」

ええ！ まさかつ！ でも、やっぱり、そうなんだ。

ANKAがしずかにいう、

「ジンのなかまか。

たしか、白晳はくせきの肌に深い蒼あおの双眸そうぼう、血のいろをした唇の女だった

わね。それでつじつまがあう。

ジンたちは、レオン・ドラゴの軍人だし、シルヴィエと連絡をとっている可能性もあるし。

写メは撮とった？」

「むろんだ」

「どうするの」

あたしは、そうきいた。

A N K A がいうまえに、イースがこたえた、

「決まっている。」

ジンを問いつめ、アルハンドロ三世を問いたです」

ジン・メタルハートを問いつめる……どうてい、そんなことができるなんておもえなかった。

けど、A N K A も、イースと同じ意見だった。

「レオン・ドラゴへいって、シロクロつけなくちゃならないわね」

あたし、緊張のせいかな、くうきよめない k y な発言がでちゃう、

「できるかなー、ヤラれちゃうんじゃないん（笑）」

A N K A が、ゆるぐことなく、

「正義のためなら、恐れるものなど、なにもない」

イースが微笑し、

「むろんだ。」

生命とは、生存せいぞんのことではない。生ける屍しかばねになるくらいなら、死んだほうがましだ」

22 裁さばかれるのは、ウチらだ？

ふたたび雨。

早朝。黒い雲が空にびっしり。

あたしたちは、レオン・ドラゴへむかう。

だいぎやくさつ
大虐殺のニュースをきいて、あたしたちに協力するボランティアが千人ちかくにふえ、難民たちのことをまかせられるようになり、わたしたちは、国を留守るすにしても、だいじょうぶと判断した。

それに、シルヴィエ軍がなぞの疫病えきびょうのせいで、進軍できないでいるという情報が入っていた。ラグナレク恐るべし！

帝国の強大な力をそれでいつまでもおさえられるとはおもっていない

なかったけど、クラウドを出発することにまよいはなかった。

あたしたちは、いさどお憤りで煮えたぎっていた。

クラウドの国旗をひるがえし、せんとう先頭をいくのは、それぞれりゅうば龍馬に乗ったイースと迦楼羅、白いドラゴンのいれつ破裂だ。

そのうしろの列は、チェバロ、ボノ、リザドRZD。馬に乗っている。

つづいて、たいほう大砲つきの2輪戦車りんせんしゃを龍馬りゅうばに牽かせるカブキ、タイラク。

そのあとがジョリーで、あたし、ANKA、ひろと非録斗、ジャジュ、エ

リコ、エチカ、ミーシャ、ユユ、ユリアス、ミハイルアンジェロが乗る。

エリコは、病人どうぜんの状態だったけど、クラウドにひと独りおいでいけないので、キャビンで寝かせていた。

グロー・クロヴィスと20人のガリア・コマータがジョリーのまわりをまもる。そのうしろをソntag、カノン、バロイがりゅうば龍馬でかためる。さいこうび最後尾が龍馬りゅうばの牽く大型2輪戦車りんせんしゃのノーロイだ。

ジョリーのなかには、『k O O』をおいている。

「聖なるものは、いつだって聖戦士にまもられていなくっちゃね！

クラウドにおきっぱなしでいくわけにいかないでしょ？

いや、むしろ、ここがクラウドなのよ。移動する国家^{こっか}。

ってゆーより、わたしたちがクラウドなのよ。とうぜんよね。人がいなくて、草と石ころと土くれしかなかったら、だれも国家^{こっか}とはよばないわ」

それがA N K Aのいいぶんだった。

あたしたちは、大きな街道をすすんだ。

午前10時、いったん停^とまった。雨をよけるように、大樹^{たいじゆ}の下に集

まる。

話しあった。

鬚^{ひげ}のチェバロが獰猛^{どうもう}な獣^{けもの}のような表情になっていう、

「街道^{はす}を外れよう。どうも見はられているようだ」

ボノがこたえ、

「きみも感じていたか。俺もだ」

ユリアスがきく、

「どんなやつが見はってる？」

「なぜ、俺にきく？ 俺は、なにも感じていない」

リザド
R Z Dがそうこたえる。

グローがいう、

「黒い服にサングラスの男だ。つかまえるか」

いれっ
ズ裂がせせら笑い、

「バリユースさ。時間のムダだ。なん千人もいる」

たんぞく
イースが嘆息した。

「ぼくらは、監視委員の特権で運営サイドから居場所がとらえられなくなっただけだった。さっこん

さすがに昨今のいろいろな事件のせいで、見つかってしまったん

だな」

あたし、

「けどさー、なんで、つけまわすのかしら」

あたしを……といったかったけど、いわなかった。

ANKAがいう、

「わからないよ。」

ともかく、チェバロのいうとおり正規せいぎルートから外れてみよう」

しばらくは、ハン・グアリスの平原をわたる。

そして、いくつかの難民たちの住む仮設かせつの集合住宅しゅうごうじゅうたくを見た。

それは、検問所けんもんじょを設営せつえいしてから、わずか1日のあいだにエリコが

調達ちやうたつしたものだった。銀行から借りたお金で……。

「あたし、エリコを見なおしたよ。」

通行税つうこうぜいでかせぐ見込みがなくなっちゃ、銀行は貸してくれないから

ね。

やっぱ、お金って、現実の力として、ひつようだったんだね」

「虐殺ぎやくさつさえなければね」

ANKAが嘆息たんそくしながら、そういった。けど、イースは、きびしかった。

「虐殺ぎやくさつは予測よそくできたことだ。資金集めよりも、人の命を大切にすべきだった。現実迎合主義げんじつげいごうしゆぎは、かならずしも現実的な手段ではない。

冷たいいいかたかも知れないが、これもまた現実なんだ」

ミハイルアンジェロが感慨かんがい深げにいう、

「生きることは、つねに選択せんたくをせまる。選択せんたくをあやまれば、非情で容赦ようしやない現実が待つ。私もかつてアカデミアでそう学びました」

平原という海に、ところどころ島のように森がある。あたしたちは、森の1つに入った。正午をすぎたころだ。

冬だというのに、背の高い青草がびっしり生えている。騎乗きじようでは、すすみにくい場所だ。草をかきわけるようにいく。

1メートルさきに、なにが待っているかも、わからないような状態^{じよう}。先頭^{せんとう}をいくイースとかは、こわくないのかなー。

あたしは、ジョリーのガラス窓をカサカサとこする、ぬれた草のさきを見ながら、そうおもう。あたしは、不安だ。だって……

「周囲には、もう、バリユースのすがた、ないね」

監視ディスプレイを見ていたANKAが、

「やつら、ログからわたしたちを見つけることができなくなっているから、物理的に見えなくなれば、わたしたちの居場所^{はあく}を把握できない。そのはずよ。だから、ちかくにいなくても、ふしぎじゃない」

ふー。ちよつと安心する。

しかし、そうじゃなかった。

とつぜん、先頭^{せんとう}のほうから、草をかきわけける音、はげしく物がぶつかる音がしたかとおもうと、すさまじい獣^{けもの}のうなり声が！ 剣を

ぬく音がひびき、野獣^{やじゅう}の絶叫^{ぜつきよう}。な、なんなの？

「先頭が襲おそわれたみたい。闘せんとういははじまっているわ」

ANKAがそういった。

カサカサ、パキパキ、あっちこっちで草がこすられたり、折られたりする音がちかづきはじめる。

窓のはりついて見ると、そのバケモノのみにくく悪意あくいにゆがんだ顔が見えた。オークに似ていたけど、からだが少しオークより大きいような気がした。

「ゴブリンです」

ユリアスがそういった。

「イースたちが闘っているよ！」

そういうまもなく、あたしたちの周囲にも、つぎつぎゴブリンがあらわれる。エチカが剣を持って外に出た。

ガリア・コマータたちが剣をふりかざす。斬きる。

うしろからも、さけびがきこえはじめた。こわい！

1 匹のゴ布林がグローの傭兵たちの包囲網をくぐってジョリーに激突する。大きくゆれ、あたしは、たおれ、あたまをぶつけた。イテっー！ いたーい、チクシヨウつ。

ゴブリンの数は、あたしたちの10倍ぐらいいそうだ。手にこん棒を持ち、革鎧を着ている。鎧は革がボロボロで、たぶん、死んだ兵士とかから奪ったにちがいない、って感じた。サイズがぜんぜんあつてないし。

接近戦なので、カブキやタイラクは、得意の武器がつかえないで、逃がっている。チェバロ、ボノ、つぎつぎと斬り殺す。RZDは、あれ、ニヤニヤしながら木の上から見物。いつ登ったんだよ!?

ソntag、カノン、バロイは、かるがると2、3匹まとめて斬り、ノーロイなんか素手でちぎってなげた。たのもしいなかまたち！

そんななかでも、いれつ裂やイスの強さは飛び抜けていた。まるで重力がないかのようにあらゆる体勢から、一振りひとふりに5、6匹も斬

り裂くイース。

逆に、ほとんどからだをうごかさないまま、眼で追えない速さの剣さばきでまわりにいるゴブリンを木の葉みたいにバラバラの残骸さんがいに変えてしまうべ裂いれっ。

まるで、ゴブリンがじぶんでかってに、バラバラになっているみたいに見える。

数分後には、屍しかばねになるか、逃げるかして、生きているゴブリンは、1匹もいなくなった。ふたたび森にしずけさがもどる。

「少し休もう」

ユリアスがそういった。

あたしたちは、小休憩しょうきゅうけいをとることとなった。

さつきまでのこわいおもいどこへやら、あたし、雨にもかかわらず、興味津々きょうみしんしんで、ポンチョを着てゴブリンの死骸しがいに見に、ANK

Aとキャビンの外へ出た。

そうしているうちに、木の幹みき こけの苔こけがとてもきれいに見えたので、ぶらぶら歩きだした。冷ひやりとした、ここちよくみずみずしいさわやかな湿度しつどがあつて、あたしは、ぬれた草もいとわず、すすむ。

ふと、気がつく。草むらのむこうに、バリユースが立っていた。

「あつ」

手にリボルバーを持っている。その短銃たんじゆうをあたしにむけた。

「ムジョー」

あたしは、考えるいとまもなく、つぶやいていた。銃じゆうがたちまち錆さびた。けど、砂すなのようにくずれおちないっ!! おかしい……なんでっ? おかしいよっ!!

バリユースが嘲笑ちやうしょうを泛うかべる。そして、消えるように、去いっていった。

あたし、走はって、ジョリーに逃げもどる。つぎに会うときは、あたし、負まけてるのかもしれないよー。

「ANKA、たいへんよ、バリユースがいたわ。あたしをピストルで撃^うとうとしたの！」

ムジョーがきかなかった」

「ええ！ ムジョーが？」

「まったくきかなかったんじやないけど、なんでだろー、あー、ちよーシヨックなんだけどオ」

「体調がわるかっただけじやない？」

「そういう感じじやないよ。なんか、『ムジョー、敗^{やぶ}れたりっ！』って感じだったのー」

「ぜんぜんきかなかったんじやないんでしょう？ 考えすぎよ。気にしないほうがいいわ」

「そーかな・・・」

錆^{さび}びてこなごなになるはずなんだけど、ぜんたいが錆^{さび}びただけだったよ・・・」

「たいして変わらないじゃん」

「うーん、そーかなー。」

ねー、ANKA。もう1つ気になることがあるんだけど…

バリユースがねらっているのは、あたしなんだよ。

だって、あたしだけにつきまとつてるもん。今日もそうだったし。はつきりわかるんだよ。

でもさー、なんで、あたしなのかなー？」

ANKAは、

「そんなこと、ないとおもうけど。」

だって、理由がないわ。でも、よく考えてみるよ……」

話をきいたイースがきびしく顔をくもらせ、

「なぜ、いまでも居場所がわかるのかな。」

ぼくらのなかに、裏切り者がいる可能性を考える必要があるかもしれない」

そ、そんな！

「あやしいのは、だれかな」

ユユが考えこんでそういう。ジャジュが、

「ふつうに考えれば、R Z D^{リザド}だとおもう」

非録斗^{ひろと}は、首をよこにふる。

「ふつうすぎるね。」

むしろ、いちばん疑わしくないやつがあやしい」

あたし、なぜか笑いたくなくなった。

「じゃ、あたしね。」

いちばんの被害者で最も疑わしくないわ。でも、逆にいえば、い

ちばんバリユースと接している」

「じょうだんいうなよ。しんけんなんだぜ」

非録斗^{ひろと}が怒ってみせた。

「ごめん」

いれっ
べ裂がいう、

「さあ、いこうぜ」

ふたたび、あたしたちは、出発した。

ANKAのケータイに連絡が入る。

「ジンからだったわ。彼女に面会のアポをとっていたのよ。その返事だったわ。」

いまは、クーガには、いないそうよ。

王とともに、オルカという村のそばにいるそうよ。ネブカドネザ
やかた
ル館べつそうっていう王の別荘があつて、その周辺が王族の狩り場らしいの
やかた
よ。

猟犬りようけんの群れをつれて、キツネ狩りがをたのしんでいるらしいわ」

進路を変えた。

いまいる場所から、そんなにおいところではない。館やかたはクロウ

ヴァルト森のはじまるところにあった。

クーガのイメージとはかけ離れたバロック調の豪華な建物だ。

午後3時だった。

近衛軍の大隊が周囲を守護していたが、あたしたちは、すぐにゆるされて、壮麗なエントランスにとおされた。だれでも、いちどはクーガであたしやANKAとかを見ていたからだ。

ジンの部屋は館の右翼にあつた。

靴のドロをよくはらい、あたしたちは、家令にみちびかれて玄関から入る。

長い廊下を歩き、大きな扉の部屋のまえに立つ。ノック。

「だれだ？」

「クラウド国、青龍のユリイカとそのなかまが精鋭部隊指揮官ジン・メタルハートに面会に来た」

イスは、そう応えた。

返事はなく、ドアがひらいた。あけたのはエピタフィラだった。

「で、なんの用だ？」

A N K A がつかつかと入る。そしてイース、次にあたしも入る。

べ裂^{いれつ}、ユリアス、非録斗^{ひろと}、ジャジュ、迦楼羅^{かるら}、ユユ、ボノは、廊

下で待つことにした。

ノーロイ、カブキ、タイラクは、それぞれの戦車で待っている。

ガリア・コマータたちも騎乗^{きじよう}のまま館^{やかた}の周囲にいる。バロイ、カ

ノン、チェバロは、玄関口で待っている。

ソントグ、R Z D^{リザド}、グロー、ミハイルアンジェロは、エントラン

スで待つ。

エリコは、とうぜん、エチカといっしょにジョリーのなかだった。

部屋に入ると、アンジェラ、イヴィラがいる。メアリーもいた。

ジンをかこむよう、4人は立つ。

A N K A がつめよった。

「ジン、あなたにききたいことがあるわ」

メタルハートは、部屋の中央の椅子いすに脚あしを高く組んで坐っていた。
不敵ふてきな笑みを泛うかべて。

「どうした、ANKA？」

「この写メを見ろ」

「ふん。メアリーだ。」

「で？ これがどうかしたか」

「難民なんみんぎやくさつ虐殺のあった夜の翌日、夜あけまえだ。」

ハン・グアリスの平原でイースが撮とった」

「で？」

あたし、怖さもわすれて、ちょームカついてきた。

「ちよつと、あんたつ、とぼけんじゃねーよ、意味わかんないなん
ていわせないわよ、はつきりしてんじやん！

こいつは」

あたし、メアリーを指さした。

「少なくとも、こいつは、あの大虐殺にかかわりがあるわ。実行犯よ、ぜったい！」

ジンがあたしを睥睨する。

「青龍の位を持つ者よ、そのあまりに崇高な地位に驕って、高ぶらないほうがよい。それが人徳というものだ」

眉もうごかさない。

名指しされたメアリー本人も無表情のまま、微動だにしない。

な、なんなんだ、こいつら。

それとも、ヤバイ兆候？

でも、イスがまだ剣に手をあてていないし。

いきなり、ジンが坐ったまま剣をぬいた。メアリーの首が飛び、絨毯の上におちた。からだは立ったままだ。首のあった場所からものすごい量の血が噴き上がる。

うぎやあああああーっ、あたし、さけんじやった。心臓、ま

ちで停まりそーだった。

でも、だれもうごかない。つか、ジンと3人は、まったく表情をうごかさない。キモすぎだよ、こいつらっ、まちで！

「裏切り者は、処分した。」
しよぶん

これでモンクはないな」

さすがのANKAも顔をひきつらせる。

しかし、イースは、へいぜんとしたすずしい顔で1歩ふみ出す。

「ふ。」

証拠隠滅か。
しょうこいんめつ

血も涙もない」

：：や、やつぱ、すごい、イース、って。それにしても、なかまの惨死に、ぜんぜん、感情をうごかさない、ジンたちって……、いったい、なんなのっ？

「証拠隠滅？ なんのことだ。」
しょうこいんめつ

われらは、大義たいぎのために命をおしめぬ。裏切り者は、裁さばく。

命で償つぐなわせたただけだ。

見よ、だれ1人、動どうじていない。身命しんめいを賭かけて万ばん事じにあたっているからだ。

きさまらとは、まったくちがう」

まちかよ。たしかに、ジンのなかまは、だれも動揺どうようしない。ジンの非情ひじょうで残酷さんぎやくな行為を非難ひなんもしない。もしかしたら、いつかじぶんもそうなるんじゃないかとか、考えないの？

バケモンかよ、こいつら……

冷厳れいげんな眼ざしでジンをにらんでいたイースがふり返る。

「もういい。ムダなようだ。

さ、いこうか、ANKA、ユリイカ」

血の海になった部屋を出た。

あたし、いまさら震ふるえ出して止まらなかった。廊下で待っていた

男たちは、あたしの悲鳴にびっくりしたみたい（いれっ）裂だけは、へい
ぜんと不敵な微笑を泛うかべてたケド……で、いろいろ質問してき
たけど、あたしたち、だれもこたえない。

エントランスまで来ると、あたしもANKAもたおれるようにソ
ファに坐りこんで、吐息といきする。

イスがふだんどおりに話しはじめた。

「さて。どうする？」

法廷で争はうていうという手もある。つまり、メアリーをうつたえるとい
うことだが」

あごに手をあて、ANKAがいう、

「写メじや弱いよね。履歴ログをさらせば、あきらかな証拠しょうこになる」

「けど、ANKA、早く手をうつたほうがよいとおもうよ。

やつらだって、じつとしてはいない。ぜったいに、しかけてくる
よ。ログからさがすのって、時間がかかりすぎるんじゃないかな。

それに、さいきん、見つからなくなってるんでしょ？」

あたし、そういった。ANKAもうなずき、

「そうなのよね」

ユリアスが、

「じゃあ、つぎは、王のところへいきますか。」

この未曾有みぞうの大虐殺だいぎゃくさつに深くからんでいるんでしようから」

イスも、

「それがいい。そうしよう」

ANKAが制せいした、

「待つて。」

それなら、アポイントをとらなければ。いますぐ、このままついでに、つてわけにはいかない」

「わかっていますよ。私が交渉こうしょうして来ましょう」

ユリアスがそういった。

待つてゐるあいだ、ジョリーにいるエリコのようにすを見にいくと、頭に氷嚢ひょうのうをのせて、うなつていた。

「どうしたのよ？」

あたしよりさきに来ていたミーシャが半ベソで、

「急に熱が出ちやつたみたいでー、インフルエンザかなー」

「ユリアスをよぼうよ、彼は、なんでも知っているわ」

侍従じじゆうとの交渉こうしやうを終えたばかりなのに、すぐにあたしたちによばれたユリアス。少しかわいそー。

「うーん、インフルエンザではないですね。

熱さましならありますよ、かなりニガいけれど。もう少し恢復かいふくしたら、薬草やくそうの強壯劑きやうそうざいをあたえてください。

精神的なショックのせいでしょう。免疫力めんえきりよくがおちて、寒さにやられて、つて感じかな」

「で、ユリアス、王の側近そつきんたちは、なんていつてゐるの」

ANKAがたずねると、ユリアスが微笑^{びしょう}した。

「会うそうですよ。午後6時に、です。」

よほど、自信があるのでしょうか」

「イヴイルは、ここに来てる？」

そんなふうには、ANKAがすぐに、つぎの質問を投げる。

ユリアスは、首をよこにふった。

「いいえ」

「よかった。では、クーガにまだとどまっているのね」

「それも、いいえ、です。」

これは、王や側近^{そっきん}がいったのではないのですが……」

「なに？ もったいぶらないで」

「彼は、ユイゴード山へむかったそうです」

あたし、わかんなくて、ANKAにきいた、

「それって、どこなの？」

「なにいつてんの！ 湖上城こじょうじょうよつ、ラグナレクのとこじゃない！」

「えー……っ、なんでっ？」

イースが暗鬱あんうつな表情で、

「こたえは1つさ。交渉こうしやうだ。

伯爵ラグナレクは、いま、その力で南下中のユヴィンゴ駐在ちゆうざいシル
ヴィエ正規軍せいきぐんに疫病えきびようを蔓延まんえんさせ、その進攻しんこうを阻止そししている。

大枢機卿だいすうききやうイヴィルは、それを止めさせるために、交渉こうしやうにいったに
ちがいない」

あたし、わかんない。

「そんな交渉こうしやう、ムダじゃない。

彼が帝国ラゲに屈くつして、シルヴィエとの敵対をやめるとは、とうてい、

おもえないわ、キャラ的にねー」

イースが皮肉ひにくな微笑びしょうを泛うかべる。

「そうとはかぎらない。

ラグナレクの思考は、だれにも理解できない。彼には、すべてが意味のないことなんだ。ぼくたちが信じているものや、だいじにしているものすべてが彼にとっては笑うべきものなんだ。

ラグナレクは、雨や風のように血も涙もない。海や河のように人間には理解できない感情で、むずうさに人を殺し、生かし、幸福にし、不幸にする。運命のように、彼は、無情だ。

彼には、すべてがたわむれにすぎない」

A N K A が立ち上がった。

「ともかく、それはまだ、はっきりした情報じゃない。

真実はわからない。わたしたちには、なにもわからない。

まえをむいて、できるかぎりのことをしなくてはならない。

いまは、王のところへいこう。そして、正義とは、なんであるかを質^{ただ}そう」

狩^{しゅりよう}猟のための別荘とはいえ、贅^{ぜい}を尽くした館には、壮麗^{そうれい}な謁見^{えっけん}の

間がある。あたしたちが入ると、侍従長じじゆうちやうがそこで待てと指示しじした。すでに、たくさんの大臣だいじんや側近そつきんが玉座ぎよくざをかこんでいる。待つ。

王が来た。

玉座ぎよくざに坐る。

ユリアスがうやうやしく礼をした。

「王よ、あなたの臣しん、精鋭部隊指揮官せいゑいぶたいしきかんジン・メタルハートの配下はいかの者、メアリーが難民大虐殺なんみんだいぎやくさつに深くかわっていました。

しかるに、あの大虐殺事件だいがくさつじけんは、とうてい彼女いちこじん一個人の犯罪、彼女の
一存いちぞんではないとおもわれます。

あきらかに組織的犯罪そしきてきはんざいとおもわれるからです。規模きぼや人数や装備
から考えて、そうおもいます」

侍従長じじゆうちやうがたずねる、

「汝なんじは、われらが王になにがいたいのか」

ユリアスは、微笑し、

「この犯罪は組織的そしきてきな犯罪です。すなわち、第一の責任を王に問います」

ざわめきが起こる。王は、表情を変え、怒気どきで顔いろを喪うしなう。

侍従長じじゆうちようがなかばさげぶように、

「なんとというゆるしがたい冒流ぼうとく、信じがたい暴言ぼうげん、神をも畏れ

ぬ……」

ANKAが1歩まえに出て、

「しかし、レオン・ドラゴの兵士は、げんに民兵をよそおって、難民を虐殺ぎやくさつしようとしていた。

いや、すでに過去の虐殺ぎやくさつにもからんでいたのかもしれない。

王よ、わたしたちクラウドは、国王アルハンドロ世へいか陛下へいか下ご自身の言葉を求めます」

さらにさわぎは大きくなった。

23 聖者あらわる…

ひなんごう
非難囂々だ。

王の臣従や側近の貴族がぶちギレて、ANKAとユリアスを、あたしたちをのしっている。

手を上げ、こぶしをふってさけぶやつもいれば、剣の柄に手をかけるやつもいる。もう、剣をぬいてふりかざしてるやつもいる。顔をまっ赤にし、激怒していた。

しかし、ANKAもユリアスも、超然と立っている。

あたしも、（ちよつと怖かったけど）ハン・グアリスの憤りが強くつらぬいていて、ひるまなかった。

そのとき、とうとつに扉が音を立ててひらく。

え？

エチカだった。なんで、ここに？　つか…

腕には、エリコが抱だかれていた。

呼吸こきゅうがあさくあらく、顔が熱であからみ、まなざしはぼうつとし
ている。

「国王アルハンドロⅢ世陛下へいかっ！」

エリコが必死ひっしでさけぶ。

「陛下へいかは、それで恥はじることがないのですか。

王さま、あなたは、ごぞんじないのですか。

人の世で罪をまぬがれても、現実の罪が、事実として存在そんざいしてい
ることを」

いったん、沈黙があつたあと、ざわめきは、さらに大きくなった。

なんのこと？ エリコは、いったい、なにをいつてるの？

大臣だいじんの1人が声をはり上げ、

「無礼者ふれいものが、きさまは、偉大いだいにして聖なるわれらが国王にむかつて、
なにをいつてるのか」

エリコは、動揺どうようしない。つか、夢遊状態むゆうじょうたいのような感じだった。でもそれなのに、声は強くひびく。

「アルハンドロ王、あなたは、保身ほしんのためにシルヴィエと通じて罪もないあわれな、なんの抵抗ていこうもできない難民を虐殺ぎやくさつしました。

ただ、保身ほしんのために！ ただ、それだけのためにです。あなた個人の保身ほしんのために、あなたは、難民を虐殺したのです！

シルヴィエを怖れ、自らの王権みずかを、王家の城館おうけや貨幣じようかんをうしないたくないという、ただ、そのみにくい、低俗ていぞくな欲望のためだけに、あなたは、女や子どもや老人たちを殺戮さつりくしたのです。

そんな下劣げれつな、おろかな理由のために、20万人もの人間が人生うばを奪うばわれたのです。王よ。

あなたは、知らないのですか？

罪そんざいが存在そんざいであることを。罪は概念がいねんでも法律でも言葉でもない。現実そんざいの存在です。あなたには、すでに見えているでしょう！ あなた

の心は、すでに知っているのです！

だから、王よ、たとえ人の世で罪を逃れ^{のが}、人のつくった法の裁き^{さば}をまぬがれようと、現実存在^{げんじつそんざい}である罪からは逃れられ^{のが}ない。事実からは逃れ^{のが}られない。

事実は人間に関係なく存在^{そんざい}している。たとえ、わたしの口を封じ^{ふう}ても、事実として厳然^{げんぜん}として存在^{そんざい}し、存在^{そんざい}しつづける。

虐殺^{ぎやくさつ}をおこなったシルヴィエ商人は、王の通行許可書^{つうこうきょかしよ}を持っていた。王がジン・メタルハートを通じてシルヴィエと連絡をとっていたならつじつまがあう。

証拠^{しょうこ}はない。法廷^{ほうてい}では通用しない。

だが、そんなことは塵^{ちり}のようなことだ。

事実は存在^{そんざい}する。人がだれも知らなくとも、事実は存在^{そんざい}している。

神が知っている！ 神が見ている！

なによりも、王よ、あなた自身がそれを知っているではないか。

あなたは、罪から、ぜったいに逃れられない」

アルハンドロは、いきどおりたぎって逆上に震え、立ち上がる。

顔面は蒼白だった。王がさけぶ、

「神授の王権を侮辱する者をとらえよ、とらえて裁け、裁いてそのけがらわしき冒流の罪をつぐなわせろっ！」

エリコのへいぜんとした態度は、神々しいまでだった。

「わたしをとらえなさい。そして、殺しなさい。正義のために死ぬる者は、幸福です。」

王よ、わたしを滅ぼしても事實は滅びない。事實は、わたしに関係なく、実在する。神が知っている！

人間の世界で無実といわれ、栄光といわれようと、うちけしがたく事實は存在している。

おまえは、その罪の汚辱で、国の名誉さえもけがしたのだ！ 王の身でありながら！

恥知らず！ 売国奴！ 虐殺者！ 卑怯者！

「あつ」

あたし、そう声が出ちゃった。ありえねー。言葉だけなのに、王がよろめいて玉座の背もたれをつかんでからだをささえている。

エリコは、王を指さし、はげしく責めつづける！

「おまえは、罪のない無力な人々を殺した。おまえは、こどもを虐殺した。女を骸に変えた。あのむごたらしい光景を、むごたらしい死骸を、心におもい泛かべてみる。ぜんぶ、おまえがやったことだ。

悪魔すら驚愕するような大罪だった。おもい泛かべてみる、生きたいとおもう人たち、幸せになりたいと願う人々、夢を描いていた少年たち、困難に耐えながらも、一所懸命に生きていた少女たち、小さな幸せ、幼子の笑顔を血まみれにした、どんな贖罪があるとおもつか、法の裁きを逃れても、おまえの罪は存在する。人の裁きなど、表面的なことではない。

神が見ている！ 神が見ている！

過去に虐殺ぎゃくきつを指導した権力者と同じように、もしおまえがじぶんの正当性を主張しても、まったくムダだ、殺人の事実は消えない。

法ほうや人の裁きさばなど、神のまえでは、幻影げんえいにすぎない。事実こそが実体じったいだ。神のまえでは、人の小細工など、むなし。神に事実が見えないとおもうか。神が嘘うそや偽りいつわを見とおせないとおもうのか。神の眼を感じないか？ 気がつかないのか？

神が見ている！ 神が見ている！ 神の怒りを知れつ！ それが現実だ！ ただ、1つの現実だ！ おまえは、永遠に赦ゆるされない罪おかを犯した。

もはや救いはない。

死してのちも、永劫えいこくの罪業ざいごうに、おまえの魂は、永遠にひき裂さかれつづける！

見よ、神の鉄槌てつづいがいま下されたつ！」

まるで、落雷^{らくらい}にうたれたように、王は、くずれ、ひざを突いた。
目は見ひらかれ、唇が紫いろで痙攣^{けいれん}し、からだガクガク震^{ふる}えている。そのようすは、いま、まさに神の鉄槌^{てつち}が下されたようにしか見えなかった。

罪^{そんざい}って存在するんだ。そうとしかいいようがない。

王の臣下^{しんか}たちに、はげしい動揺^{どうよう}が走った。法廷^{ほうてい}で罪を裁^{さば}くまでもなく、判決^{はんけつ}を下されたも同然^{どうぜん}だ。だれの眼にも、あきらかだった。

あたしには、エリコが聖者に見えた！

23 ユリイカ!!

動揺^{どうよう}し、混乱^{こんらん}し、収拾^{しゅうしつ}のつかなくなっているレオン・ドラゴの重鎮^{じゅうちん}たちをおいて、あたしたちは、謁見^{えっけん}の間を出た。

エリコは、意識を失ってエチカの腕のなかでぐったりしている。

外の空気が吸いたかった。外へ出る。雨がまだ降っていた。エチカは、エリコを抱だいてジョリーにもどる。あたしたちは、エントランスにもどって、坐った。

「難民虐殺なんみんぎやくさつに関与かんよした者たちすべてに制裁せいさいをあたえたい。

レオン・ドラゴの者たちだけじゃなく、ヴォゼヘルゴのボダシエヴイにもね」

ANKAがいいきる。

べ裂いれつが雨のしずくをはらいながら入って来た。

「交渉成立こうしやうせいりつのようだ」

「え？」

「イヴィルとラグナレクさ。

シルヴィエ軍50万が再び南下をはじめた」

ANKAは、驚おどろいたふうもなく、

「予想どおりね。

ラグナレクの気持ちは悪魔のように気まぐれで、冷酷なたわむれに満ちているわ。彼にとっては、なん十万人が虐殺されようとも、なんの関心もないのよ。

あたかも洪水が家屋を呑みこみ、海が荒れて船を沈めても、河や海がなんの良心の呵責も感じないのと同じよ」

ズレは、そんなANKAの言葉には、きょうみがないように、

「どうでもいいことさ」

あたし、

「つーか、どうでもよくないよ、50万って！ そんなにたくさん、なに考えてんのよ。多すぎじゃーん」

「そうでもないさ。」

シルヴィエの人口は、おおよそ50億人。そのうち軍人は、250人に1人のわりあいだ。シルヴィエは、2千万の軍を持っている。軍人を職業とする人間だけでね。

しゅうきようこつか
宗教国家であるシルヴィエは、せいせん
聖戦に参加する義勇軍がつねに3
千万人以上いる。50万なんて、やつらには、たいした数字じゃない
のさ（笑）」

「もー、笑ってるばあいじゃないよ、べ裂！
いれっ

ANKA、いってやってよ！」

ユリアスがあごに手をあてる、

「さて、どうしたものかな？」

イスがいう、

「さいわい、レオン・ドラゴは、いま、力を喪^{うしな}ってる。そうでなければ、ぼくらは、いまごろやられてる」

「なんで？」

「シルヴィエのうごきに呼応^{こおう}するからだよ。

帝国軍が来てくれれば、シルヴィエの犬になり下がったボダシェ
ヴィやアルハンドロは、いわれるがまま、どんなむちやもするさ。

どうせ利用されてるだけで、それが終われば、じきに消されちゃうのよね。おろかだよ」

「そっかー」

A N K A が決定した、

「今日は、もう時間おそいわ。ここで1泊して早朝、クラウドと、ハン・グアリスへ帰ることにする」

けど、ユリアスが口をはさみ、

「そのまえに片づけておいたほうがよい件がある」

「なに？」

って、たずねたあたしに、ユリアスは、しばし考えてからこたえた、

「いや、やはり、いまはやめましょう。機会を見て話します」

「なんなの？ もったいぶらないでよ」

ユリアスは、肩をすくめて、あたしから離れていった。

なんなんだ？

その夜も雨はやまず、しとしと。あたしたちは、ネブカドネザル館のちかくに、大きなタープをはって野営した。

肉を炙り、野菜のスープを飲む。

交替の見はり以外は、それぞれの寝場所です。バロイたちは、まだまだ呑んでいたけど、あたしは、もう、眠くて眠くて z z z

「ユリイカ」

あたしは、眠りから覚まされた。

時計を見た。午前2時？

「どうしたの？」

あたしを起こしたのは、非録斗だった。

「ジン・メタルハートと、なかまたちが出発した。フル装備で武装していたらしい」

あたし、飛び起きた。

「ええーっ！　なんで？」

「それだけじゃないよ」

「なに？　はやくいってよ！」

「ようすをうかがっていたグローからの報告によれば、出発の少しまえに、ジンは、王の私室に入った。近衛兵^{このえへい}は、だれもいなくて、しかも」

「え？」

「悲鳴がきこえて、すぐに消えた」

「まさかつ」

「しかも、衛兵^{えいへい}も、いや、だれも駈^かけて来なかった。駈^かけつけようとするけはいさえなかったらしい。

ジンは、血まみれのすがたのまま、ゆうぜんとした態度で、ゆうゆうと部屋から出て来た……」

「！」

「そして、すでに出発の準備をととのえていた4人と合流し、出発したんだ！」

「やられた！ 急ごう」

あたし、すばやく着がえをすませた。けれど、なにかもすでにおそかったらしい。イースがキャビンにはいつて来るなり、

「アルハンドロ王は、たったいま亡くなられた。」

話はきいたかい？ メタルハートを追跡ついせきしよう」

「ANKAは、どこ？」 あたし、きいた。

「まだ館やかたのようすを見ている」

そう話しているあいだにも、ANKAがいれっ裂やユリアスやジャジユや迦楼羅かるらたちともどつて来た。

「さあ、すぐにいこう。もう、ここにも意味がない」

ケータイが鳴った。話終えると、ANKAは、さらに暗鬱あんうつな顔になっ

「わるい知らせよ。」

ボダシェヴィ大統領が暗殺あんさつされたわ。

犯人は、少数民族しょうすうみんぞくの過激派かげきはといわれているらしいけど、ほんとの

ことはわからない。

ヴォゼヘルゴは、混乱こんらんにおちいつている。

南下しているシルヴィエが介入かいにゆうしてくるのはあきらかだ。こうい

うことだったのか！

いまおもえば、難民虐殺なんみんぎやくさつは、アルハンドロやボダシェヴィが殺さ

れてもしかたない統治者とうちしやだとおもわせるための作戦だったのかもしれない

「

そんな……そんなことのために、なん十万もの人を虐殺ぎやくさつするの！

ちよー信じらんない！」

「まだつづきがある」

「これ以上、なにが？」

イスがそう問うと、ANNAは、

「大統領暗殺の犯人は、クラウドだとシルヴィエがわは公表しているらしいわ」

ひろと ちんうつ
非録斗が沈鬱な表情、

「めちやくちやだね。ほんと、ひどい。サイアクだ」

「もー、なれたよ。気にしないでいいよ。それに盗難事件のぬれぎぬのことがあるから、きつと一般の人は、またかとおもうだけだよ」

あたし、そういった。

午前3時、あたしたちは、出発した。雨が強くなった。

ANNAは、眠らずに、眉根まゆねをよせて、地図を見ていた。

エリコが起き、いっしょに地図をにらむ。まだ少し熱をおびているようだったが、眼のかがやきは強く、少し別人っぽくなっていた。

やつれているようにも見えたけど、じぶんの失敗をかみしめながらも、捨てたようなすがすがしさと、あきらめのかなしさをたた

えている。彼女がいう、

「なんととっても、相手は、50万からの軍隊。しかも、最新の高性能科学兵器のうかがくへいきをそなえている。空挺部隊くうていぶたいもあるし、戦闘機せんとうきでわたしたちを空から爆撃ばくげきすることも可能なのよ。

それに比べてこっちは、最大かき集めても、2千だわ。

たとえ、こっちが敵の100倍くらいの人数いたって勝てそうもないのに、じっさいは250分の1なのよ」

ANKAもうなずき、

「ひろいところでは、ぜったいに戦いたくないよね。

せまいところにおびきよせるか、夜襲やしゆうをかけるとか、森のなかにさそいこんでゲリラ戦に持ちこむとかしなくっちゃ。

そんなふうにくまういけば……それでもムリかな……」

ミーシャがお茶をはこんで来た。あたしは、がんばって眼をぱっちりさせようとしてたけど、気がつくとうトウト……眠気ねむけがまし

に、ちかくにあったチョコをつまんだ。

アーモンドが入ってるー、好きなやつだ。カシューナッツも好き
なんだけどな……

剣の手入れをはじめながらイスが、

「どっちみち、敵は、山岳地帯さんかくちたいのどこかを經由けいゆして来るしかないの
だから、そこでむかえ撃うちつ。そもそも、それしかない」

ANKAが、

「それは、すぐに考えたわ。すでに先遣隊せんけんたいを派遣はけんしている。

けれど、わたしたちが戦っているあいだに、クラウドが空爆くうばくされ
ることだってありうる。

山へ全員いつてしまうわけにはいかない。国の防衛ぼうえいのために、兵
をのこさなくては。少ない軍を、さらに分断ふんだんしなければならなくな
る」

エリコが地図にらみながら、すかさず、

「でも、空から来られたら、わたしたちがいたって、なにができるかな」

「だからって、全員でいくわけにもいかないでしょ？」

みんな、だまった。あたしだけが人ごとみたいに、

「ふーん」

だって、あたしは、ラグナレクが教えてくれたウィルスのいる場所がどこかを考えていたからだ。真理の中枢ちゅうすうか。哲学的な意味てつがくてきのかな。あんがい、なんのひねりもないあたりまえな場所かも。

ANKAの声がする。

「あんた、ユリイカ、なに、ぼっとしてんの？ 寝ててもいいのよ」

「え？」

「え、じゃないよ。さっきからさ」

「ごめーん、なんかさあ、ラグナレクがいったのが気になっていてさー」。

真理の中枢^{ちゅうすう}って、どこだろ、みたいな」

エリコがまたすかさずいう、地図に眼をおとしたまま、

「アカデミアだよ。ほかにないでしょ」

「え？ エリコ、あんた、わかるの？」

イスも同意し、

「いわれてみればそうだな」

ANKAも、

「わたしもそうおもう。おそらく……」

エリコが顔を上げた。

「大聖堂がいちばん疑わしいよね。まさに中枢^{ちゅうすう}の中枢^{ちゅうすう}だし」

「うそおー、信じらんねー。まちそうだとしても、なんで、ウイル

スなんか入れ^{はい}ちゃうわけ？」

って、あたし。エリコが首をひねりながら、

「ユーザーのだれかがしこんだ……しかありえないよね。あるいは

ユーザーがこのなかでつくったとか？ メールで来たとか……」

そういった。けど、あたしは、

「それって、現実世界みたい？

このなかでも同じことができるもんなの？ でも、それじゃあ、もっとウイルスだらけになっていそうなもんだけどー。

でもさー、ウイルスが侵入するのをさえぎるために、アカデミアとかに、シールド部隊ウォールとかいるわけでしょう？

バリユースたちだって、そうだよな？

彼らって、I E 全体の掃除人そうじにんでしょ？ いったい、彼らは、なに
してたわけ？」

「んー。なんでだろ」

エリコも、そういつて腕を組み、考えこむ。ANKAがさえぎる
ように、

「やりかたは、いろいろあるんだろうけど……

システムとかの話だと、わたしたちじゃ、こたえをきいてもわからないんじゃない？

侵入ルートを考えても切りがないよ。問題は“いま” “どこに”
あるかだよ」

あたし、ふっと、おもい出した。

「ねー、あのときさー、『k O O』の納め^{おさ}られてる聖櫃^{アーク}がおかしかったでしょ？」

エリコが眼を睜^{みひら}いた。

「そうだ。ユリイカ」

ミーシャが首をかしげる。

「なんかあつたあ？」

A N K Aがまなざしを深くし、

「そういえば、R Wの文字が欠けていた」

イスも、

「そう、そうだった」

あたし、じぶんで鼻がふくらむのがわかった。

「でしょー？ Wが欠けていて、まるで」

エリコがはつとし、

「そう、そうよ、まるで、Wじゃなくって、Vみたいだった」

A N K Aも気がつく、

「そうか、R Vだ」

ミーシャが、

「もおー、なんなのよー？ ちゃんと教えてえー」

イースが驚きおどろをかくしきれない表情でいった、

「Real Virus（リアル・ウイルス）だ！ そう、R Vじゃないか！

本当のウイルス！ 現実的リアルウイルスだ！

なんてことだ！ ぼくたちは、さいしょっから眼のまえで見えてい

たんだ！」

Eureka, 青龍 έκστασις; 5

Act 5.
Last Stand

Act 5. **Last Stand**

24 **WAR**

サンクチュアリ フリダヤ
聖域の心臓部に Real Virus.

Real World のなかでも、最も美しく、気高く、きよらかで、精神的な理想のワールド、物質主義的じゃない、Ideal Earth. その真髄しんずいがウイルスに……！

RWが **RV**！

だじゃれかよ！

あたし、まちシヨックだった。かるくめまい。

「あー、そんな……ありえねーよ……」

ウイルスが……よりによって、アカデミアに……

それも、ウパニシャッド大聖堂の中枢に！

アーク^{アーク}に、アークの上にあるなんて！」

あたしにとっては、真の叡智^{えいち}の中枢、つか、じぶんの真の奥の真がけがされたような、いままで考えたこともないショック、てゆうか、奥底がゆらぐ不安だった。

雨がジョリーの屋根をばげしくたたく。

もしかしたら、大聖堂の『k O O』が盗まれないのって、そのせいかしら？ ……でも、だれがアカデミアの中枢にウイルスをしかけられるの？ いや、データをいじれるようなやつなら、できるにちがいない。

やはり、ウイルスをしかけたやつと盗難のためにデータをいじつたやつは、同じなんだ。そんなユーザー、たぶん、かぎられてる……その日、あたし、おもいにとらわれ、ずうつと独りぼっち、ぼん

やりしていた。みんながせわしくひそやかにうごいていることにま
ったく気がつかなかった。

午後のお茶も無意識で飲んでいたし。

けど、ミントティーだったこととか、ちゃんとおぼえてる（笑）。

クッキーをかじりながら、考えこんでいた、とか……

最も神聖な場所にウイルスが入っている……。そうとわかれば、
I Eの基本コンセプトが大きく変わってしまったのも、ふしぎじゃ
ない。

考えてみれば、はじめからわかり切ったことだ。じゃなくちや、
こんなにも、I Eが変わるはずがなかったのよ。

でも……。でも、なんで。そんなことができたんだろう。

セキュリティって、いったい、どうなつたのよ。それとも、I

Eって、じつは、ラグナレクのように、人知のおよばない風や海や

雲や火山の噴火のようなものだったりして……。あはは、人間^{キャラ}じゃあ

るまいし、そんなバカな。

そのとき、扉がひらいた。あたし、はっ、じぶんに返る。いま、なにを考えていたのか、一瞬わからなくなった。雨にぬれたユリアスがキャビンに入って来て坐る。

表情がきびしい。いつものひょうひょうとしたふんいきはない。なぜだろう。

「そろそろ、ハン・グアリスに入ります」

「わかった」

ANKAも口をかたくむすんでうなずく。

え？　いったい、なにが起こるの？

イスがしずかに剣の柄をにぎった。

「すでに周囲に集まっています」

ユリアスが不敵な笑いを泛かべながら、たのしそうにそういった。とつぜん、外があかるくなり、爆裂音がなん発もとどろく。もの

すごいさわぎが起こる。

夜襲？ 奇襲攻撃？ ジョリーが止まる！

「さあ、ユリイカ、きみも外に出て」

イースにうながされる。

「え？」

こんなことはめずらしい。

あたしやエリコやミーシャは、安全のために留守番になることが多いからだ。

それに、ジョリーのなかには、『k O O』がしまっている。だれもいなくなるなんて、いままでなかった。

どういうこと？

「みんな、あわてて飛び出し、聖典のことなんかわすれちゃっている、って設定なのよ」

A N K A が微笑して、そういった。なに??

外に出ると、雨の音が耳を占領する。夜の闇に顔をたたく雨。風も強い。

「旗は降ろしたよ」

声でジャジュだとわかる。

あつというまに、びしょびしょ。それでも、あつちこつちで火が燃えている。

「うわぁ！」

炎に照らされた黒い装甲騎兵のすがたがたくさん見える。

「さあ、降りるのよ、ユリイカ」

え、なんで、なんで？

しかし、ぬかるんだ地面に降りたのは、ほんの一瞬だけ。ANK

Aは、あたしに大きな黒い布をかぶせ、彼女も入ると、すぐに身をひるがえし、ひらりとすばやくデッキの上にもどる。な、なんなんだ？

驚いたことに、エリコ、イース、ミーシャ、ほかのみんなも同じうごきをしたみたいだ。音とうごきの感じでわかる。なんで？

デッキの片すみにかくれるように、小さくかたまった。

周囲では、激烈な闘い。鉄と鉄がはげしくぶつかる音。

あたしがたずねようとすると、ANKAが指を唇にあてる。「しーっ」

そのときだ。だれかがデッキに上がって来た。あたし、布を少しめくつてのぞく。暗くて、だれだかわからない。その人は、炎の光をさけて、影になる場所をえらんでうごいていた。キャビンのドアをあけ、なかに入る。

「ANKA、たいへん、入っちゃったよ」

「わかってる。だまって！」

侵入者は、すぐに出て来た。腕に箱をかかえている。

『kOO』の入った箱だ！

あたしがさけびそうになるのをANKAが手でおさえる。

イスが黒布から出て声高にさけぶ、

「待てっ！」

男は、止まった。その瞬間、ちかくで火柱が上がって、男の顔を照らし出す。邪悪な眼つきで、顔がひきつり、別人のようだったけど、見まちがうはずもない。

グローだった。グロー・クロヴィス！ 傭兵隊ガリア・コマータの隊長！

まさか、彼が裏切り者だったなんて！

乱闘のさなかにもかかわらず、黒い装甲兵たちには、こっちのようすがわかったらしい。騒乱そうらんに乗じて聖典を略奪りやくだつする作戦の失敗がわかり、1人、2人と逃げはじめた。

「深追ふかおいするな」

イスが大声でそういった。いわれるまでもなく、バロイ、ソン

タグ、カノン、ボノ、チェバロたちは、追うつもりなどなかったようだ。敵が逃げはじめると、さっさと剣を鞘におさめて、さあ、飯でも食おうかって感じの顔になった。

さいしょから筋書きができていて、寸劇のようだ。

黒装甲兵を追い駆けたガリア・コマータも、すぐにもどつて来た。

わずかにのこった炎が照らすクラウドの戦士たちすがたは、みんなぐしょぐしょだった。

ANKAが、

「副隊長のストランド。おまえが今日からガリア・コマータの隊長だ」

ストランドとよばれた若者は、あぜんとした顔をした。ぬれた髪がひたいにはりついている。事態を理解できていない。

「しかし、ANKAどの……」

けど、グローの表情はもつと深刻で、ドストエフスキーしんこくの小説の

人物みたい（笑）に蒼白で、わなわなしていた。

傭兵隊長は、いきなりデッキから飛び降り、馬に乗って馬首をひるがえす。いまさら逃げる気？　しかし、イースが馬の尻に飛び乗り、グローの首をしめ上げた。

「ええい、ちくしょう、はなせ、はなしてくれ、……うぎゃーっ！」
ひきずり降ろされる。

ユリアスが大きな声で告げた、

「ここに、グローを処刑する。」

いま、しよくんが見てのとおり、彼は、『k O O』を盗んだ。

だが、それだけではない。

グローは、われわれの位置情報をシルヴィエに流した。密告者だ。裏切り者だ。

さらに、しよくん、難民虐殺に傭兵がつかわれたことをおもい出せ。

彼は、虐殺のために、各地の傭兵たちに連絡をとって、シルヴェエのために便宜べんぎをはかったのだ」

ストランドは、なっとくできない表情だ。

「しかし、そんなふうには見えなかった。

なるほど、聖典を盗むという大罪をおかしたのは、いま、この眼で見ましたが。

シルヴェエがわについたとは。どんな証拠があつて、そのようにいわれるのか」

ベ裂がそれにこたえ、

「へい、へいつ、証拠はあるさ。

まずは、グローの剣だ。

Nabu Kudurri Usur（ナブー・クドウリ・ウツル）という銘めいがぎざまれているだろ。バビロニア語だ。これをヘブライ語で、なんというかわかるか？」

ユリアスがゆっくり微笑し、こたえた、

「ネブカドネザル、だ」

おお、という声上がる。ズレがふたたびいう、

「しかし、とうぜんのこと、それだけでは、じゅうぶんではない、証拠としては。」

さあ、グロー、おまえがいつも腰につけている革の袋をあける。そして、そのなかを見せろ」

なかから、金貨がなん十枚も出てきて、こぼれおちる。ユリアスが1枚をひろい、指でつまんでみんなに見せる。

「シルヴィエ金貨だ。」

おもての面に浮彫レリーフになっている肖像は神聖皇帝のよこ顔だ。神聖文字で『聖神のごとく永遠の真実である神聖皇帝』としるされている」

そうだったんだ……あたし、ショックだった。

ズ裂がさらに1歩まえに出て、

「これ以上、いうひつようはあるまい。罪は確定した。

さあ、グロー、最後に自らの罪を悔い、難民たちに謝罪しろ。

せめて人として死ね。それがおまえにとって最善であり、俺たちにできる最大の慈悲だ」

グローは、うなだれてひざをつき、頭をたれた。すすり泣きふるえながら、神にじぶんの罪を告げて謝罪し、難民たちの魂へゆるしをこい、最後にいった、

「俺も武士もののふ。せめて、名誉のために……自ら命を絶たせてください」

イースは、非情の声音こわねで告げる、

「だめだ！ おまえは、斬首ざんしゅだ」

グローの口から悲痛な、なんともいえない苦しげなうめきがもれた。イースは、鞆たよからぬく。

「逝ゆけ！」

剣がふり下ろされ、首は地におち、亡骸が埋められた。

なきがら

クラウドの旗はふたたびかかげられる。

ANKAがみんなをうながした、

「さあ、出発しよう」

キャビンに、あたし、ANKA、イス、エリコ、ミーシャ、非録斗、エチカ、ユユ、ベ裂、ユリアス、チェバロ、ボノ、ミハイル、アンジェロが集まる。

ジャジュ、迦楼羅は、バルコニー（馭者席）にいた。雷鳴の轟音が地をゆるがす。

ANKAが説明をはじめた、

「内部告発サイトとか、マイクログログなんか見ていると、シルヴィエ軍はレオン・ドラゴとヴオゼヘルゴの国境にあるシビイレ山脈のどこかを越えてやって来るようね。」

ただし、帝国のタンク（じそうしきそうこうせんとうそうきしやりよう自走式装甲戦闘装軌車輛）隊や自走式連

射ミサイル砲や装甲火砲隊や重装甲自動連射機関銃隊なんかの重機
装甲部隊はおまわりしてくるらしい。

険路や狭隘路はおれないから、傾斜がゆるくて路のひろい迂廻
路をつかうってことみたいね。

ゴルガストもシビイレ山脈の末端だし、そばに大きな街道がある
から、ルートになる可能性はある。

あとでログを確認してみるよ。さいきん、シルヴィエ系のデータ
は見えにくくなっているんだけどね」

「やっぱ、シルヴィエはデータに干渉できるんだー」

あたしがそういうと、イースが、

「だとすれば、おそらくハッキングだろうね。技術があれば、だれ
でもできることだからね。」

さあ、それはともかく、どの迂回路から来るにしろ、山脈のどこ
かをぬけるルートでしかないから、ひろいといったって、そんなに

ひろくて傾斜がゆるいわけではない。

重機装甲部隊はうごきにくいはずだ。攻撃するには、ちょうどいい」

エチカがあごをさすりながら、

「食糧や物資を大量にはこぶ輜重隊しちようたいも、けわしい山岳路を越えられまい。同じように迂回路うかいろで来るだろう」

「なるほど。ともかく、イスのいうとおりですね。平原まで来させてはまずい。ひろい場所では、重兵器がつかえてしまいますから。

敵軍が着くまえに闘うべきです」

ユリアスがそういった。

ANKAもうなずき、

「わかってるわ。重機装甲部隊とともにやりあうつもりもないし。

わたしたちが正面から戦えるのは、せいぜい歩兵部隊よ。重機装

甲部隊に平原まで来られちゃ、ひとたまりもないわ。

ちなみに、歩兵部隊は山間の嶮路けんろをつかつて、さきに来るらしい」

チェバロが虎のように喉のどを鳴らし、

「なるほど。歩兵部隊がはやく到着するんだな。」

さいしよのうちは、シルヴィエ帝国軍といったって、軽装備の歩兵しかないってことか」

「そういうこと。むろん、軽装っていつても、帝国軍にしては、つてことだけだね。わたしたちと比較したら、じゅうぶん重装備よ」

ボノが髪をなでながら、

「その差は正義の勇気で越えられる。それはともかく、イースのいうとおり、山岳地帯で攻めよう。無為に友を喪いたくない」

ユユがきく、

「戦闘機は？」

A N K A の表情がくもり、

「ユヴィンゴ王国の滑走路から、ここまで飛んで来るらしい。これ

には抵抗のしようがないわ。

もしかしたら、ヴォゼヘルゴにも、秘密の滑走路があるかもしれない。

ユヴィンゴにしろ、ヴォゼヘルゴにしろ、もともと飛行機のない国だから、まっとうな空港なんてないはずだけど、シルヴィエがかったんな発着スペースをつくっていないとはいいい切れないわ。

超大国だからね」

「どうするの？」

あたし、きいた。

A N K Aは、

「これからは、箱モノ^{ハコモノ}に定住するのをやめよう。ねらわれやすいだけではない」

ズ裂も賛成し、

「いいねえ。クラウドは人だ。土地や建物じゃない。」

ヴオゼヘルゴの滑走路のことも、調査しておいたほうがいいな。

手があったらね」

A N K A がうなずく、

「そうね。それから、もう1つ。

帝国軍はユーコニー川に舟艇せんてい数百隻せきを航行させるらしい。おもに物資の補給をするためにね。ユーコニーはエンジンパール川やローマン川ラ・マル・メディテラーみたいに裂大陸間海洋にながれているから、つまり、彼らは、南から溯上してくることになる。ものすごくとおまわりよね。

そのせいで、重機装甲系の隊はついていけないらしい。ここも、たたきましよう。エリコ、あなたにお願いするわ。

物資輸送にくわしいあなたは、補給路を完膚かんぷなきまでに破壊できるでしょう」

イスがいった、

「では、迂回うかいしてやって来る重機装甲部隊を山間の狹隘地で奇襲す

るのは、ぼくがやろう」

「いいえ、あなたは、ダメ。へ裂にやってもらうわ」

「ねー、ANKA、あたしは？」

「あんたは、非録斗といっしょにいて。主力部隊で、イースを手つだつて。さあ、敵がどのルートで来るか調査しようよ。ユリイカ、ケータイ貸して」

ログを閲覧できるあたしたちは、情報の入手にかんしては、いまだに有利だ。もちろん、小さなうごきをキャッチするのは時間がかるし（つていうか、場所とか、相手とかがあるていどわかっていないと、まず不可能）、たとえ大きなうごきであっても、ジンとか、シルヴィエとかのうごきをつかむことはむずかしくなってきた。けれど、さすがに数万人以上のうごきはかくしきれないものらしい。しばらくしてから、情報がつかめた。ANKAが強くなるはず。

作戦の基本ができた。どこで（場所・空間）、なん時ごろ（時刻・

時間）から、どんな行動するか、だ。それによって、隊の編成が決まった！ 戦争だあWAR！！

☆

本部（ハン・グアリス平原 ジョリーのキャビン内）

全軍を指揮する

ANKA、ユリアス、ほか20名

☆

第1部隊（シビイレ山脈キャバリノ溪谷）

帝国軍歩兵部隊を谷の上から攻撃する

イス、迦楼羅、ユリイカ、非録斗、ミーシャ、ユユ、バロイ、
ソインタグ、カノン、チェバロ、ボノ、RZD、ストランド&ガ
リア・コマータ、ほか1,200名

☆

第2部隊（ドルイド北壁附近）

帝国軍重機装甲部隊を北壁の上から攻撃する

×裂、ジャジュ、タイラク、ノーロイ、ほか 580 名

☆

第3部隊（ユーコニー川附近）

帝国軍物資輸送船を攻撃する。

エリコ、エチカ、カブキ、ミハイルアンジェロ、ほか 200 名

☆

朝になった。雨はおとろえない。うす暗かった。

雨雲を凌^{しの}ぐシビイレ山脈の偉容が見えはじめる。

山頂は雲の上にあって、見えない。

クラウドの紋章をつけた剣と楯とを持つ兵士たちは、馬を急がせ、

たてがみをなびかせて怒^ど涛^{とう}のよう、蹄^{ひづめ}をひびかせ、すすむ。

正午になった。

ユーコニー川から 10 キロメートルの地点、ゴルガストの丘がお

く、雨にかすんで見えるあたりで手綱^{たづな}をひく。

そこはパライソレイユという、きよらかな泉のわく森で、あたしたちが集合地としていた場所だ。屯^{たじろ}する。タープをはって、水を汲^くみ、火を熾^{おこ}して昼食をつくり、仮眠をとった。しだいになかまが集まって来る。

夕刻、人数が集まると、それぞれ隊にわかれてミーティングをはじめた。それが終わると、肉を炙^{あぶ}って食べる。したくをして就寝した。

午後7時、あたし、ANKAといっしょにテントによこたわったけど、眠れなかった。明日は戦争なんだ……

「ANKA、寝てる？」

「ううん？」

「寝てたよ。どうした、眠れないの？」

「そうでもないけど……」

緊張がほぐれないのは、とうぜんだった。ネブカドネザル館を出発してから、すでにあたしたちのまわりで、帝国軍のスパイが7人もつかまっていた。あたしたちのうごきは、すでに読まれている可能性が高い。

まだまだ、うようよいるよ。メ裂は、つかまえるたびに、そういつて笑った。

笑いごとじゃないよー。

雨の音がざーざー。テントの屋根をダダダダーツ。連打している。眠れねーよ。

でも、明日は4時起き。はやく寝なくっちゃつ。

まあ、あたしなんか、まだいいほうだ。

ドルイド北壁へむかう第2部隊は深夜0時出発の予定だった。かなりとおいからだ。彼らは、48時間かけて北壁にむかう。帝国の重機装甲部隊が北壁に来るのは、その24時間後、って話だった。よう

するに、3日後だ。

外では、いつでもだれかがうごいている。バタバタ。ドタドタ。ガサガサ。ドスンドスン。

あたし、寝返りをうつ。

エリコにメールでもしようかな。どーせ、あいつの第3部隊は昼ごろ出発だし。

なんて考えているあいだに、眠ってしまった………

4時、非録斗に起こされたときは、眠くて眠くて、眠れなかったのがウソみたいだ。

ふぁーあ。眠いよ。戦争なんかだるい。

まだ暗いが、外に出ると、もう集まっている。あわただしい、活気あふれた独特のふんいき。雨は弱く、霧のようになっていた。義勇の兵士の息がまっ白だ。

あたしは、熱いスープを飲む。

だれかがあたしの肩をたたいた。

ふりむく。

エリコだった。

「死ぬなよ、ユリイカ」

「あたりまえじゃん」

あたしは、すぐにスーブに顔をもどした。

「ふふ」

笑いながら、それ以上なにもいわず、エリコ、去る。

「出発——！」

イースのかけ声で軍がうごき出す。

シビイレ山脈の入り口、ゴルガストのような低い丘が少しつづいたあと、いきなり絶壁がはじまり、いつきに高くなる。シイバの神の住まう、シビイレの山々がその峰を天空につらねる場所。

その絶壁を切りこむように、せまくするどく深い、V字型の裂け

めが山脈の奥へ奥へとつづいている。裂けめは奥で枝わかれし、いくつもの谷になっている。その1つがキャバリノだ。

あたしと非録斗とミーシャとユウの4人は、1頭の麒麟に乗って、宙を駆けるように、けわしい道をはるがるとすすむ。イースと迦楼羅の麒麟があたしたちのさきにいる。

ほかの人たちの乗る龍馬もなかば飛ぶように駆ける。龍馬がない人たちは、徒歩だ。

キャバリノに着くと、峡谷の上のほう、高い場所に、小隊ごとにちらばった。

夜になる。小さなテントで仮眠をとった。風がはげしくて、テントが飛ばされそう。山頂にちかいからしかたない。

刃やいばのように凍った冷たい風。雨や雪すらもない。

朝になったが、風はあいかわらずきびしい。火なんか熾おこせない。

冷たい干し肉を食べる。

待った。

あたしは、いらだって歩きまわる。R Z D がしゃがんで革巻きのスキッドボトルをくわえ、バーボンを飲んでいた。

「あんた、きらくね。

いつものことだけど、ほんと、部外者みたい」

表情のない、暗鬱な、魂のぬけたような、それでいて滾りたぎのある瞳を、R Z D は、あたしにむけた。

「だれでも部外者さ。リアルなんてありえない」

「べつにいいけど、なんでクラウドに参加したの？」

「それを受け容れるのが、クラウドだろ」

「でも、あんたにとって、なにがたのしいの？ クラウドに来てさ」

「俺は、永遠の敗北だ。

サンチャゴの帆みたいなものさ。殻粉の袋でつぎはぎをした帆だ」

「なにいつてんの？

あんだ、ラテン系のともだちがいるの？」

「サンチャゴのことか？」

ヘミングウェイの小説に出てくる人物だ」

「あれ、ヘミングウェイって、マーロウに出てくるはずかしいオジサンじゃなかったけ？」

「もしかしてレイモンド・チャンドラー (*Raymond Chandler*) の

『長いお別れ (*The Long Goodbye*)』のことをいつてるのか？」

「そうだったとおもう。」

なんかおかしいの？」

「おかしいところしかない。」

フィリップ・マーロウは、チャンドラーの小説の主人公のなまえだ。アーネスト・ヘミングウェイ (*Ernest Hemingway*) は、関係ない、実在していた作家だ。

物語のなかで、マーロウがある警官をジョークでヘミングウェイ

ってよんでいただけだ」

「でさー、あんた、なんで参加したのよ」

「理由などない。永遠の敗北、勝利など儚い夢にすぎない。なにものねらっていない。理由などあるわけがない。

IEにいる理由すらないのに、どうしてクラウドにいる理由があるものか」

「でもここに来たんだから、動機はあったんでしょー？」

「そうだな。あったぜ。

俺が反シルヴィエだからだ。

そして、おまえたちがぜったいに帝国に勝てないからだ。

敗北するために来たのさ」

「縁起わるいやつだなー。あんたがいると、勝つ闘いでも負けそーだわ。疫病神かよ！」

「青龍の言葉とはおもえない。青龍の位を持つ叡智の匠。マスター

執著を捨て切ったやつが聖の聖なる叡智きよしちうの巨匠だとおもっていたぜ。ふふ」

「あたしは、なんにも知らないよ。でも、青龍なんだよ。つか、だから、青龍なのかもしれない」

「そうか、そうだな。つまり、敗北だ」

「たぶん、ちがうよ。」

敗北だったら、あたし、少なくとも、なんのコトかわかるもん」

RZDがはじめて眼を睜みひらいた。そして、「へっ」とへんな笑いかたで笑って、去った。

な、ナンなんだおー??

あたし、非録斗のところにもどった。麒麟のそばにいつて、荷物に入った革囊かわぶくろからエリコのタブレット型PCを借りて検索した。

たしかにチャンドラーの書いたハードボイルドに、主人公の探偵マーロウから「ヘミングウェイ」ってよばれる警官が出てくるけど、

それって『長いお別れ (The Long Goodbye)』じゃなくて、『ち
らば愛しき女よ (Farewell, my lovely)』だった。あのなー!!

そして、ふたたび待つ。来ない。むなしく夜になった。

イースがいう、

「情報が入った。

山脈のむこうがわは大吹雪だったらしい。シルヴィエ歩兵部隊は
進軍がおくれている。とおまわりしている重機装甲部隊のほうがぼ
くらの予測よりも、はやく進軍しているらしい。

歩兵部隊がこつちに着くのは、明日の昼ちかくか、午後のようなだ。

その数、およそ 22 万」

わかってはいたけど、具体的に数字をきくと、からだに緊張が走
る。無意識に非録斗の腕をつかんでいた。あたしの手の上に、彼の
手がそつとかさなる。

「だいじょうぶだよ、ユリイカ。しんぱいしない」

うーっ、う、うれしー。非録斗、最高！ さ、がんばろー。

あたしたちは、身をふせ、風に吹かれて待った。

午後2時ちかく、歩兵隊の先遣隊が峡谷のとおくに見えはじめた。
いよいよだ。

じわじわとちかづく。

帝国軍はあたしたちが待ちぶせしている場所から100メートルくらい下の隘路あいろを通過するはずだ。それを上から、弓矢で攻撃する作戦だった。

蒼穹そうきゆうに風の音がすごい。けど、それが逆に、ぶきみなしずけさを醸かもし出していた。しずけさのせいで山の偉容がせまるみたいだ……

いやな予感がした。

となりで身をふせている非録斗の顔を見る。

彼もなにかを感じていたらしい。あたしたちの眼があった。

こんどは、イースのほうを見る。彼女は、あたしたちのうしろを

見ていた。あたしもふり返る。

1人の女が立っていた。あたしたちより高い位置だ。逆光でシルエットになっている。それでも、だれだかわかった。

ジン・メタルハート。

そのすがたを見ると、眼を燃^{まなこ}やし、イースが剣をぬく。断崖をものともせず、飛ぶように駆け上がる！ ジンもその巨大な刃をぬいた。

ジンのうしろには、いまや3人となってしまった女戦士たちと、その配下の巨躯の戦士（いつのまにか復活して、10人にもどつていた！）。そして、レオン・ドラゴの精鋭部隊があらわれた。

まち!? ANKAがログから確認してくれたはずだけど？ やっぱ少人数はとらえきれないんだー。

黒い蟲^{むし}のようにつぎつぎとわいてくるその数、およそ300。

これって、はさみ撃ちじゃん！ やばいよ。上にジン、下にシル

ヴィエ帝国軍。あたしたちの作戦は読まれていたの？

だけど、イースは、なにも意に介さない。彼女は、いつもふっ切ひたすらつていて、なにも惜しまない。怖れも、まよいもなく、きよく只管に、まっしぐらに、ジンにむかつて突っこんでいく！

「ふっ。上等だ！」

メタルハートは、唇をゆがめて笑いながら、眸ひとみで怒りをあらわし、
まなこ　みひら
眼を睜く。

うるし
漆塗りのように黒光りする刃。こまかい魔法文字が彫られ、それが黄金の炎みたいにかがやく。刀身がクリムゾンレッドに燃えている。3人の女戦士たちと10人の男たちがむらがるようにイースにむかう。

ひきようせんばん
「卑怯千万！」

は
そうさけんで馳せ参じ、立ちふさがったのは、灰色の鬚のソング。三叉戟さんさげきを持つ。ゆく手をさえぎるレオン・ドラゴの兵士たちを

なぎたおし、ジンの配下の^{どうもう}獰猛な男闘士たち^{たいじ}に対峙する。

「おお、ソントグ、^{すけだち}助太刀するぞ」

バロイ、カノンも登り上がって、つぎつぎと敵^{ほふ}を屠る。巨漢の彼らがいくと、なみの敵兵士は、こどもみたいに見える。

さらにチェバロ、ボノ、迦楼羅、非録斗が3人のアマゾネスと剣をまじえる。

イースとジンの対決となった。

「おのれーっ」

怒り狂おしく^{たぎ}滾るジンの剣がどす黒い炎に変わる。イースの剣がうす^{あお}碧い光をはなつ。刃と刃とがぶつかる。すさまじい音、音というよりは空気の激震だ。火花がちる。飛びちった火花は岩石の上におちても、青や赤や黒や黄金に燃えつづけた。

ジンの剣の軌跡は漆黒で、イースの軌跡はレインボーのようにかがやく。

クラウドの義勇の戦士たちが降りて来たレオン・ドラゴの兵と闘う。こっちは数で勝るけど、ジンの鍛えた精鋭部隊をかんたんにたおすことはできなかった。あたし、ムジョーをとえようとして、こころを集中する……

バリユースがいきなりあたしのまえにあらわれた。黒いコート、黒い革靴、サングラス。場にあわない、いつものかっこうで風に吹かれて立っていた……こいつら、ほんとになんでもありだ。

リボルバーをあたしにむける。

「ムジョー」

やっぱり。

こんどは、ぜんぜんきかない。

うす笑いを浮かべている。その笑みが消えた。

「ユリイカ！ あぶない」

ユユがバリユースの背なかを斬ったのだ。

「うをつ」

うめきながらも、ひき鉄^{がね}をひく。

「あひつ！」

弾があたしのそばをかすめる。ユユがさらにバリユースに斬りかかる。

「ユリイカ、はやく逃げて！」

あたし、その場を離れた。非録斗が来てくれる。

「ごめん、きみのそばを離れてしまった」

「いいのよ、イースがあぶなかったんだもん。

それより見て！

下のシルヴィエ軍がいつのまにか来ていて、こっちに上がって来るわ」

「ほんとだ！ やばいよ。ちくしょう、どうしよー」

10人の男の戦士をたおしたソング、カノン、バロイがこっちへ

来て崖の下をのぞき、いう、

「おお、来たな。」

まるでアリのむれのようなだわ！

かたっぱしから屠^{ほふ}ってやるさ！」

ミーシャがさけぶ、

「のんきなこといつてるばあいじゃないよ、たいへんだよー」

バロイが革袋の葡萄酒を陶器のジョッキにそそいで、ぐいつとあおりながら笑う、

「小さなことを気にするな。俺たちにまかせておけい。ウワハハハハハッ！」

「ちつちやくナイおー」

口には出さないものの、義勇兵たちも、ぜんたい的に動揺している。レオン・ドラゴの兵たちがいきおいづく。「うらああああつ、うちたおせーっ」

少ないはずの彼らが鋼鉄製の怒濤どとうに見える。

あたし、いった、

「おちついて。」

このままじゃ、負ける。あたしにまかせて」

バリユースには通じなかったけど、ほかのものには通じるはずだ。

「ムジョー……」

神聖帝国の兵士たちがよじ登って来る崖の岩がみるみるうちに風化する。つかめばもろくくずれ、砂に変わる。

「さあ、これで彼らは、登っては来られないわ。」

形勢逆転よ！」

あれ？ チェバロや迦楼羅やソングやバロイやカノンも、みんなちかくの岩にしがみついている。

「おいおい、こっちの岩はだいじょうぶなんだろーな？」

「なにいつてんのよ、だいじょーぶよー、ばかにしないでくれる？」

それより攻撃よ」

登って来た数千のシルヴィエ兵士が落下、兵士たちの上につきつぎとおちて、隘路あいろでは大混乱。

ストランドがイヴィラ・ヴィシャスの首をとった。

「やったぞーっ。これでわれらガリア・コマータの汚名は晴らされた！」

カノンが大笑する。

「だれもおまえらを責めてなどおらんかった。しかし、気にしていたんだな。みごと清廉せいれんの武士もののふだ」

しかし、ボノがエピタフィラの剣に腕を斬られ、たおれる。ユユがたすけに入るが、たちまち脚に刀傷を負う。ガリア・コマータらは、レオン・ドラゴの兵士らをかたつぱしから屠ほふっていたが、4分の1の兵力なのに、レオン・ドラゴの精鋭部隊は手ごわい。

ソントグが三叉戟さんさげきをふるい、ボノとユユのたすけに入る。

チエバロと迦楼羅は、褐色黒髪で剛力のアンジェラに押されていた。

しかも、イースもまたジンの剛腕から、いくどもふり下ろされる重く巨大な剣を受けるだけで、せいっぱいだ。

ああ。

そのあいだに、登攀とうはんをあきらめたシルヴィエ帝国軍があたしたちの下をどんどん通過して平原へむかつていく。

やばイ。

作戦はかんぜんに失敗。敵は、このままハン・グアリスになだれこんでしまう。

平原に出られてしまえば、あたしたちに勝ちめはない。

やばすぎるよ！

あ！ イースがたおされた。あ、あぶない。カノン、バロイがたすけに入る。ジンに対峙し、彼女の剣を受ける。

「うお、すさまじき女子だ！」
おなご

バロイがよゆうを見せようとして、じょうだんっぽくそういった。
けど、顔はやや青ざめぎみで、カノンも額の汗を髭からしたたりおとし、

「強すぎるわい」

そううめいた。

ジンのほうこそよゆうで、微笑すら泛かべている。

「力こそすべて、力なくしてなにができるか。力でなければ、現実をうごかせない。」

現実でなければ、無意味。現実こそが世界のすべてだ」

すさまじいりよりよく膂力で巨体の2人をかるうち負かす。バロイもカノンもひざを突く。

少人数の敵にここまで押されるとは……

しかも、あたしらクラウドの戦士1200は、すでにはんぶんくらいに

なっていた。大敗だ……

「ムジョー！」

しかし、ジンの剣は……くずれない！ こいつもかよ！ なんて、
無敵のムジョーがきかないの？

なんで。

なんでなんだろう。

「ユリイカ、どうしたのっ、ぼうつとして！ あぶないよっ！」

非録斗の声で意識がもどる。

「もう、こっちに來て」

あたしは、ムリヤリ麒麟の背の上に投げこまれた。

「ユユ、お願いだ。ミーシャも乗せて、麒麟で空へ」

「でも、非録斗、ぼくは」

「いいんだ。きみもケガをしてるだろ」

あたし、さけぶ、

「いやよ、非録斗、あたしは」

「いくんだ、ユリイカ。きみがいては、僕は、闘えない」

「非録斗ーっ！」

「さあ、ユリイカ、非録斗の気持ちをわかってあげて！」

ユユがそういった。

あたしたちは、宙へ上がる。

シルヴィエ帝国軍が隘路あいろを駆け足で通過していくのが見えた。

なん十万という人間がこんな足場のわるいところを、わずかな時間
で通過し終えようとしている。

「イース、撤退しよう！」

あたしは、そうさげんだ。

「もう、7割か、8割くらいが通過し終えちゃってるよーっ」

そのときだ。

はばたく巨大なカラスの背に立ったバリユースがあたしたちのま

えにあらわれる。

無表情でリボルバーをあたしにむける。

「うわーっ」

ユユがあわてて麒麟の手綱たづなをひっぱり、むきを変える。弾があたしの髪の毛の上をかすめた。「ひやあー」

大急ぎで逃げる。カラスは、麒麟に追いつけない。ハヤブサにするべきだったわね、バリユースさん！

逃げ去りながら、ユユは、弓でジンの背なかをねらった。

「ふんぐっ」

眼を怒らせてジンが背の矢をぬくとき、イースは、体勢をととのえた。ジンがむき直るのを待つ。

「ふ。あいかわらず、おろかな律儀りちぎさだな」

「正義でなくては無意味だ。正義こそが真実だ。真実こそが生命のすべでだ。」

生きることは、生きのこることではない。真の生命なくして生き
たとはいえない。

おろかであわれなのは、きさまだ！」

ジンの剣にふたたび飛ばされ、たおれる。

けれど、ふたたび立ち上がる。

25

インフィニティ・フューチャー 無限の未来

RZDがあたしたちにむかつて大声でいう、

「帝国軍がハン・グアリスにむかったことを知らせるんだ」

暗鬱あんうつで、ほとんど言葉を発しない彼がそんな声を出すことに驚い

たが、そんなばあいじゃないね。

そうだよ！　ほんとーだ。このままじゃ、ANKAがやばい。

歩兵部隊が平原にせまっているってことだけじゃない。予想に反

してレオン・ドラゴ軍がまとまりをうしなっておらず、じゅうぶんに機能しているってことがこの山上の戦いでわかったからだ。

つまり、平原にのこっている少人数のクラウドの戦士は、シルヴィエとレオン・ドラゴにはさまれることになる！

「もしもし、ANKA、作戦は失敗よ。それにレオン・ドラゴ軍があらわれたわ。ジンが指揮をとってるのよっ！」

「わかった。こっちは、いまのところだいじょうぶだけど……けっこう、やばいね。気をつけるよ。いまのところそれしかない。

でも、いい知らせもあるのよ。ベ裂が敵に壊滅的な打撃をあたえたわ。重機装甲部隊は決定的な損害をこうむって、進軍できない状態よ。

ベ裂を、そっちへむかわせるわ」

そうなんだ。

すっげー。

さすがに裂。

帝国の火砲かほうつき附自走式装甲戦闘装軌車輛そうしきそうこうせんとうそうきしやりようを、ティラミスみたいに2つ、4つに斬って、あつというまに、数百台を破壊してしまったらしい。しかも、重機装甲部隊の援護のために、ユヴィンゴから飛んで来た戦闘機の自動連射銃の襲撃あに遭つても、敵の火砲かほうつき附タンクや自走式連射ミサイル砲を奪って操作し、戦闘機数十機をたちまち撃ちおとしてしまったらしい。

すげー。すごすぎる。1人軍隊とよばれるものダテじゃない。まさに1騎いっきとうせん当千だー。

なんて驚いているうちに、かがやく3首の白龍に乗ったに裂があらわれた。すでにボロボロだったイースと、闘気が火焰光のようなジンとのあいだに立ちはだかる。

「さあ、来てやったぜ。」

俺の相手をするか、ジン・メタルハート」

「ウムム」

ジンがうなる。

ズ裂が青眼せいがんに（正面中段に）かまえ、全身から清流のような闘気をはなつた。それは、美しい青白い炎となって、太陽のコロナのうに、ズ裂のからだの3倍くらいの大きさに、鳶つたのような渦を巻いて燃え上がった。

「ふんぬっ！」

ジンが渾身の力をふるってズ裂にうちこむ。

「ふ」

ズ裂は、ハエでもはらうように、かるくはらいのける。

「うらっ」

ジンが上段にかまえてふり下ろす。力でねじふせる気だ。ズ裂は、かるく受けとめる。ジンがからだのバランスをくずす。

憤激したメタルハートが狂ったように息もつかせずうちこむ。ズ

裂は、よゆう。ジンがくやしきで蒼白になり、息を切らせ汗をした
たらせる。

「どうした、メタルハート。臂力では俺を斬れぬぞ。りよりよく

剣は精神だ」

歯がみするジン。しかし毅然と姿勢をただすと、ふりむき、

「撤退だ。」

任務は果たした」

そして、ズ裂へ向きなおり、

「まさか女を背から斬ることはあるまいな」

そういつて剣を鞘さやにおさめ、背をむけて歩き出した。

「ふん」

鼻を鳴らすと、ズ裂は、剣を鞘さやにおさめてしまい、ジンを見送る
だけで、それ以上、なにもしようとしなかった。

レオン・ドラゴ軍が退却態勢に入る。ソングやカノンやバロイ

が追おうとする。苦しそうな息をして膝を屈していたイースも立ち上がる。

あたしたちクラウドの追撃をふせぐように、2人の女戦士とレオン・ドラゴの騎士の十数騎が立ちふさがった。

「きさまらに、ここからさきをいかせない」

アンジェラとエピタフィラがそういつて、追撃しようとするあたしたちをにらむ。

「見上げた心意気だ。」

しかし、これも戦のならい。手かげんはしないぞ」

ボノがそうさけんで、さいしよに突っこむ。はげしい闘い。

死を決し、獅子奮迅の闘いをするアンジェラは、臂力にすぐれ、

強力さにおいては、メタルハート以上だ。しかも、命をかけた者の強さって、はんぱじゃない。

そのアンジェラと互角に剣をまじえるイースは、すでにジンとの

闘いで全身に傷を負っていた。まちすごい。しかも、なぜだろう、
イースの眸ひとみがだんだんと澄んだしずかさを湛たたえはじめている。それは死力を尽くし鬼気せまるアンジェラとは、まったく対照的だった。
あかるい、うすい青の湖みたい。

ちなみに、ズ裂は、もうやる気をなくしていて、岩に坐ってギターを弾いている。くわえタバコで。

あたしの眼には、イースがやや押されているように見えていた。だが、はげしくイラだっているのは、アンジェラのほうだった。ふり下ろした渾身こんしんの一撃がかわされ、大剣が岩に刺さる。イースは、剣がぬけなくなったアンジェラをあえて攻撃せず、しずかなまなざしで見ていた。

「殺せ、おまえの勝ちだ」

イースは、ゆっくりうなずいた。

アンジェラの首を斬りおとす。それを見たエピタフィラは、哄笑こうしょう

し、自らの首を斬りおとした。おちた首が不敵な笑いを泛かべている！　なんて女なの！

イースは、休むいとまも持たず、麒麟の背に飛び乗り、手綱をひいて、崖を落下するように駆け出し、

「追撃だ」

断崖を駆け下りるレオン・ドラゴ軍を追う。

あたしたちも非録斗を乗せて、イースにしたがったが、

「ひゃーあつ」

「わぁーい」

ジェットコースターの100倍こわい！　あたしはさけび、ミーシャははしやぎ、隘路あいろに降りると、ジグザグなせまい道を岩にぶつかりそうになりながら、激突寸前すれすれの疾駆をする。

ジンは、帝国軍の歩兵部隊と合流していた。

「これ以上、追ってもムダのようだな。むりに闘えば、味方を犠牲

にするだけだ。べつのルートでハン・グアリスへもどろう」

イースがそういった。

平地へもどると、雨が吹雪に変わっていた。

氷裂がいう、

「ANKAと合流してシルヴィエ正規軍をむかえ撃とう。そのうち、俺のいた第2部隊も帰って来るだろう」

チェバロが、

「ここでわかれよう。」

俺は、義勇兵のなかから、有能なやつらをつれてヴォゼヘルゴのようすを見に行く。スパイ活動やゲリラ活動をおきたいんだ。

人選はすでにしてある」

イースが強くうなずき、

「わかった。お願いするよ。」

だれかにやつてもらわなければ、とおもっていたんだ。

とくにシルヴィエのジェット戦闘機部隊がどこにいるか知りたい。
ログからは発見できなかったらしいからね。

ヴォゼヘルゴに空港なんてあるはずがない（どこの国にもない。
飛行機があるのがシルヴィエだけだからだ）が、どこかに滑走路に
なるような平坦地へいたんちがあるはずなんだ。

こわいのは、戦闘機とミサイルだ」

「承知しているさ」

チェバロとわかれ、数時間後、ANKAと合流すると、エリコの
戦勝報告メールがあたしたちを待っていた。

エリコは、ミハイルアンジェロの設計した多石連射たせきれんしゃとうせきき投射石機で、河
をさかのぼって来たシルヴィエの物資運搬船を、つぎつぎと航行不
能にし、積み荷を奪ったという。

すぐに帰って来られないのは、戦利品の整理にいそがしいからだ。
メールにそう書いてあった。

ところで、この多石連射投石機という新兵器は9機の投石機が1つになったもので、1度に9発撃てるわけだけど、ふつうの投石機が1回投石するたびに、セッティングしなおさなければならぬのとはちがい、マシンガンみたいに連続して、びゅんびゅん石を飛ばすことができるらしい。

そんな武器があつたんじゃ、敵はひとたまりもなかったろーな。なん万人の兵士がいようが、なん百隻船があろうが、河のはばがそんなにひろいわけではないから、1隻ずつ順番にやらんでやってくるわけで、投石機にとっては、絶好の標的だったようだ。

ちなみに、シルヴィエ軍は河の状況を調査する時間がなかったせいか、浅瀬に乗り上げてしまった船も、けっこうあつたらしい。

「たぶん、重機装甲部隊が到着して、警護してくれることをあてにしていたんだろう。船には重武装がされてなかったらしい。

ところが、その重機装甲部隊が来なくなってしまったから、はだ

かの輜重部隊しちようぶたいになってしまったんだろう。やつらにとっては、考えられるかぎり最悪のシナリオだったはずだよ。

だいたい、高性能な科学兵器を持った世界最強の重機装甲部隊が負けるなんて発想はシルヴィエがわにはなかったんだろうからね。

もつとも、ぼくもおもつてもいなかったけれども」

イースは、そう解説した。

「やつつけた兵隊たちは、どうなっちゃったの？」

ミーシャが心配そうにきいた。イースがこたえる、

「海軍兵や船員はみんな縄でしばって、甲板にならべ、数隻の船に乗せて、あとは自然な河の流れにまかせて川を下らせ、帰らせたらいいね。」

捕虜にしたら、あるていどめんどろ見なくちゃいけなくなるし、どうしたって経費がかかる。

身代金をとろう、なんて提案すれば、どうせANKAに反対され

るだろうから、おそらくさっさと強制送還しちゃったんだよ、エリコは」

ただ攻撃するだけで終わらないところがエリコらしい。かんぜん復活したみたいだ……。

この多石連射たせきれんしゃとうせきき投射石機はエリコよりも、さきに本部に帰って来ていた。むろん、ぜんぶではなく、数機だけだ。

見れば、なるほど大きさもすごいが、木製の歯車がたくさんあって、構造も複雑そうだった。

短い時間で、よくもまあ、こんなものをつくることができたものだとおもう。

「帝国軍が来るなら、これが役立つわ」

エリコがそういつて、これらをさきによこしたらしい。たしかに、そのとおりだ。

本部の周辺の景観が変わっていた。

昨日までは、ジョリーを中心に大きなテントがいくつかあっただけだったが、いまは、投石機や戦利品（大砲や銃や刀や鎧や火砲かほうつき）
自走式装甲戦闘装軌車輛、食糧や酒、金銀財宝のつまった箱、衣類、
テント）が山のようにあり、本部の兵士たちは、周囲を壁でかこんで城砦とするために、休むこともなくあわただしく働きつづけていた。

イースは、キャビンに入ると、ロウソクを1本立てて、『k O O』をまえにおき、剣をにぎって瞑想めいそうに入った。

「もしも、ジン・メタルハートが勝つならば、このIEもただの物理的な法則だけが支配する無情の世界。物的な非情性のみがほこらしげにひるがえり、力だけが天帝のごとく栄耀えいよう栄華えいがし、獣の欲望が謳歌おうかするくさった世界になってしまう。

ぼくが勝てば、あるべき真実の世界、人が求める人間の世界、ほんとうの人間の世界、理想の大地、永遠の平和の大地が実現する。

命もいらず、名もいらず、すべてを捨てて闘う。この闘い、わがために非ず^{あら}」

翌日、あたしたちの第1部隊の兵士全員がもどって来た。

はげしい戦闘と山岳地帯での行軍で、疲弊^{ひへい}し尽くした彼らは、下山し終えても吹雪にさらされ、限界状態。急いで食事があたえられ、睡眠をとるように命じられる。

さまざまな情報が入ってきていた。

すでにシルヴィエ正規軍はハン・グアリスの平原を進軍中で、重機装甲部隊がいなくても、まったく気にするようすはなく、黄砂^{こうさ}のように地をおおい、押し寄せて来ているらしい。

ANKAがいう、

「レオン・ドラゴは兵を増強して、ジンの指揮の下、シルヴィエと合流した。それだけじゃない。ヴォゼヘルゴも参戦してきた。

フォロワーからのフォローでわかった」

「なんで、ヴォゼヘルゴが！　ボダシェヴィは、死んだのよ！」

って、あたし。

「でも、シルヴィエの属国であることに変わりないからね。

くわしくいうと、シルヴィエが進軍のちゆうで、ヴォゼヘルゴに正規軍将校をのこしてきていて、重機装甲部隊や輜重部隊しちようぶたいの損失を穴うめするために、そいつらに、急きよヴォゼヘルゴの軍をまとめ上げさせ、こちらへ進軍させたってことらしいよ。

敵は、昨日の闘いで、10万以上の兵をうしなっているけど、レオン・ドラゴとヴォゼヘルゴの合流で、総計50万にちかい兵力にもどっているわ」

その日の夕方、シルヴィエがユーコニー川を輸送路とすることをあきらめたらしいことがログで確認できたので、エリコたちへ、帰還するように連絡する。彼女たちが帰って来て、投石機がさらに数十機ふえた。

ノーロイの怪力とミハイルアンジェロ設計のタワークレーンや掘削機なんかの建設機械（木製だけど）のおかげで、周囲900メートルの城壁が一昼夜で完成した。食糧や酒をおさめるための大きな備蓄庫もつくられた。

城壁の上に48機の多石連射投射石機がならべる。

たせきれんしゃとうせきき

さらにシルヴィエから奪いとった対空高射砲（!?）なんで、帝国

たいくこうしゃほう

があたしたちと闘うために、こんなものを持って来ていたのか理解できない。だって、飛行機は世界中でシルヴィエにしかないんだから！ エリコにいわせると、そういうところが神聖帝国なんだそーだ）をならべ、戦闘飛行機の襲撃にそなえる。重機関銃や大砲もたくさんある。

ろうじょう

あたしたちは、籠城し、シルヴィエ多国籍軍をむかえ撃つことに

たこくせきぐん

なった。かならず現実をうちやぶってほろぼしてやるぜーつ。

人間のささやかな希望、悲痛な願いをまったく意に介さずふみに

じる非情なりアリテイ。テメーだけはぜったいにゆるせねー。シル
ヴィエがそれだ。ぜったい、勝つわ。未来は無限にあるんだから。

城砦の名は^ィフ^ッ (Infinite future)。

26 いふ (Evening)

天候がさらに荒れた。

城砦に籠^こもるあたしたちにとっては、有利な状況だ。

「チエバロから連絡があつた。

ヴォゼヘルゴ国内で、シルヴィエ空軍が戦闘機をかくしている場

所を見つけたんだ。朗報^{ろうほう}だよ。

やつらは、城砦に籠^こもっているわたしたちを攻撃するために、か
ならず空軍をつかうはずだから、地上にあるうちにたたかなくては」

A N K Aがそういうと、^ベ裂が、

「俺がいつて来よう。

シルヴィエの大軍がここに来るまでは、まだ時間がある。今日中にヴォゼヘルゴに入って、明日の朝には帰って来るさ」

そういつて、白龍に乗り、猛吹雪の空に1人で消えていった。

あたし、悩んでる。

ムジョーがきかないからだ。むろん、あたしの力が消えたのではない。そもそもムジョーは叡^{えいち}智だから、魔法や神通力や呪術や超能力なんかとはちがって、なくなったりあらわれたりはしない。ある特定の相手にきかないだけだ。

なぜだろう。

この世でムジョーでないものなんてない。

じゃ、なんできかないの？

すべてがムジョーなのに。

だれもムジョーから逃^{のが}れられないのに。

いま見ているものは、一瞬まえの過去でしかない。意識はつねに過去でしかない。もう、なくなってしまったもの、おもい出でしかない。

こころ Heart の表象 Representation でしかない。

表象とは、なにか。人は物事を考イデア概にしてとらえる。イデアは、意味というかたちを持っていて、そのかたちで、あたしたちに理解をあたえる。そういうふうげんてきに原的に感じられる。

でも、なぜ、そのかたちで理解は生まれるのか。

意味って、なに者なんだ。

それは、この世界に来るまえからの、あたしのつぶやきだった。

もし、だれかにこんなことをいえば、くだらないわごとといわれるだろう。「じっさい、現実って、そーなってるンだからいいじゃん」

ほんとうにそうならば、あたしも「ま、いいか」ってゆーとおも

う。でも、そうじゃない………

暖炉の炎をじっと見ながら考える。

だれかが来た。

エリコか、ANKAだとおもった。

ちがった。

RZDだ。彼は、あたしのとなりに坐った。

「悩んでるんだな、青龍」

「そうよ。おかしい？」

いま、青龍とかいわれても、皮肉としかおもえないんだけどー」

「悩むことなど、なにもないじゃないか。

ユリイカ、おまえもいつていた。なにも知らない、つてな。

そうさ、知ることなどできない。わかるって、なんだ？

この世は……無常だから」

「わかったようなこといわないで。つか、あんたにいわれたくない

わ。

あたしは、青龍の称号を持っているのよ、いちおー」

「そうさ」

「なんなの？」

「いや。」

ただ、それだけだ。

それじゃ」

去った。

ただ、それだけ、って、なにがそれだけだったの？ R Z D がいつていたそれって、なにをさしているの？ ぜんぜん、わかんなかったんだけど？

なんか、この感じ、まえにもあったような気がした。茶碗をじつとにらんでいたところをおもい出す。

あたし、じぶんの考えが理解できなくて、しばらく、ぼうつとし

ていた。

なにかがわかりかけていて……。なにかがわかりそうで、わからない。

「ユリイカ、なにしてんのよ？」

こんどは、ほんとにエリコだった。

あたし、少しまよったけど、R Z Dにいわれたことをエリコに話した。いままで、こういう悩みを語ったことはなかったようにおも
う。

「なんか、わかる気がするけど、よくわかんないや。叡智^{えいち}はあんたの仕事だよ。

それよか、少し外の空気を吸ったほうがいいかも。いこうよ」

あたしは、だまってうなずく。立ち上がった。篝火^{かがりび}の燃える石の廊下を歩く。

2人で城壁の上をわたった。ビュービュー、うなる猛吹雪だ。凍

てつく風のせいで生命がよみがえる。

24人の兵士が24の方向を見はっていた。2時間おきに交替して24時間体制だから、延べで1日288人が見はっていることになる。まだでここわ戦場なんだね・・・

「エリコは、えらいよね。敵の船をやっつけてさ、たくさん戦利品も持って帰って来てさー」

「そうでもないよ。」

シルヴィエ軍も、わたしたちが待ちぶせしてることを予想していたとはおもうけど、地理もよく知らず、水の深いところや浅いところもわからず、ながれのはやいところやおそいところもつかんていなかったみたいだったからねー。かんぜんな調査不足だよ。力を過信していたんだね。

逆に、こっちは、地元だもん。河のことはくわしかったから、ぜんぜん、有利だったってだけのことよ。

だから、少人数でも、おもうぞんぶん料理できたよ。さすがのシルヴィエ軍用艦も、警護するはずの重機装甲部隊が壊滅かいめつしちゃー、もーどーしよもないよね。そんなことは想定外だったんだろーね。まあ、とうぜんだけど。ベ裂のような人間って、ほかになかないからね。ベ裂が来てから、すべてが変わったよ。

だいたい、彼がいなかったら、こんなに人が集まらなかったとおもう」

「そーか。そーいえば、そうだねー。

それにしても、視界わるいね。これじゃー、敵がちかづいてもわからないよ」

すると、大砲の調整作業をしていたタイラクがふりむいて、いった、

「だいじょうぶだよ。

ガリア・コマータたちが城外を巡回してるし、チェバロも、特殊

部隊をつくって城外の木や岩に身をかくしながら、ちかづく敵を警戒しているし」

「そうなんだ。寒いのに、たいへんなんだねー。あたしたちって、こんなのにんきでいいのかしら」

「つーか、そろそろもどろー。冷え切ったよ」

エリコがそういった。あたしは、まったくきぶんが晴れない。

非録斗が来て知らせてくれた、

「ANKAがいつていたよ、『ログでわかるはんいでいえば、帝国主導の多国籍軍がここに到達するのは、おそらく明日』だってね」

つまり、その日はなにごともなくすみ、夕食のあと、みんなが集まった。牛1頭まるごと入るぐらい大きな暖炉のまわりに輪をつくってかこんだ。

ANKA、あたし、エリコ、ミーシャがさいしょの輪だ。それぞれ大きなアームズチェアにゆったりと坐って、深くしずむ。顔がは

んぶん、かくれるくらいに。

暖炉の炎は強く、スリッパのさきっぱが焦げそうだった。

外がわ第2の輪には、ジャジュ、非録斗、エチカ、ユユ、ユリアス、バロイ、カノン。ソファやベンチに、おもいおもいに坐っている。

第3の輪には、ソシタグ、ノーロイ、カブキ、タイラク、RZD、ボノ。絨毯の上にちよくせつ坐っていた。

ANKAが語りはじめる、

「IEは、理想の世界。そうおもって、ここに来ただけで、なんだか、そんなの、とおい、とおい、むかしのことのようにおもえるわ。いろんなことがあったわね、ユリイカ」

「なによ、ANKA、もう人生の終わりみたいじゃん」

「ごめん、なんか、ふしぎでさ。」

こんなつもりじゃなかったのにね。あんたには、わるいことした

とおもってるよ」

「そんなことない。よかったよ。すごいよかったよ。

だよね、ミーシャ」

「えー、急にふらないでよー。そーかな、わたし、よくわかんない。なんかつらいことばかりのような気もするし……。

でもねー、正義の意味が学べたよおー」

ミーシャがめずらしくそんなことをいう。

「ある意味、リアル・ウイルスの存在には、意義があつたのかもしれないですね」

ユリアスがそういった。

「でも、いまのままを肯定する気はないよ」

ってボノ。あたしは、

「肯定できないけど、意味はあつたんだ……正義か。

正義が真実なのは、それが自己超越だからだって、そういつてい

たよね」

「イクシュヴァーンか。

なつかしいな」

イースがそういった。

「でも、またアカデミアには、いくことになるのね。

あまりうれしくない用事で」

ANKAがそういう。だれもがだまった。

薪が燃えるパチパチという音がするのみ。窓の外は、はげしく吹

雪いている。

ミーシャがいった、

「じゃ、ジンにも意味があつたのね」

エリコがとおい眼をする。うつむいて暗い表情になった。

あたし、いう、

「そりゃー、あるでしょ。わるい意味がね。意味があるってことと、

肯定するってことは、べつだから」

「ジン・メタルハート……か」

そうつぶやいて、イースがなんとなく（いいえ、たぶん、意識的に）、ジンとの過去を語り出した。

「かつて、ぼくは、メタルハートに殺されたんだ。

そのころ、ぼくたちは、南大陸スーにいた。

羅汎らはんが皇帝になって、マールを世界帝国にした時期だった。

彼女も、ぼくも、まだマールという国をくわしく知らずにいた。

武人を重んじる気風というだけで、そこに雇われたいとおもっていたのさ。

志願者は、勝ちぬき戦で闘い、生きのこらなければならなかった」

ミーシャが眼を丸くする。

「イースが負けたの？」

「ちがう。」

いや、あのころなら、負けていたかもしれない。

ぼくは、ロード国出身の男と闘い、勝ったが、彼の命を奪わなかった。そして、もうその段階で、帝国に志願したことを後悔していた。

試験官は、ぼくを殺せと命じた。ぼくは、試験をやめるといった。だから、殺さない、と。

試験官は、ぼくを殺す自信がある者はいるかと、みんなにきいた。自身のある者は、まえに出よ、といった。

そして、ジンがすすみ出た」

「ありそうなことだ」

ANKAがそうつぶやく。

「ぼくは、剣をぬかなかった。うしろをむき、そのまま、試験場となっていた闘技場を出ていこうとした」

エリコが声を上げた、

「そうか。」

まさか、うしろから斬りつけるような卑怯なまねはしない、武人ならば、だれでも同じようにおもう。じっさい、ジンも、ズ裂に同じことを先日いった。

当時のイースも、そう考えたんだね」

「そう。しかし、ジンは斬ってきた。

ぼくは、殺気を感じ、無意識に剣で受けていた。そして、彼女を蹴りたおして」

「やったー」

あたし、おもわずいっちゃった。

「蹴りたおして逃げたのさ。残念ながら」

イースは、そういつて笑った。

A N K A がうなずき、

「わかってきたよ、それでジンに報復されたんだ」

「そう。

ぼくに蹴りたおされたせいで、ジンは不合格になった。その夜、ぼくは、あの5人組にかこまれて、ジンと1対1の勝負をしなければならなかった。

私闘はしたくないと、ぼくは、ことわったが、こんどは背をむける気にならなかった」

「ごもつとも」

ANKAが笑う。あたしも笑った。ミーシャも。エリコも少し笑う。

笑いながらイースが言葉をつづけた、

「しかし、ジンは、斬りかかってきた。

ぼくは、鞘さやから剣をぬいてふり下ろされた剣をはじき、身をひるがえして、かこみを突破し、逃げようとしたんだけど、イヴィラ・ヴィシヤスに斬りつけられ、斃たおれた。

ジンがぼくのうえに跨またがって容赦ようしやなく、喉に剣を刺した」

「怖おそい」

ミーシャが声を上げる。

「因縁いんねんだね」

ANKAがそういった。湯の沸わく音がする。お茶にすつか……

夜明けまえ。雪はやんでいた。空が白み、風がまだ強い。

城壁に立つと、シビイレ山脈の白い嶺みねを背景に、東の大地に黒いむらがりが見えた。

50万の神聖シルヴィエ帝国多国籍軍たこくせきぐんだった。

「もつと、ひきつけてから攻撃しよう。それから、斥候せつこうやスパイのうごきにとくに警戒してくれ」

イスがいった。

やがて軍勢はナイルの洪水のよう、モン・サン・ミッシェルの潮の満ちるように、イフのまわりをかこむ。

咆哮ほうこうのような関ときの聲がとどろき、あちらこちらで馬のいななきがきこえ、剣や槍やりや楯たてがぶつかる音が広大な空間のあっちこっちで海のようにざわめく。蹄ひづめの音、怒号どごうや哄笑こうしょう、鬨らっばの開始を告げる喇叭が鳴りひびく。

弓や弩が飛んだかとおもうと、いきなりガトリング銃やモンテニー機関銃、ノルデンフェルト機関銃、マキシム重機関銃が火を噴く。なん発かが破片を飛びちらせ、城壁の石のかどを少しけずる。

「こっちも撃て！」

クラウドの兵たちが敵から奪ったフリントロック式連発銃やカービン銃、コルト・ライティング連発銃やモーゼル銃、シヨシャ軽機関銃やオルガン砲で応戦する。

これら小火器はシルヴィエから奪った総計3000丁の銃や、いく種類もの大砲小砲のなかの一部だった。武器はいつきに豊富になっていく。こっちの兵が1千数百人だから、人数の倍以上の火器がある計

算だ。

ギギギ、投石機のしなる音がした。やがて……

びゅん！　びゅん！

レオン・ドラゴの投石機だ。燃え盛る炎の大火石が飛んできた。油をたっぷりしみこませた布が石に巻いてあるのだ。

さらに爆音がとどろく。大砲だ！　弾が飛んで来て、つめこまれた火薬が炸裂する。

大砲って、一口にいつても、すごいたくさん種類だ。

タイラクが胸壁からながめてたのしそうにいう、

「いや、これは、たまらないねー。

見てよ、カブキ！

ほら、軽架野戦砲 M40 無反動砲、車載 4 連装砲架ボフォース砲、6 ポンド砲、自動カノン砲、歩兵砲、搬送曲射砲、攻城曲射砲、野戦曲射砲……」

「ロケット・ミサイルまであるぜ。こりゃー、勝てないよな」

「あんたたち、なにいつてんのよ」

あたし、ムカついてそういった。

「あぶない、ユリイカ、城砦のなかに入って。

さあ、こっちも投石だ。砲撃だ。まずは、あれをねらってくれ。

ほら、あれだ、ロケット・ミサイル発射装置さ。

あそこに、あのおくに見えるやつだ。とどくか。いや、ともかく、あれを重点的にねらってくれ。やつつけないと、城壁をかるが
る越えて、砦を破壊してしまうだろう。

まだいたのか、ユリイカ、はやく砦のなかへもどるんだ！」

ミハイルアンジェロがさけぶように、そういう。

カブキとタイラクは、

「そうそう、ユリイカは、もどつて。あとは、やるからさ」

つて、あたしにいうと、あとは嬉々^{きき}と砲兵たちに号令する。

城壁の上に、ずらりとならぶ大砲と砲兵たちのところを順番にまわって、さまざまな指示を出し、ときには砲兵に替って操作し、またときには、立ち止まって監督する。

列をなすクラウドの大砲がいつせいに火を噴いた。

1分間に270個の大石を飛ばす多石連射たせきれんしやとうせきき投石機がびゅんびゅんとなえまのないうなりを上げる。

が、しかし!?! やばい!

「あああーっ!」

ジェット戦闘機だ!

「ふひより、制空戦闘機イーグルに、航空支配戦闘機ラプターだ!

すげえー」

こら、カブキ、よろこんでるばあいかよ!

ミハイルアンジェロがすぐに指示を出す。

「対空高射砲だ。すぐに準備するんだ!」

飛行機から攻撃を受けたらクラウドの城壁なんか、なんの意味もない。

「ユリイカ！ はやく砦に！」

ミハイルアンジェロの悲痛なさげびに、やむなくあたしも建物のなかに入る。

ものすごい音がして砦全体がゆれた。

「なんなの！」

城壁から降りて来た兵士がいう、

「イーグルを1機おとしましたよ！」

墜落して、イフの城壁に激突したんです！ みごとでしたよ！」

また砦がゆれる。

「戦闘機からの爆撃だよ」

あとから降りて来たイースがいった。

イースは、駆けつけて来た迦楼羅から鎖帷子や楯や兜を受けとり、

くさりかたびら

その場ですぐに出陣の準備をととのえはじめた。

「イース！　だめだよ、相手はシルヴィエのジェット戦闘機よ」

「だから、いくのさ」

「そんなーっ」

むちゃよ、ケガだっしててるのに」

「心配ないよ。」

あ、それから、迦楼羅、麒麟の準備をしておいてくれ。

じゃ、ユリイカ、ぼくは、したくがあるから」

そこへANKAが駆けつけて来た。

「準備がはいわね、イース。」

でも、まだよ。

しばらくは、砲撃や投石で敵の力を弱めるの。岩を出て闘うのは、

それからよ。

なんのために、敵の補給路を断ったとおもっているの？

ろうじょう

籠城^{ろうじょう}ってのは、ふつー、持久戦なんだから。

城壁の外へ出るのは、まだまだはやいわ」

「わかつているよ。

だが、ジンをおせば、闘いはやく終わる。そうすれば、いたずらに、おたがいの兵が死ぬことはない」

「そんなことないわ。

この軍事行動を指導している主体は、あくまで、世界征服をもくろむ帝国シルヴィエよ。

ジンがいてもいなくても、モチベーションに変わりはあるとはおもえないわ」

「論理的にはね。

しかし、きみは、ジンが兵士にあたえる影響をあまく見ている。

彼女は、鬼神だ。まさに戦闘の神の化身だよ。

彼女をおさなければ、平和はない」

「わかった。」

でも、今日のところは、城壁にハシゴをかけて上って来る兵士を退治してくれない？」

じつさい、城壁のそばまでたどり着いて、攻城用のはしごをかけようとする兵士がなん百人かいた。

だが、それは、ぜんたいのわりあいからすれば、ほんのわずかだ。ほとんどがあたしたちの投石や砲撃でイフにちかづけない。

ちかづいても、銃で撃たれ、敵兵全体の数千分の1がどうにか城壁にたどり着くだけだ。

「ベ裂から連絡があつた。

戦闘機をほとんど破壊した、らしいんだけど、数機をのこしてしまつて、それがこつちへむかつたようだ、……つてね」

A N K Aがそう教えてくれた。

「いま、まさに来てるわ！」

「ええ、そうね。」

でも、おそらくは、いま見ている6機しかのこっていないみたい
ね。1機は撃墜したようだし。

ひきつづき地対空砲で、なんとか、がんばって撃退しよう」

「またも轟音！」

「こんども墜落の音ね。なんか、わかるようになってきちゃった！」

「そうよ、ユリイカ。また撃墜したようね」

「イースがいう、

「うん。」

「どうやら、戦闘機は撤退しはじめたようだね。」

「ジェット音がおざかっている」

「さあ、だから、まつじょう籠城よ。城壁を守って、イース」

「ああ」

「夜になった。」

不安な夜だった。寝ているあいだにまた戦闘機が来たら、ロケット・ミサイルが飛んできたら……

ズレが銀のジョッキを片手に笑った。

「心配するな。」

シルヴィエはその気になれば、大陸間弾道ミサイルではるか数万キロの南大陸でさえ攻撃できるんだ。

こんなところ、いつでも爆撃できる」

……なんなんだ。なぐさめなのか？

夜も眠らずに警戒がつづく。みんな興奮し、昂ぶっている。やたら声が大きい。やたら、せわしい。いつもだれかが廊下を走っている。

寝てない人ばかりだ。対空高射砲はつねに発射できるよう、兵が配備された。カブキとタイラクは、交替で城壁に待機する。

あたしは……疲れて自室でスヤスヤ……うぐ、ごめんねー。

れいめい

黎明、そして、日が昇ると同時に、麒麟にまたがったイースが門をあける。そのうしろ、ストランドと19名のガリア・コマータたちが追従する。

たった20人で数十万の敵に、ジン・メタルハートのいる場所に出ていった！

「非録斗」

「どうしたの？」

「とうとう、イースがいつてしまったわ。お願い、麒麟を出して！」

「しかし、ユリイカ」

「だまって見ていられないわ。だって、あたしのムジョーがなんかの役に立つかもしれないじゃない」

「わかった。いこう。ただし、危険を感じたら、すぐひき返すよ。

いいね？」

「いいわ。はやくいこう！」

空を飛んだ。

すさまじい戦況だった。わずかな人数のガリア・コマータに数百、数千のシルヴィエ、レオン・ドラゴ、ヴォゼヘルゴの兵が群がる。けど、その敵軍の疾風怒涛の大海をかきわけて、雷霆神らいていしんのごとく、つぎつぎと斬り裂くイースは、別人みたい。ガリア・コマータの先頭を駆けて、数百数千の敵軍の渦中へためらいもなく突っこんでいく。だれもが彼女を止められない。

どんな強く大きな兵士も、まるで木の葉のように、かるがると蹴ちらされてしまう。

ああ、だけど、あれは、ジェット戦闘機だ。5機いる！

「ユリイカ、しっかりつかまって！」

非録斗がさけぶ。麒麟を急上昇させる！

ビュン！ え？ はげしい閃光、そのあとに爆発音。空気が振動する。

「あぶなかった、ミサイルだよ」

イフの城壁が大きく毀^{こぼ}れた。ジェット戦闘機がさらに爆撃を加える。5機のうち、1機がガリア・コマータたちを機関砲バルカンで撃ちまくる。

科学兵器に対して騎馬の傭兵たちは、あまりに無力だ。数騎がかったんにふつ飛ばされる！ ああ、ひどい。

さすがのイースもバランスをくずす。そのときだ、敵兵の射た矢がイースの腿^{もも}に刺さった。

うごきが一瞬にぶる。

たちまちシルヴィエの機甲歩兵や装甲騎兵がイースを群がり襲う。

彼女は、それでも超人的な強さで敵をつぎつぎと斬る。

地をすれすれに飛ぶかとおもうと、高く舞って剣をふり下ろし、瞬時によこへ身をかわして、数人の重装甲騎士を斬る。

だが、やがて疲労が。しだいにうごきがにぶる。

そこに砲撃や空からの銃撃が襲う。数百の重装騎兵が大剣や槍や戦斧をふりかざしてせまってくる。

ガリア・コマータたちもつぎつぎと斬られはじめる！

イフからの対空高射砲がつぎつぎ火を噴く。1機を撃墜した。

城壁からの砲撃で、イースたちを援護する。

ジン・メタルハートが返り血で血まみれになった殺戮神さつりくしんのすがたで、そこへあらわれた。

27 LAST STAND ☆

麒麟に乗ったイースは、はげしい戦闘でぼろぼろになりながらも、龍鳥に乗るジンを見つけてさげんだ。

「ジン！ 見つけたぞ！ 弑殺者しいさつしゃ、裏切り者、大虐殺者、卑怯者、

きさまに今日こそ、その大罪を贖あがなわせる！」

「ふ、イースか。そこにいたか。」

愚かなやつ、名乗り出なければこの戦いを生きのこれたかも知れぬのに。

このわたしに敵かなうとおもうか」

「おろかなやつ。そして、哀れなやつ。」

正義こそが爲なすべきすべて。もし、そうでないならば、むしろ、死んで幸福だ」

「笑止千万、リアルをさとれぬ愚者」
しょうしせんぼん

「未来を望むことこそがリアルだ、真実を抱いだく魂が生命のリアルだ」
イースが麒麟を、ジンが龍鳥を、たくみにあやつって、飛ぶように移動しながら突撃し、激烈にぶつかりあった。

ジンの剣がどす黒い炎と燃え、イースの剣は氷河の深奥しんおうのように蒼さく冴さえている。黒い炎が戦闘神ジンのすがたになって、メタルハ

ートの頭上にそびえ、イースを威嚇した。

彼女たちは、大剣を大きく、鞭むちのようにふりまわし、円弧えんこを描いてながれるように位置を変えながら、数合うちあう。戦闘神の威光によつて、天を劈つんざく霹靂へきれきのようなジンの剣がイースの剣をたたく。衝撃で剣もイースも麒麟から墜おちる。

「決まったな」

そういつてジンは、不敵に笑い、とどめを指すために龍鳥から降りた。

あたし、あせつて非録斗にいう、

「やばい、たすけにいこう」

しかし、中空のあたしたちのまえに黒い衣服の男が立ちふさがった。

「バリユース！」

男は、無言でリボルバーをあたしにむけた。

「ムジョー」

効かない。

くそ、やっぱ、ダメか。

なんでだろ、なんで。

そのとき、ケータイが鳴る。エリコだった。バカ、いま、出られないよ。

非録斗が麒麟を急降下させる。弾丸があたしのそばを数発かすめた。ケータイを手にして受話する。

「ユリイカ、どう、だいじょうぶっ？」

「エリコ、いま、話してられない。あたしもイースも死ぬかもしれない。

ありがとう、あんた、すげーいいやつで、大好きだったよ。あたしのことも、わすれないでね」

「バカ、どうしたのっ？」

「バリユースよ、効かないのよっ」

「しつかりしてっ、やつら、管理者システムの一部だもん、『常』^{ジョー}

^{たも}

が保てるよーに設定したダケだよっ！ いいじゃん、いつも無常じ

やおかしいよ。それじゃ無常じゃなくて常じゃんかつ！ ホントの

無常はたまにや常になるのよっ！ それが無常ってコトじゃんっ！」

そっか。

あたしのなかで、R Z Dの言葉とつながった。考えてみれば、あ

の茶わんのコトじゃん。つまり、タカフシ先生の教えだ。だから、

あたしは、青龍の資格がとれたんじゃない。（笑）

^{ジョー} ムジョー

常も無常だよ。なーんだ。

^{しんいわく}

眞曰、文趣眞奚焉にしあるとも、究竟也^{くきようなり}

^{りゆういわく}

龍曰、卷子皆同じう究竟を云か^{くきよう}

^{しんいわく}

眞曰、佳文究竟の所以^{ゆえん}

わかつたあ。

「非録斗、止まって」

「どうして、ユリイカ？」

「いいから止まって」

だいいわ
大磐の上に降り立つ。バリユースも。

「これで任務完了だ」

あ、はじめてしゃべった。

「そうね。もう終わるんだから教えてよ、ね、なんで、あたしを殺すの？」

彼の表情は微動もなかった。無言だ。

だめだ。こいつ、完全に環境的人物だ。キモい。

「わかったわ。じゃ、生かしてもムダね」

バリユースが一瞬、なつとくいかない、って顔した。こいつでも

表情があるんだ。あたし、いう、

「ムジョー」

バリユースがリボルバーの引鉄ひきがねにかけた指に力を入れる。

「ムダな抵抗だ、ユリイカ」

「そうなのよ。だから、ムジョーなのよ」

「なに？」

バリユースが顔をゆがめ、さらになつとくいかないって表情をした。そのゆがみは尋常ではない。

止まらなかった。

への字にまげた口はへの字を超えて逆Uの字になる。口もとがあげをまわっても、止まらない。どんどん裂けつづける。バリユースの顔が驚きと恐怖とに変わる。驚きと恐怖のためにしかめた眉の、眉間のたてジワが深くなる。深いたてジワは眉間でとどまらず、鼻のさき、あたまのてっぺんまで深く入りこむ。ひからびはじめた皮膚がひびわれ、くずれおちた。

髪はぬけおちて、地に着くまえに粉となって消える。服がほつれ

てバラバラの糸クズになり、リボルバーは錆びて砂の塵^{ちり}となる。筋肉が腐って骨から脱落し、おちながら、乾燥した繊維質になった。骨はくずれおち、地にふれるまえに埃^{ほこり}となって風に飛ばされ、見えなくなる。

周囲で闘っていただれもが止まった。戦場のまんなかに異様な沈黙の空間ができていた。みんながあたしを凝視していることに気がついた。ジンの顔さえ青ざめている。

そう、だれもがじぶんがムジョーであることを知っている、だれもが恐れている。あのジン・メタルハートですら勝てない。あたし、理由はともかく、この時点でじぶんがムジョーを極めたことを明瞭に感じた。

イースは、そのあいだに剣をひろう。

「こつちを見ろ、ジン。まだ終わってないぞ」

ジンがわれに返って、すぐに体勢を直した。イースを嘲笑う、

「愚か者。いまの隙に、わたしを斬っていれば、おまえが勝つていたものを。」

いまだに正義ぶるか。ふつ。

この世とは、ただ、現実でしかない。強い者が勝ち、弱い者が負ける。それが真のリアル・ワールドだつ！

とうぜんのことよ、現実が真実」

「虚し。」

生命を喪った者に、神は、かがやく栄誉をあたえない。

おまえは、すでに負けているのだ、ジン。ぼくは、きさまを見切った」

イスが大剣をふりかぶった。そして、

「現実Reality Realityは真実ではないっ！ 色しき即是空そくぜくうというのがごとし」

氣勢とともにふり下ろす。

あざけるようなメタルハートは、

「懲りぬやつめっ」

と吐き捨てるようにいい、剣をよこにしてイースの剣を受けた、いや、受けたつもりだった。

イースの氷白青の剣が黒き炎の剣を裂断し、ジンの兜をうち砕いた。信じがたい事態に眼を剥く女豪傑。イースは、からだをまへのめりにたおすようにメタルハートの肉体を縦裂し、片ひざを大地に突く。

そのすがたは、あたかも祈る人のようだった。蒼く凍てつく剣が裂き終えてもいきおい止まらず、地すら裂こうとするかのように、深々と地面に突き刺さる。

時間が止まった瞬間だった。

左右に裂けて2つになったジン・メタルハートのからだからだが大量の血を噴いて東西に斃れる。

イースは、しばらくうごかなかった。

無敵の戦士が裂かれた。信じがたい事態に、すべての兵たちが止まる。あぜんとして、ながめるだけだ。

イースが立ち上がった。

「この大地に、永遠の平和を」

天をあおぎ、そうつぶやく。そして、周囲の兵士たちを、あたかも見おろすかのように、超然としてゆっくり見まわした。

われに返ったシルヴィエ、レオン・ドラゴ、ヴォゼヘルゴの兵士たちが口々にさけびながら、イースに猪突^{ちよとつ}する。

「殺せつ、生かして帰すなつ」

怒涛^{どとう}のように押しよせる数千人の兵士たち。

あー、ひきよーだよー。あーあ、じゃー、しゃーないな。

「ムジョー」

「ああつ！」

襲って来た敵の剣や装甲がつぎつぎ砂塵になる。驚愕^{きょうがく}の表情を泛

かべ、信じがたいといわんばかりに顔を見あわせている。

イースは、ゆつくりと歩みよった。兵士たちがあとずさる。

イフの門がひらかれた。クラウドの義勇の戦士たちが飛び出し、シルヴィエ勢を襲撃する。斬り、うち、たたき、刺す。

形勢逆転？ いや、そんなことはない。

だって、まわりは圧倒的なシルヴィエ帝国軍だ。数千人をムジョーでやつつけたからって、ぜんぜん、おいつかない。ぜんたいから見れば、数千なんて、ほんのわずかな数でしかない。

たちまち新たな怒号が上がり、ふたたびなん万ものシルヴィエ兵があたしたちに襲いかかって来る。こりゃ、ダメだ。

そのとき、バイクに乗った集団がとつぜんあらわれ、戦場を縦横に切り、シルヴィエ軍を妨害した。

「ヨセフ！」

イースがさけぶ。

ヘルメットを上げて、ヨセフが微笑む。

「やはりANKAのいうとおりだな。

シルヴィエなんかといっしょにやっても、少しも面白くないよ。僕らも仲間に入れてくれないか」

シルヴィエを裏切って、あたしたちの味方に？

ああ、それでも圧倒的に不利だった。敵兵の数は大地をおおい尽し、終わりがあるようにはおもえなかった。空には、ジェット戦闘機が轟音を上げて飛び、あたしたちを爆撃する。

うわっ、ひゃあ！ あぶない！

つぎつぎとはげしい爆裂が！ 爆風と破片と土くれが飛ぶ。粉じんが上がり、たくさんのクラウド戦士が血まみれになって、たおれる。

ああ、あたしのムジョーがこの敵ぜんぶにつかえたら、すごいーんだけど……

ん？

つーか、なんでつかえないんだろ？

あたしの問いは、問いのなか。ラグナレクの言葉をおもい出す。

ふつーに、つかえるンじゃナイ？

「シルヴィエの兵士たち、降伏しなさいっ！

あたしは、青龍のユリイカ、解脱して青龍の神力を持つ者よ。いうことをききなさい。

さもないとっ！」

ムジヨー………めいもく瞑目して唱える。あたしは、こころをすましな

がら、巨大な宇宙の、圧倒的な存在を感じた……

広大なこの大地さえ、海さえ、大きな宇宙の空間のなかでは、砂

粒の大きさにさえもならない。

はてしない太陽系。しかし、銀河系のなかでは、同じく砂だ。銀

河系はまた、大銀河のなかの塵にすぎない。

この宇宙には、いくつもの大銀河があり、膨張しつづけている。しかも、その膨張は時とともにおとろえるのではなく、時とともに速度を上げている。信じがたいことに、加速しつづけている。

まるで生命のように。

無限に、巨大化しつづける。

あたしは、鼓動を感じた。生きている。すべてが生命を持つている。生まれ、たぎ滾り、ほろび、こわれ、しょうぞう焦燥し、躍動、拡張、氾濫、つぎつぎ増え、より高度に、より複雑に、より強く、よりリアルに、さらなる高みへむかい、現在の自己を越えた自己になろうとしている。

自己を超越しつづけている。

それがムジヨード。

世界のすべてが望んでいるのに、それがかなわないはずない。ほらっ☆

ムジョーームジョーームジョーームジョーームジョーーム……

あーっ！

見て、すごいよっ！

あっちこっちで起こるさけび、シルヴィエ兵たちの悲鳴、恐怖に
おののきさわぐ声。壮麗な騎士も、装甲された科学部隊も、華々し
い将校も、いかめしい将軍も、髭面の粗暴な兵卒も、冷酷そうな特
殊部隊も、みんな慄おのいている！

大砲やミサイルは錆のかたまりとなつて、くずれていく。ジェツ
ト戦闘機ラプターやイーグルの翼がばらばらと朽ち、火を噴いて墜
落する。神聖帝国軍の剣や銃がつぎつぎと錆びおちて、風に消える。

それがなん百、なん千、なん万、なん十万もの人間にひろがつてい
く。壮大な光景だあーっ。お、おしっこちびりそおー……。あ
たしつて、まぢ凄スゴすぎぃ！！

クラウドの義勇兵たちは、息を吹き返し、丸腰の数十万人の兵士

たちをたちまち追いこむ。多国籍連合軍はバラバラになって潰走しはじめた。

圧勝!?

いうことをききなさいといいながら、相手のこたえをきくまえにムジョーをやってしまったのは、ちよつと失敗だけど、まあ、いいじゃんか、そのくらい（笑）。

イースが驚愕の表情で、あたしのほうを見る。

「ユリイカ、ぼくらが勝ったんだね」

「そうよ、あたしたちが勝ったのよ！」

みんなが口々にこうさげぶ、

「勝利だ。」

勝ったんだーっ。

正義の勝利だっ。

真理の叡智が勝利したんだ！」

あたしたちは、みんな、歓びで躍り上がり、大声を上げて抱きあった。凱歌がいかを歌って行進し、意気揚々と帰還する。

ジョリーに帰ると、ANKAが待っていた。

「シルヴィエの軍は、シビイレ山脈へむかって潰滅かいめつ的な状態で退却中よ。なにしろ、丸腰だからね。

軍の態勢を立て直して、兵をまとめようとする者もないようだわ」

まち？

ちよーかんぜん勝利？

でも、クラウドも多くの犠牲者を出していることをわすれてはいけない。

たとえ、ネット上の世界であっても。

それでも、あたしたちは、偵察隊を出し、状況確認することを優先させた。偵察以外の戦士たちは、甲冑をぬぎ、武器をおいた。手

足を伸ばし、休息する。日が暮れるころ、偵察隊が周囲にまったく敵が潜伏していないことを報告した。

あたしたちは、炎を熾し、全員で国としての慰霊の儀式をとりおこなった。

ANKAが戦没者のなまえを1人ひとり読み上げる。深く頭こづかをたれて、みんなが哀悼の意をしめした。

その後は、あっちこっちで自然発生的に酒盛りが勃発し、勢力がしだいに統合され、シルヴィエの葡萄酒やウイスキーやビール、チーズや塩漬け肉やオリーブやパスタやサラダ（塩漬けの野菜）や乾燥パンやバターや豆や魚の缶詰による、一致団結した1千人の大宴会になった。

炎が心地よくあたたかい。

あたしは、疲れ切っていたので、すぐにベッドのなかに入った。なんども眼がさめた。

眼がさめたのは、風が鎧戸よろいどをゆらす音や、またもや降りはじめた
氷雨のせいばかりじゃなかった。

いろいろなこわい夢を見た。

不安や恐怖はかんたんには消えないものらしい。いつか時間が解
決してくれるだろうけれど……

最終的には、とつても深く、深く、ぐつすりと眠った。

朝、あたしは、起きると、サイコーのきぶんでANKAにいった、

「次は、いよいよアカデミアだね」

28 アカデミア再び

シルヴィエ多国籍軍は武器も食糧もなく、ヴォゼヘルゴへ逃げ帰
ったが、ヴォゼヘルゴ愛国主義者パトリオットによる容赦ない苛烈なゲリラ的攻
撃に遭い、まったく軍隊の体裁ていさいをもたない最悪の状態にまでおちい

った。

パトリオットたちは、同国人であるヴォゼヘルゴ兵に対しても過酷で、シルヴィエに追従した政府関係者や軍人を裏切り者として、容赦なく追いこみ、攻撃し、死の刑罰をあたえた。

シルヴィエ兵たちは、食べる物も、防寒の装備も、なにもかもうしない、ユヴィンゴへの帰還すらかなわず、バラバラに逃走するも、シルヴィエ兵狩りによって、つぎつぎと殺されるか、とらえられるかした。

かくして、南下したシルヴィエ軍は全滅したが、ユヴィンゴに駐留していた軍の全軍が南下したわけではないから、とうぜん、ユヴィンゴにのこった軍がいるわけで、そいつらが本国からの支援でいっしょに軍を増強して、ふたたびシルヴィエの脅威が復活し、もとの緊張状態にもどってしまうのは、あきらかだった。

そのとき、ヴォゼヘルゴのパトリオットたちがたどる運命は凄惨

なものとなるにちがいない。それがわかっていても、積年のうらみはすさまじく、憤怒の炎となって、ほとばしったのだ。シルヴィエ兵を殺し尽くした。

なあんて、人ごとみたいにいってるけど、あたしたちクラウドも、同じ運命の上にいる。

まあ、しばらくは安全だとおもうけど。

帝国軍がふたたび態勢をととのえるまでは、時間がひつようだろうし、なによりも、ヨセフがユヴィンゴ領内にもどって、滑走路をシルヴィエ製の爆弾で大々的に破壊したからだ。

空爆の危機からは、とうぶんのあいだ、まぬがられる。

ちなみに、ヨセフは、あたしたちと同じ国民になった。

クラウド勝利のニュースは、全世界を駆けめぐり、世界に衝撃をあたえた。はじめて帝国が敗北したのだ。世界が震撼した。

無敗のシルヴィエの歴史的な敗北。

かつこよくゆーと、歴史がうごいた瞬間ってやつだ。

結果的に、北大陸全土の制覇をねらうシルヴィエの南下政策は大きく後退した。

シルヴィエ敗戦のニュースが知れわたると、ユヴィンゴ王国でさえ、レジスタンスの活動が活発になった。

神聖帝国の駐留軍が国境附近（ユヴィンゴとシルヴィエは境を接していた）まで数カ月間、撤退した。

マール皇帝の羅汎らはんは、北上政策を急ぎ、東西南北大陸裂海マル・メデイテラノ洋をわたる軍艦数千隻にもおよぶ大艦隊の製造を工こう廠しょうに急がせた。

同時に、羅汎らはんは、クラウドに軍事協定を打診してきた（ソツコー断ったが）。

ヴォゼヘルゴでは、民族間の紛争が停止し、和解にむけたうごきが時代的な潮流であるという意見が一部の者たちから上がりはじめた。結果的には、一時的だったけど……。

レオン・ドラゴでは、全軍を挙げて参戦したこの戦いで、潰滅^{かいめつ}状態におちいったため、苦渋^{くじゅう}の選択がなされた。

あたしたちクラウドに全面降伏してきたのだ。

すべての武器や装備がムジョーによってなくなってしまったんだから、彼らは、そうするしかなかった。

ANKAは、レオン・ドラゴをクラウドに合併することを、ネット上に宣言した。

むろん、シルヴィエを怖れて、この北大陸^{ノルデ}では合併を承認する国はなかったが、南大陸^{スール}では、すべての国が承認と賞讃と祝意を表明してきた。西大陸の承認は少なく、東大陸の承認は多かった。

まさに、超大帝国の勢力分布図のとおり賛否がわかれたことになる。

ともかくも、クラウドは国家の規模を拡大し、強い国々のなかま入りをすることとなったのだ。

一カ月後、生きのこった難民たちは（あちこちにおびえてかくれている難民をすべて見つけて救出するには、予想外に時間がかかったが）、全員帰国がなかった。

帰国後も、ヴォゼヘルゴやクラウド（レオン・ドラゴ合併で、国力は数十倍になった）が公費で、生活支援や物資配給、住宅の提供、ふたたび仕事をはじめするための補助金の支給をおこない、難民たちは、幸福を（かんぺきじゃないけど）とりもどした。

あたしたちが旅立てる条件がととのったことになる。

「やつと、最後の解決にいくのね」

あたし、そういった。

出発の日は土砂降り。

あたしたちは、ジョリーに乗って、なつかしい道をそこう遡行した。ただし、今回は警護や雑役をやらせるために、兵士数十名を、龍馬の牽く龍車7台に分乗させて、随ずい行こうさせたので、あたしたちは、ほと

んどすることがなかった。

まち出世したなーって感じ。

レオン・ドラゴの合併で、財政的には、かなり裕福になっていた。

ジョリーを改造して、金銀や螺鈿らでんや漆うるしや大理石や漆喰しっくいやウォール

ナットやマホガニーをふんだんにつかい、豪華ごうかで贅沢ぜいたくなものにした。

寝泊りにも、りっぱな旅館をつかい、車中泊などしない。大名みたいな感じだった。

旅の中心メンバーは、オリジナル・メンバーの女の子5人男の子5人に、ユリアスとR Z Dとソング・バロイ・カノンだ。

クラウドで留守番するメインの人は、バ裂。

はつきしいって、彼にまかせておけば、あたしたち、永遠に国に
いなくてもいいぐらい。じっさい。

天候はよくないが、旅はとても順調だった。

すでに1か月まえにアカデミアの事務局に申請し、大聖堂の地下

に入る許可はとってあった。

あたしたちは、^{アーキ}聖櫃のWの素材がなんであるか事前にしらべ、同じ素材をとりよせ、それをつかってWの欠けた部分をおぎなうVのかたちをつくっていた。お手製『V』だ。

接合面を正確につくらないとうまくくっつかないので、アカデミアの事務局にたのんで、欠けたWを写メに撮って送ってもらい、微妙な凹凸があうように精密に再現した。

その仕事をミハイルアンジェロとミーシャが精魂こめておこなった。かんぺきなし上がりで、ぜったいにぴったりあう！

：・はずなんだけど。

エリコがそれを手にして、いぶかしげにいう、

「うまくいくかなー」

あたし、きく、

「なんでよ、かたちあわせたんだから、^は嵌まるっしょおー」

A N K A が笑い、

「ただのパズルじゃないからね。

かたちがあえば嵌^はまる、つてわけじゃないよ。

コマンドが発せられて、プログラムが作動するような、なにかがなくつつちゃ、かたちがあっても、嵌^はまらないとおもう」

平原を横断し、森をぬけ、丘陵地帯に入り、けわしい山岳がちかづく。雨が雪になる。

坂道はしだいにきつく、せまくなる。登ったかとおもえば、せまい峡谷に入り、それでも、じよじよに高度が上がっていくのがわかる。木が低くなり、数が減り、岩がいかつく、荒々しくなっていた。植物は見えなくなり、いかめしくとがった岩岳の世界。

吹雪だ。

やがて、岩山が見えてきた。アカデミアの尖塔は、あの日のまま、その上にそびえている。掘削された道を登った。アカデミアの門衛

は、無言だった。雪風が虚しく石壁を敲く。

すべてが懐かしくおもえたが、同じには見えなかった。

大聖堂の偉容は雪雲の曇天を半ばおおいつくしている。石づみの壁がかなしく、切なくおもえた。

外国から来る学者のための大きなホテルを予約していた。

パレス・ガルニエ（パリのオペラ座）のように絢爛な建物で、内装の大理石は、やわらかな黄金いろにかがやいている。

あたしたち兵士もふくめて総勢50人ちかい。ワンフロアは貸し切り状態だった。

荷物を整理すると、あたしたちは、すぐに出かける。

ANKA、ジャジュ、ユリアス、エリコ、エチカ、ミーシャ、ユ、あたし、非録斗、イース、迦楼羅、ソントグ、カノン、バロイ、RZDだ。

なつかしい、せまい路地をいくつかとおる。背の高い建物にはさ

まれたこの狭隘きょうあいな裏路地からも、空をなかばおおいつくして、そびえる大聖堂が見えていた。

歩みにつれ、巨大なすがたがちかづく。

この日このとき、大聖堂にはだれもいなかった。あたしたちは、管理事務所にまわる。若い黒僧衣の男が鍵束を持って案内してくれた。鍵の束がジャラジャラと鳴る。

なかに入ると、どこからイタルが見下ろしていそうな気がした。ユーザーが死んでも、永遠にうごきつづけるアバター。あたしは、そのまなざしを感じた。みんな、知らないふりをしているが、きっと、なにかを感じているはずだ。

まっ暗な階段を下り、聖なる部屋のまえに立った。

聖櫃せいひつの部屋に入る。

「さあ、嵌はめてみようか」

ANKAがいった。あててみる。接合面のかたちはあっているよ

うだった。けど、嵌^はまらない。

29

ねののが奥義なら、奥義なんざないってコト……
チャッチャッ

「やっぱしダメかあ。

かんたんにはいかないようだねー」

エリコが嘆息^{たんそく}する。

なにがいけないんだろと考えながら、みんな、お手製の『V』を
じつと見ながら、だまっていた。

シーン。

そのとき、廊下に足音が。

「しよくん、やはり、来たか。

もつとも、しよくんらが来なくとも、運命にみちびかれて、ほか
のだれかが来ただけのことだが……

さだめというものは、ふかしぎなもの。

結果は決まっているのに、最終の決着を見るまではこたえがわからない。だから、運命というものはないにひとしい。

時折、人は、運命をあきらめると言うが、それは不可能事だ。神だけがそれをなせる。

神があきらめたいとおもうとすればだが……」

明澄めいちような笑い声がひびく。

全身白いすがたの、流麗りゅうれいな顔、誇り高く神々こうけいしいその人。

「学長っ!？」

あたしやミーシャは、すつとんきような声を上げた。エリコは、

「あっ」といったし、ANKAは、眉を上げた。

男の子たちも同じようなもんだったが、イースだけは、顔のむきを変えることさえなかった。

イクシュヴァーンは、神が天空から降臨したかのように、まばゆ

く炎のような雲に身を包まれている。

彼は、宗教的な厳肅さで、いった、

「すべては、I Eの望むがままに成就した。じようじゆ

すなわち、すべては、いよくんが望んだとおりになった」

A N K Aが糺ただしている、

「それは、いったい、どういうことでしょう、学長」

イクシュヴァーン、微笑む。黄金の微笑。それは、人を真理への難問へと惹ひき誘いざない、魅了する、神なる哲学への誘惑者……みたいだった。

「言葉どおりだよ。

アカデミアは真理を求める」

「リアル・ウイルスがわたしたちの望みだったというのですか？」

「しかり。私の教えたとおりだ。教えは少しも変わらない」

A N K Aがあたしたちのほうをむいていう、

「ムダね。

彼は、環境的な人物。ただ、プログラムにしたがってうごいていくにすぎない。

ウイルスにやられたプログラムの末端にすぎない」

R Z D がつぶやきのようという、

「そうかもしれぬが、俺たちもまた、自由意志設定みたいなものだ。

プログラムと大差ない。ふ。そうじゃないか？

俺たちは、じつさい、なにもわかつちやいない。そもそも、わかるとは、なんのことなのか。どういうことなのか。

賢^{さか}しい人がなにかを知っているといったって、なにもわかつていない人となんら変わりはない。3歳児とだって、変わらない。眠っているのと変わらないし、死んでいる者とも変わらない。

世の価値にとらわれて一喜一憂するすべての人のおもいは空^{から}まわりにすぎない」

あたし、なぜかそのとき、R Z Dがイタルに似ているような気がした。その暗鬱で、狂犬のような滾たぎったまなざし……。

「どうした、ユリイカ？」

「なんでもないわ、R Z D。」

なんか、あんた、イタルに似ているような気がただけ」

「やつは、かつて俺のライバルだった。むろん、現実の世界での話だ。」

知っているとおもうが、イタルは、v v wのヴォーカルだった。

ちなみに、叭羅蜜斗がベースで、普蕭がドラマー。基本3人だったが、△裂がギターで参加したことがある。マコトやは、その友人だった。つまりかつての5神ごしん、現在の4神しじんは、みんな、つながっているのさ」

……考えてみると、ふしめふしめで、その全員に会っている。これってグーゼン？ いいえ、いまおもえば運命だったとおもう。

R Z Dが言葉をつづける、

「十七のとき、ライブハウスの出場権をめぐって、コンクールで競った。俺のバンド、R Z Dが勝った。だが、俺は、じぶんの負けをはっきり感じていた。

やつは、過激すぎた。だから、受け容れられなかった。反社会的すぎて、とうてい、ステージでやっていいパフォーマンスじゃなかった。

逆にいえば、俺たちのパフォーマンスは、社会に迎合していたのさ。受け容れられるような生半可なロックだったのさ。俺は、出場権をえたが、けっきょく、ライブハウスで演奏しなかった。

そして、やつは、また路上パフォーマンスにもどった。つかのまだつたが……

やつは、ワクの外ですら、まだ過激すぎた。公園の噴水にガソリンをまいて火をつけ、炎上のまえで演奏したりとか、な。警察沙汰

で追いつめられ、路上でのゲリラ・ライブですら困難になった。

だが、やつは、いっこう気にしなかった。

常識をいともかんとんに飛び越え、究極のパフォーマンスを演じやがった。

眞神山まがみやまでの焼身だ。やつは、究極のアヴァンギャルドをやりやが

ったんだ。だれも追いつけない。1人の観客さえいないステージだ。

まったくの犬死いぬじにだ。横変死おうへんしだ。だれも超えられない。

なんの意味もない。意味なんざ、ぶっ飛ばしちまった。生存を焼き尽くして脱却し、かるがると飛びやがった。天へ翔けちまったんだ。俺は、永遠の敗北でしかない。

生存しつづけてことは、そういうことでしか成り立たない」

あたしには、わかった。けど、あたし、いった、

「ふーん。

勉強にはなるけど、参考にはならナイわ。人は、いろいろだから。

んで、あたし、学長のいいタイいみわかるよ。

だから、リアル・ウイルスをやっつけなくっちゃいけないってコトだよ。

このウイルスを隔離か、駆除する方法を見つけなくっちゃ。

どうするー？」

イースが瞑黙し、

「なんだか、きみのいうことも、よくわからないな、ユリイカ。

まあ、どうでもいいや。

技術的にどうするか、それにしかきょうみはない」

「あたしだって、そうよ。

わかったって、しょうがないもん」

そうつぶやきながらも、あたし、考えた。

つまりは、さういふコト。イースのいうトおり。

むずかしいコトじゃない。

くだらねっつか、このばあーい、最もカンケーないモノが『りある』だとおもう。あたし、ケータイのディスプレイをタップした。

Super:Hyp - iz27

シぶっ（笑）！！

さあてとお。アクセス履歴からさがす。あった、あった。そー、たとえば、これ、こおゅーやつだ。

どー考えても、こんなもんで、どうにかなるはずがない。

あたし、ケータイのデータをコピペして聖櫃の蓋、RVのトコに貼る。つて、現実じゃありえないけど、ここ、IEなら、ふしぎじゃない。

するつてえーと……

「あれ？」

「えー？」

「まじー」

「うそぉー」

どうしてもくつつかなかったお手製『V』は吸いよせられるように、ぴったりとくつつき……Wになったーっ!!

R W（リアル・ワールド REAL WORLD）の完成だ。

浮彫文字は金の炎でかがやいた。

あたし、マコトヤの言葉をおもいだす。「最もカンケイないものがハマるのだ」

たしかに、嵌^はまったよ。そういう意味だったんかいっ?!

あたし、ANKAをふり返った。

「できちゃった」

「でも、どうして、ユリイカ」

「うーん。あたしも、ちよつと、ききたいくらいかなー」

イースがうなっている、

「でも、1つだけわかったことがあるね。」

つまり、これが、ユリイカ、きみがねらわれた理由じゃないか」
へ？

そっか。もしかしたら、あたし、ぐうぜん、これを持っていたから、バリユースにねらわれつつけたのかもしれない。

「そうだよ。」

リアル・ウイルスにおかされていたIEがウイルスを無効化するキーワードを持っているきみを削除すべく、バリユースを起動したと考えれば、ふしぎではない」

でも、だれが大聖堂にウイルスをしかけられるの？ しかも、叡智の究極のような難解なしかけをつくれる人間ってだれよ？

じっさい、ラグナレクか、マコトヤ・アマヤスぐらいのレベルじゃなくっちゃムリだ。

『kOO』を理解??するひつよーがあるンだけど、kOOへの解釈なんてもンがあるはずない。

あたしたちは、ただふつーに平常ヘイジョーするしかない。

特段のことわない。

そういうと、おもわせぶりないイーかたにする。

トクダンのこたあーない、とかいゆーと、特段のコトになつちやうっしょ？　だよね？　だつてさー。

平常ヘイジョーにしよーぜとかいって努力しちゃうと、トクダンのドリヨクになつちやうから。

でも、特段も平常ヘイジョーのうち。だから、ややこしい。よけいむずかしい。努力も平常ヘイジョーのうちになつちやう……

うわあ、ややこしい。

つまり、これを解く方法はない。たとえ解いても、満足はえられないし、真理を達成した感覚もえられないだろうし、ましてや理解なんてできやしない。

でなきやー、このあたしが青龍のはずナイジャン。そーユーコト

なんだよ。

だったら、だれでも青龍なんだケド、じつにそのとおりで『それが青龍の比類なき卓越性』ナンです。ワラワラ。

よーは、ぜったい、とけかれることのないナゾだったのだ。そんなナゾを生み出せるのはパーリ・クラスだ。いや……

あたしたちの考えかたが根底からちがっていたのかもしれない。ちがうとさえいえないほど、根底から……。たとえば、IE自身がこのナゾをつくったとしたら？

「これで、IEは、もとの理想の世界にもどるのかな」

エリコがそういった。

イクシュヴァーンが笑う、

「いや、そうではない。IEは、いま、しずかに陶酔とうすいしている。

エクスタシスだ。深い深い陶酔とうすいだ。果てしなくひろい。

あたかも、鳥がはじめて空を、わずかでも飛んだときのような、

超越の快感に酔っている。

崇高な感激に満たされて。

かららかで、さわやかで、きよらかな光につつまれて」

そして、ラグナレクのような笑みとともに、うすくひろがった。

香りのよう、空気のように、音いろのようになって、消えた……

そう。

ヤッパ、そういうことだったんだー。

あたし、嘆息し、

「よーするに、このウイルス事件って、I Eが自己を超越するためのはたらきだったのね」

イースが、

「自己超越……宇宙のすべてが持っている性質だと、イクシユヴァーンはいつていた……」

「そうよ。」

宇宙のすべてが持つから、I Eのプログラムも持つのよ。

ウイルスをしかけたのは、ユーザーじゃなくっちゃならない、プログラムがそんな恣意的なことをするはずがない、つてかつてに決めてつけていたあたしたちの考えかたは、かんぜんにおもいこみだったのよ」

「犯人は、I Eだったというのか。しかし、人に組み立てられたプログラムがそんなかってなことをするものなのか。それとも作者の意図だったのか、ユリイカ」

「今回のばあい、作者ではないみたいね。

マコトヤがいったわ。作者もウイルスにこまっているって。

そう、犯人は、I Eよ。

I Eが自己超越して進化するためウイルスをつくった、というか、自己の一部を改造した……………

だから、あたしを消さなくっちゃいけなかったんだけど、でも、

消してしまってもいけなかった。

矛盾、……自己矛盾よね。でも、その葛藤が自己超越のために、脱
タシス
自のためにひつようだったのよ。

IEはおもいをとげたんだわ。

まだ終わってないけどね。

シルヴィエがあるかぎり、きつとつぎの試練があるんだわ。きつ
とね（笑）。

でも、それでいいみたいね。

葛藤がなくちゃ、生命ってゆーもんは終わっちゃうんだろーから。
シルヴィエって、悪辣^{あくらつ}だけど、大事なんだね（笑）」

あーあ。

ちよーつまんねー。

つーかさー……

光の満潮があたしを呑みこんで成層圏のはてまで飛翔し解き放

たれてその広大な海はやがてしずかな湖水のように澄みきって深く
かるやかになって信じらんないくらい自由自在でからだがうすくひ
ろがるから森羅万象しんらばんしょうになって数百億光年の宇宙を超えて涯のない
真の無際限になつて眷族をひきつれた青龍が黄金の靄をまとうお辞
儀しながら香を焚いてサンスクリット文字の聖句で誦された声明に
変じてあたしを莊嚴し、あたりまえで、ふつーのつまんねーありふれ
たニチジョーエクスタシスそれが青龍 *ékotais*
あたしより強い者も、エライ人もいない。

30 ゲームは終わった Game is over...

「んじや、いこつか？」

あたし、そういった。

大聖堂を出た。

広場に降りる。

ふり返ると、階段の上にイタルが見えた。

いままであかるい場所で見たことがなかったから、気がつかなかったけど、彼の顔の左はんぶん、というか、額の上から鎖骨の上あたりまで、1匹の青龍が和彫りの刺青で彫られていた。

額の上、はえぎわから、緋いろの髪を分けるように尾がはじまり、左眼をまたいで、頬骨にうしろ脚があらわれ、左あごの下あたりにまえ脚が爪をとがらせ、長い龍首が喉の左を走り、鎖骨の上で、炎のような口をひらく。牙をむき、眼はかつと睜みひらかれ、見る人を恫喝どうかつする。

鱗うろこの1つ1つが細密に、精くわしく、くつきりと、あざやかに彫られ、玉虫の鞘翅さやはねのように、虹のような青で、なまなましくかがやいている。

けれど、イタルの現象はAirみたいで、なかば透けていた。だか

ら、歩きはじめると、だんだん見えなくなっていく。離れれば離れるほど見えなくなる。

かんぜんに見えなくなるまえに、彼が少し微笑んだような気がした。たぶん、気のせいだとおもう。じぶんが青龍だから、そんな気になったにすぎない。

イタル。ふしぎな存在だけど、みなもとメ裂とかマコトとか、4神たちのあの哲学というか、思想の源が、青春時代に体験した彼の死という衝撃的な事実に端を発していたんじゃないかみたいにおもえている。そんなふうに、かつてに空想してみる。RZDを見ていると、そう感じる。妄想かナ？（笑）死は人を考えさせる。

たそがれ
黄昏に影が長くのびる時刻だった。

光のあたる部分は茜いろをおびた黄金いろで、にぶくまばゆく、陰翳の部分がまったりと濃く深い。

憂鬱な悪夢みたい。

ANKAがケータイで事務局に連絡し、学長が消えたがどうなったかわからない、と報告した。すると、事務局職員がたんたんという、

「ええ、イクシユヴァーン学長は、消去済みです。失礼ですが、あなたは」

「消去ッ!/? わたしは、ANKAです」

「ユリイカさんをお願いしますか」

「ええ、どうぞ」

あたし、出た。

「青龍のユリイカさんですね。じつは、もう、話がだいぶすすんでおりまして……」

「はあ？」

「次期学長候補が9人いるのです。あなたも、その1人です」

「あたしが？」

「つか、学長って、環境的人物限定じゃなかったの？」

「いいえ。べつに決まりはありません。」

拒否されますか？　そういうかたもいますよ」

「拒否？　へー、いるんだ。ああ、でも、だいたい、だれだかわかるなー。」

どうせ、タカフシ先生とか、マコトや、×裂：…そのへんの人たちでしょう。どう考えても、ひき受けそうにないよね、あの人たち。

で、結果は、いつわかるの？」

「承諾されるんですね。」

結果は、明日の午後にでも」

「わかったよ。よろしくー」

切る。ANKAたちがげんな顔であたしを見てる。なんの話かわからなかったろーな。

「あたし、ここにのこるわ」

「えー？」

なぜか、あたしに決まる感じがしていた。

別れはつらかったけど、義務があるような気もする。

ちなみに、叡智の奥義を極めたあたしは、**QDQ1479** になっていた。

A N K Aやエリコ、イース、ミーシャも正義の戦いの偉大な功績によつてクドク・ポイントが大きく上がっている。

Anka **QDQ : 129**

Erico **QDQ : 115**

Iearth **QDQ : 128**

Measya **QDQ : 104**

あたしたち女の子の5人全員が国王になる資格を持ったことになる。

これであたしがいなくても、クラウドは国王不在にならない……

翌日、あたしは、アカデミアの学長に就任した。非録斗には、助

手としていてもらうことにする。

とうぜん、新規登録ユーザー相手に大聖堂で基礎講座を開催し、講義をしなきゃならなかった。

それは就任したつぎの日からあった。

けど、あたしは、あせらなかった。べつに、立派な講義をするひつよもない。つたえるべきことがつたわれればいい。

それは、きよくたんにいえば、一言でもいいのだ。

演壇に上がって、いきなり「喝っ！」と裂帛れっぱくの声を発するとか（で

きナイけど（笑））。

あたしだって、修業時代は、ただただ茶わんを見てろ、っていわれただけだもん。

いまにして、意味がわかる、っーか、なんだったのかわかる気がする。

ただ、ANKAたちがさっそくあたしの講義を聴講に来たときは、

ちよつとアセったけど。てれたなー。

そんなあたしでも、いちおー、アカデミアの学長さまであり、青龍の位を持つ者であり、このIEの世界では、かなり大きな権限を
持っている。

「それをつかえば、不可能ではないわ」

ANKAがそういった。あたしも、そうおもう。

あたしたちは、監視委員会や管理局を通じて、公式に履歴ログを涉猟しやうりようして、IEの作者とも連絡をとりながら、専門家を紹介してもらい、リアル・ウイルス事件（笑）のめんみつでしようさいな全面的調査をおこなった。

っていつても、あたしは、なんもしてないんだけどお（笑）。

数日にわたる調査のすえ、ANKAは、コーヒー片手の午後、結果をあたしたちにこう報告した、

「正常になったIEの機能をつかって、作者や管理局の協力の下、

かんぺきなスキヤニングをおこなったけど、けっきょく、ウイルスが外部から侵入したと考えられるような痕跡は、まったく見つからなかったわ」

剣をかかえてきいていたイースが、

「じゃ、やつぱり、I Eがじぶん自身に革命を起こしたんだね。

ぼくらの苦労は、いったい、なんだったんだ、つていいなくなるね」

A N K Aが微笑とともに、ため息し、

「しかたないのよ。

わたしもいろいろ考えたけど、そもそも、I Eのすべての歴史は、そこにむかっていたんだわ。

シルヴィエのような国ができたのも、そのせいよ」

「どーゆーことなのー？」

ミーシャがそういつて眉を上げた。

「歴史の話になるけど、いい？」

神聖帝国のさいしよのころの話よ。

シルヴィエ聖教の教祖で、イサという聖者がいたことは知っているわよね？

彼が信徒たちに教えたことは、

『自己への執著を捨て、

人を愛するとき、

その魂はきよらかで、

最大の肯定にたつする』

だったの。ふしぎにおもわない？

現実主義の権化のような帝国も、その出発はI Eの理想そのものだったのよ。それなのに、どうして、物理的な現実主義、科学主義、功利主義的な国になってしまったのか。いや、そういうことは、歴史上、よく見られることだわ。ひんぱんにね。

でも、考えてみて。

IEは、意図的にシルヴィエをつくったんだわ。

意図的に、じぶんの殻からから、脱却しようと、こころざしていたのよ。いいえ、いまも、そうなのよ。まさしく『自己への執著を捨て』ってことなのよ。そういう意味では、じぶんのあるべき理想のすがたを、まっとうしたんだわ。

シルヴィエが最もIEに異逆いぎやく的な存在であること、つねにIEのアンチテーゼであること、冷厳で、人の哀しみも苦しみもまったく意に介さず、なんの憐憫れんぴんもなく、人間には理解しがたい、血も涙もない非情な障碍しょうがいとして、壁のようにそびえる存在であることには、意味があるのよ。

旧型『美しく道徳的な理想の世界』への固執をかなぐり捨てて、『力だけの現実世界』を受け入れ、自己を超えた、新しい地平線にたつする。これが今回の事件の背景ね。

聖典盗難事件はその一部だわ。I Eがアカデミアの騎士たちや特別高等警察をうごかし、シルヴィエにわたしたちの位置情報をリークしていたのよ。

でも、よく考えると、I Eのためだけじゃない。

非情なりアル・ウィルスのまえでは、だれもが自己を捨てなければ、勝てないところへ追いこまれるから。

それが自己革命を誘発し、自己超越への叡智えいちの道みちを啓く。I Eのためだけでなく、わたしたちのためでもあったのね。

だって、じぶんがどんなに苦しんでいても、同情も示さない強敵に對したときは、じぶんの苦しみ棄て去って立ちむかうしかないでしょう」

エリコがいぶかしげに、

「でも、なっとくできないわ。

だってさー、シルヴィエの代々の皇帝だって、アバターでしょ

う？

帝国の人たちだってアバターだし、つまり、わたしたちと同じユ
ーザーなのよ。ゲームしてる人間なのよ。

いくらなんでも、プログラムにあやつられちゃうものかしら」

イスがしずかに、

「されない、とほいい切れない」

ANKAもうなずく、

「それについては考えてみたけど、やはりIEはデータをちよくせ
つ脳に送信するから、一定の影響力があつたと考えるほうが正しい
とおもう。

たぶん、それは神からの啓示のように感受されたんじゃないかし
ら。天啓のようにね。

きつと、皇帝ジニ・ムイのころにも強い確信をとまって泛
かんだのよ。

たとえば、『我こそが聖典を所有するにふさわしい。我こそが聖典の真の所有者である』とか、ね。

で、じつさい、聖典がシルヴィエの皇帝もとに、現象するようになると、驚愕とともに、ムイの狂信はさらにエスカレートして、『聖典を、聖典があるべき正しい場所へ、神が転移させてくれた。我が手に神がはこび、我にそれを託す。

おお、現実だったのだ。まさしく我こそは、神のみとめた全世界の支配者なのだ』的な感じかしらね（笑）。

それでもって、

『聖典の略奪者であるユリイカという少女がいます、神のお告げが夢にあらわれた。

聖典を奪い返すことが皇帝の聖の聖なる義務である』って、感じになったのかしらねー。

そして、ログを閲覧し、ジンと手を組み……まあ、ぜんぶ想像

だけど」

「うん、いわれると、あたしもそんな気もしてきた」

「IEは、帝国をつかい走らせるだけでなく、それ以外にも、さまざまな者をつかってユリイカを妨害しけど、究極的にはユリイカにウイルス駆除をしてもらうことを希求していた。

……自己超越のためにね。

もしかしたら、犯人は、環境的人物かも、って考えがあたまをよぎったことはあったけど（ユリイカとラグナレクのところへいくとちゅう、ユイゴート山のまえで話をしてたときとかね）、基本的に、わたしたちは、まさかプログラムがそんなことを意図するなんて考えてもいなかったわ。

でも、いまはもう、そうとしか考えられない」

「てゆうか、そうかもしれないんだけど」

あたし、昨日今日考えていた考えをまとめながら、たどたどしく、

「でもね、あたしたちの感覚が根底からまちがってるかもしれないのよ。

うまくいえないんだけど、I Eのほうが人間より上だった、つか……I EがI Eを人間につくらせたってゆーか……

つくられるってことが、じつは、つくるってことだった、つか、なんていったらいいの？

あたしたち、つくることがしかけることで、つくられることがされることって考えているけど、じつは逆かも、みたいな……

もっといっちゃえば、I Eが、じつは作者を存在させていた、みたいな……

それ以上に、I Eが人間を生じさせた……、つまり、I Eをつくらせるために、数千万年まえに人類の祖先を生じさせ、数十億年まえに地球を生じさせ、数百億年まえにビッグバンを生じさせた、っていうか……

なんていうか、ふつ―は原因が結果を生むっていうけど、ほんとうは、結果が原因をつむいでる、みたいな……

つくるってことが従属で、つくられるほうが主体的っていうか、受身と能動・使役との関係の解釈がじつは逆だったっていうか……

原因が結果で結果がじつは原因でした、みたいな、うーん……

時間の解釈がほんとうは逆で、過去が結果で未来が原因だった、みたいな……

なんかさー。言葉がなくて、いいあらせないんだけど」

みんな、あぜん。あんぐりして、なにもいわない。

「ユリイカ、なに、いってんのー？」

やつと、ミーシャがそういった。あたしは、

「だってさー、もし、あたしがあれをケータイで見てなかったら、どうなったわけ？」

あたしは、ぐうぜん、それを持っていて、ぐうぜん、IEのユー

ザーになっていて、ぐうぜん、I Eにそれを発見されて、ねらわれて、……なのかしら？

できすぎじゃない？」

イスがうなった、

「うーん。まあ、その点にかぎっては、そういわれてみれば、まあ、たしかにそうかもしれないが……」

A N K Aは、だまっていた。エリコは、

「ぜんぜん、わかんないよ。」

つーか、ンなコト、わかってどうなるの？

人間がいるからI Eがつくられた、つてのが、I Eが人間につくられたから、人間がI Eをつくった、だから、人間がこの世界にいる、つてのもありかもつて、あんた、いうんでしょ？

そんなの同じことじゃん。

わたしたち、砂糖があまいからあまい、つて感じるとおもっていい

るけど、その解釈が逆だったからって、なんなのよ？ 舌があまいと感じるから、砂糖があまいんだとしたって、たいして変わんないじゃん。

どっちにしろ、わたしたちは、過去をどうすることもできないのよ。

だから、結果が原因を発生させるんだとしたって、それを知っても、考えても、なんの意味ないじゃん？

どうにもできないんだからさー」

「わからないわ。

どっちでもナイのかもしれないし。

筆記試験や問題集じゃないんだから、こたえなんてどこにもないのよ。

ってゆーか、それですらない、いいえ、そーゆーふうですらないのかもしれない（笑）

問いつめても、意味はないし、そもそも、いみってなんなの、みたいなの……って感じなんだけど……。

だつてさー」

「だつて、なによ。わかりにくー」

「ショギョーわ、ムジヨーなのよー♡」

怒ったような、げげんな顔で眉を上げたけど、けつきよく、エリコは、笑うことに決めたらしい。ぷつ、って笑ったあ。

あはは。

彼女たちがクラウドに帰る日。

あたしは、学長の儀礼服を着て、城門のまえまで、みんなを見送る。

新しいクラウドの王ANKAを見送るには正装がふさわしい。

「ユリイカ、きみならできるよ」

って、イース。

「元気でねー、うえーん!!」

泣くなよ、ミーシャ……

「またすぐ会おうよ。」

決まってるさ」

なら、^{はな}涙するな、エリコ。らしくねー。

ジャジュや迦楼羅、エチカやユユと握手した。「がんばってね」

非録斗も彼らと、かたく手をにぎりあう。彼は、あたしの秘書官として、このアカデミアにのこるからだ。

「さ、ゲームは、これで、いったん、終了よ」

A N K Aが最後にそういった。

そういつて、ケータイを出し、ログオフにする。

イスも、エリコも、ミーシャもケータイを出した。

あたしも、ログオフにする。

消えていく記憶のように、すがたが消えていく。

入るときは、城門から入ったのに、出るときはこんなンなんだ。

バイバイ……

もお、じぶんの部屋にいた。

時計を見ると、ゲームしていた時間は、1秒間ですらない。ふしぎだとおもう？

ケド、現実だって、0秒間の体験じゃなくね？

A N K A や イースや エリコや ミーシャと、ずうつといっしょにいたけど、じっさいわ、べつべつの時間にゲームしてたのかも知ンナイしー（笑）。

† epilogue †

朝だあーっ。

✦ ㊦ あたし ㊦ ーっ !!

起きて登校した㊦ お !?

昨夜は寝る時刻がおそくならなかったから、眠くもナイし。

とーっても。爽快だあーっ。

「おは㊦ー、ユリイカ」

「おは㊦☆」

友だちとのあいさつ。教室入れば、すべてぐわ、いッもどーり。

アハハハ あは あは（呷羅蜜斗かよ）

コウキくんは逢ったわー。

「おはよう、コウキくん ♡♡♡ !!」

ちよつと胸、うずいてなくね？ クスクス、そおーそおーそれが

ニチジヨー。ヘイジヨー心。

んで、学校終ワッテ、家帰った（笑）。

ANKAからメール ♡♡ 来たーっ!?

『やっぱさー、

あし、わてUにー、

おクつてくんナイかなー

キネンにさー、

モッテおきたいンダよねー』

しやーないなー。

あたしが聖櫃に貼りつけた、ムイミな大神咒真実不虛超絶究極真

最奥奥義を送ってやったわー。そくせつしゅわっ（即説咒曰）!!

つーか、
これ、

.+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β''' .+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β''' .+:。ooo。。

(*𐄂\$)!

あ t=Uのふ口フ t=" おー(∀)!

トも t=" ちわ (ゝ𐄂・○)*:.. ☆..。

ゆL1汰 ヌ いUのソリや t=あソ(ω)

コンぐらL1力な(◆、V°)*.

どω②絡ωで<でるト嬉UL1 でつ(*●𐄂∀<\$)◆◇

L1 ッぱL1t=いヅU乙ル力ら(° 𐄂 °)

Σ (Pq ∃ Δ ∫ o○*)*° / 〰 ★〃

乙力 絡み矯正だ⇒ *藁(*凹Qωo 𐄂*)◆

柿仔ヨ口 d・3°)◆。 +

ス t=あ-トッ(\$∀)a

.+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β''' .+:。ooo。 ∈ ・♥♥≡ β''' .+:。ooo。 。

完